ず、功德すくなしといへども、深く極樂を願ふ。すなはち本願に背くことなし。必ず引接……したまへ。」

といつて、「したまへ」と爾時首を垂れた。鍋の底なる炎も伏して、しばらく寂寞としたのである。人の知つたる發願の文も、折から、尊くこそ聞えたれ。

五

客は二人とも頭を上げた。外套なるは凍つたやうに唇にあてて居た、其の手袋の指を解き、蓑なるは袖を開いて、やゝ寛いだ趣見え、

「どうも難有かつた、爺さん。」

と少し居ずまひを直したのを見て、親仁言急に、

「これ、お前樣方、落着いてござらつせえ。又この願文さ聞いたわで、直ぐに出掛けてはなんねえだよ。あれ〳〵、風がどえらい哩。

せめて、向きの定まるまで、緩り休んで行かつしやれ。然うでないと、親仁が此の身體で、後を追ひかけざならぬやうなことがはだかるで、」

と思ひ入つて留めたのは仔細があらう、——出立つべくもなきものを。

蓑を着たのは氣に止めた。

「何か、誰か今の其の文句を聞いて、何うかしたものでもあつたのか。」

「あつた段か。つい一昨日、午下の事でがす。寒さにも饑さにも、太く疲れた姿の、年の少い、旅の修行者の、墨染さ着さしつたのが、宿を借りたさうに、門口に立たつしけえ。内で此の（弟子敬つて）を唱ふるのを聽いて、口の裡で、お念佛さ、十遍ばかり唱へながら、其れなり杖をつき直し、とぼ〳〵、山の方へ行かつしたのを、見て居つたものがあつて、あとで、これ〳〵と知らしたもんだで。

や！

日はまだ高うても此の雪路、暮れぬ内に峠が越せるものではねえ。それも南を指したなりや、山鳥の宿もありや、猿の茶屋も頼まれう。

北へ取つて名代の惡處、雪にかけては北國一の、中の河内へかゝつたとつては、雪解の頃まで……姿は殘らう、生命がない。第一路さへ取違へた、土地不案内な出家と見える。それ、追つかけろ、連戻せで、二人で、家を飛出しましけえ、何うしたやら、其の日の暮から、昨日へかけ、今日も風が止まねえだで、未だに音信はござりましねえ。」

蓑の人、聞きも敢ず、

「それは奇特だ。おや其の旅僧の行方を案じて、爺さんの小兒たちが出かけたのだな。嫁さんも一處にか。まあ、婦人の身で、而して幾歳になる、」と、太く動かされた風情であつた。

親仁氣もない顏色で、

「いんね、私許の倅が町から歸りがけに、其の話を聞いて來ただよ。

これは昨日の晝時分、嫁と連立つて、ものさ用達しに町方へ、其時は吹雪もこんなぢやなかつけえ、何處で吹籠められたか、此奴等は意氣地がなうて戻らぬだよ、はい。」

「あゝ、それで、其の出家が聞いたといふ、今の願文は、爺さんの口からぢやないのだね。追つかけた人も違つとる？」

「本家でがす。此の願文の本元だね。己がのは受賣りぢや。はゝゝはゝ、近頃分けて貰つた小賣だで、それでもお客樣方耳を傾けさつしやつた。これ、はあ、商の上手でねえ、品物が良いからだね。見さつせえ、それだで本家だけに商賣人を濟度しただ。

宿賴みたさうに、其ン時門口に立つて居さつしたが、例の願文を唱へるのに、耳を澄まして、それから、それ、口の裡で念佛さ念じて、杖に縋つて出かける所を、丁ど行き合はせて見て居た、といつけえね。それさ、佐五六といふ、はあ、矢張私等が獸のなかまだがね、これは穴籠をする狸でねえだ。

己よりは五つばかり年も下なり、猪見たやうな親仁でね、もし、」

と吃驚したやうに掌を盆に伏せて、目を賽ころの睨に眞似た、瞳がぱち〳〵一ぞろ也。大く口をあいて、

「ぽかり！と遣る、威勢の可い奴。

的が、其の雪と一處に、ちら〳〵消えさうになつて立去らつしやる墨染の法衣の袖を密と控へて、口利いた。（これは、はい、不躾ながら、宿をお世話申しやしよ。雪道は難儀の上に、これからさきは山坂になりますで、八つ前なれど泊らつしやりませ。今立寄らつしやつた家の主人は、御坊樣のやうな客人さ喜びますで、引返してござれ。）といふと、お客樣、此處でがすて。」

六

狸小屋の親仁は鍋の上に腕を拱き、

「其處ぢやわ、成程などというて、駈出されてはなんねえで、まあ、落着いて休まつしやれよ。あとで粥も煮べいでね、戰と此の雪路は、腹が空いては堪りごとねえもんだ。

出家が佐五六に言つたには、

（さて〳〵お恥かしい、行惱んで宿を借りたさうに他所目にも見えましたか。いや、いかにも寒

さに懈怠して、無理にも一夜の御無心を申さうと存じたが、内で讀まるゝ彼をば聞いて、忽ち心が開けました。佛名をさへ念ずれば、死ぬる所か直ぐに極樂。寒いも極樂、飢ゑたも極樂、日も未だ高いに、施主こそ迷惑。あゝ、勿體ない、南無阿彌陀佛々々〳〵々々、南無阿彌陀佛〳〵と念じながら、袖を振切つて、すた〳〵と笠を傾けて去なつしやる。

佐五六おぢい、茫乎其のあとを見送つて、それから本家の主人に逢うて、此の事を話しただね。急いで追つかけて出た二人の人は、其處の主人と、親仁でがすよ。

あとは未だ知りましねえが、何とお客樣、出家が一人お庇で佛になつたんべい。

だけんども、何もこれ、人を導かうの、教へようの、また宿をかすまい、齋さ振舞ふまいとつて唱へるではねえでね、惡く心さ廻さつしやるな。

倅ども返りをらば、町から干鱈など提げて來べいに、生憎の此の吹雪ぢや。蟹は、はあ、折角の御所望ぢやが、疱瘡の禁厭に軒にかけた甲羅さへござりませぬが、」

と何か物足りなさうな容子であつた。急に思ひ出して、膝に手を置き、打傾き、

「いや、待たつせえ、然うでもない、珍らしいお客樣ぢやで、蟹の方に心があつて、其處らの雪の中に居ようも知れぬ、風が凪ぎたら捜しますべい。何にせえ、これぢや目口も開きませぬが、ほう、」

といふ、鍋の蓋がばつと白い。

「いや、搖ぶるわ、畜生め。」

鼠がキ、、。

外套はひたと其の背を肩に寄せた。蓑の人打微笑み、

「いかに夢を見たやうだといつて、雪の中に蟹は居まいよ。」

親仁は眞面目に、

「もの、然うでねえ。過般の事だつけ。矢張本家の門口で、笊から出した商賣ものの蟹右衞門、恐ろしく活が良かつけがな、三疋まで、さら〳〵と横に這ひ出して、雪の中へ潛つたッ切、見えなくなつた事があるで、何處を歩行きをるか知んねえだよ。

是を聞くと頭巾の中から、屹と親仁の方を見た。蓑を着たのは話の序といふ風して、

「本家といふのは、同一今の其の何か、」

「はあ、願文の卸元だね。」

「寺ぢやない？」

「えゝ、在家とも、お前樣。舊の庄屋樣の家でがすよ。」

「其處に、ふむ、ぢや其處に智識が居らるゝのか、爺さんも其を習つた。」

「はい、いんえ、智識というて坊様ぢやござりましねえ。坊様は坊様ぢやが、二番の坊様、御次男で。お客様の前だけんど、村切つての學者でがす。村ばかりではねえだ、何處さ押出しても立派な先生。

先生には先生だけんど、何も私等が今唱へた願文は、其の人が作つたといふではねえとね、本元は大昔ぢやと、其の先生がいふでがすが、然うすりやお釈迦様はもつと昔、宗旨々々のお祖師様は矢張りそれをうけついだに違ひはねえでね、うけついでもお祖師さまなら、先生は先生で、學者は學者だと、私等思ふだね、何うだね、」

と村自慢、酷く本家を贔屓でござる。

幾度も頷いて、

「學者とも、」

「ね、然うでなうてはなんねえだ。小兒のうちから東京さ行つて、大學校とやら卒業しただね。村にも界隈にも澤山はねえ。」

「何といふ人か、」

と、口早に聞いた。

「大枝大太郎といはつしやる。

こゝに文學士の英名は、吹雪の中にぞ名告られける。

七

「これは、其方の方、一向に何にも食らぬの。尤もな、坊主蕈と蒟蒻ぢや、土地ッ兒の口にもこんな時でなうては旨うないで、無理もねえ。あゝ、それにつけても望ましつた蟹があらば、何でがすか、其方の方も食べるかね、」と親仁は坊主蕈と蒟蒻の煮たのばかりでない、音に聞く白魚か、小耳に挾んだ都鳥といふものならでは、魚も鳥も得食ふまじく見て取らるゝ、其の風采を右瞻左視る。

「食べる所か、實は其の蟹を食べに、此の雪國まで來たもんだ。」といつて、呵々と蓑の人。

「はて、道理こそ。」

親仁合點。

「えッちらおッちら、楚を一束ね苞にして、東京くんだりへ送つたわ、皆が好物と見えるだね。」

「楚とは、爺さん、」

（一束ね、）（苞にし、）たのは、雪の中にも香を籠むる、梅ケ枝のそれではなかつた。脚の形すつ

くと細く、屹と長いを、擬へて名に呼ぶが、其の風情敢て讓らず。岩礁潮の綠に青く、冷き苔を被ぎたるに、冬の月の影を宿して、眼に星の花開く、氷肌、玉骨、肉に馥郁として藁あるもの、雪の越路の蟹ならずや。

「楚蟹といふでがすがね、本家の大太郎樣が、それをはあ、東京さ、情婦の許へ送つただね。爾時でがすよ。門口で買はつしやる時に、楚が、のこ〳〵と這ひ出して、三つといふものさ、雪の下に隱れただ。

あとはそれ一束ね、釜うでにして、苞に入れて、小包にして出さしつけえ、魂消たもんでねえかね。

あの脚さ、横ッちよに啣へた形や、嬰兒の腕ウ嚙るとも見えねえだが、己が嫁ン女が遣つてから、餘り圖の好えもんでねえ。東京の上蔦さ、むしや〳〵遣らしつたかと思や、己强く呆れたが、此方衆も好きさうな、はて、變つた事の……」

と又つく〴〵。

勿、いひそ、翁。櫻鯛、花うぐひ、うぐひは彌生の鰭紅に、藤に鱗は紫なり。風情なるかな楚の姿、甲は碎けて花紅に、肉は削つて雪となり、脚は珊瑚を折るにこそ。其の花を抱かむに、其の雪を含まむに、其の枝を翳さむに、何かあらむ、女性の身。

外套なるは此の時、親仁の面を見返しつゝ、肅然と、座を固うしたにも係はらず、太く動かされた狀であつた。蓑の人更めて、

「別に何だ、都ぢや氣を揃へて、蟹を好くといふでもないが、しかし、遙々贈るほどだから、屹と好物には違ひない。殊に馴染なら、好なものは分つて居ようよ。

で、何か、其の人は東京に情婦があるか。今の願文を唱へて、知らず〳〵旅僧を教化したといふ、其の大枝といふのと同一人だな。」

「大太郎樣でがす、はい。」

「妙だな、」と獨言。

親仁わけは知らず壓へるやうに、

「妙なことはござりましねえ、氣の毒なもんでがさ。」

「いゝえさ、門に旅僧を彳ませて、內で念佛を唱へた人と、こんな山中の里に居ながら、東京に情婦があつて、楚か、其の蟹を贈つた人とは、何だか、別のやうに思へようではないか。」

「其處、其處には、もし、實もあれば、」

と手をやつた、今度は粥の、鍋の蓋が最う白い。搔い拂へども、吹きやれども、見る〳〵積る冷たき粉、飾のやうに目のあらい、破屋の屋根からも、壁からも、柱からも、外套からも、蓑か

らも、袖に染むなる旅の空。

八

「聞かつせえ、大太郎様は、其の大學校とやらを卒業した學者だで、それにはあ、豪く出來が佳かつけえ。此の吹雪さ見るやうに名高い越前の人になつて、何處か大な學校さ先生をして居ただ。國の、此の庄屋様の家はの、つい一昨年まで、總領の甚六殿が、あとを取つてござつたわ。

何もこれ甚六というて、戸籍へ屆けた名ぢやねえね。明とつて立派な名はあるだけんど、甚六には違ひねえ。三國港さ遊女廓の、勝次といふ藝妓どもに迷ひ居つて、いや、通ふほどに遣ふほどに、ものの千石餘持つて居た、水田の水が皆乾いて、龜裂の入つた所から一枚々々引剝して、紙幣にしてはよ、懷中へ捻込んで、汽車のやうに突走つちや、煙突から煙にするだ。

しまひにや着て居るものまで下から脱ぐほどになつて、どん詰りは味噌桶が、一石造つたまゝ賣物に出たといひましけえ。其の暮に藝妓どのを、新田様を勸請した港口の鎭守の中へ、誘ひ出いて、勿體ねえ、女も殺しや汝が身も死んだでがす。

心中ぢやねえだね。

女はお前様、のつけから唯の一度だつて、いふ事を肯かねえだ。滿月のやうにさ張のあつたもんでがす。

今時ありさうもねえけんど、これが又無理はねえだよ。

其の藝妓な福井のもんで、今の大太郎様の弟だ、甚六ごと男三人の兄弟の、末のが今年二十になる。金次様いうて、こりや小兒の時分から、一家の伯父御の養子分になつて、其處へ貰はれて行かしつけえ。

伯父御の家は、づッと三國寄だもんだで、其の金次といふ末のがの、路筋で仕方がねえ、遊女廓さ隅の方を密々拔けては中學校へ通はつしやる、凛々しげな、賴母しい所へさ、二階の欄干から、おつこちた。

はあ、其の勝次姐がね、次の次も對のじの字だとこかしたと。……えゝ、何の事だか、私等には分んねえが、濃い紫の藤の花を、二房二階の軒にかけて、お雛様の桃の節句と、五月の菖蒲節句の合間、藤の節句といふがあるか。其の房の間から、清い目を出して、花と同一藤色の袷を着て、鹿の子の襦袢の袖口さ、鯡鯉の浮いたやうにちら〳〵と、白い手を細うのばして、向うの軒を密と通る、金次を招いた事がある、と倅どもが一つ話。

もし、それからといふものは、少い奴等、見習ひをつて、藤の枝のない時にも、各自が軒下へ、桂をかける、蔓をかける、帶をかけたり、襷をかけたり、かけるものに事を缺いて、大根なら仔

細はねえだに、小兒が蛇をかけるでねえかね。下男が繩を釣したのを、夜路をかけた旅商人が、吃驚仰天、こんの内に首くゝりがある、起きろ、出あへや、出あへや、いうて、戸を叩かれた宿屋があるだ。

一面の大流行、惡いことは、戌の年に疱瘡があつたやうでがした。

色の戀の、婦人は十九で大先生。金次の方は一つ上でも、未だ學校の生徒だで、何處の辻で話したとも、いつの闇に手を曳いたとも、そんなこと、つひぞ見たものも、聞いたものもねえけんど、婦人はそないに押惚れただから、何が、お前樣。自分が亭主とおもふ男の、兄でねえか、甚六のいふことを、何として肯くべいね。

それでも狂人にはかなはねえだ。とう〳〵それ、新田さまの社で、慘い目に逢つた時、執着は恐しい。五百羅漢ほどづらりと並んだ、石燈籠の間々さ、拔け潛りして遁げ廻つたものと見えるだ。黑い地の繻珍とやらに、藤の花織出した帶が、お客樣、燈籠の石にからまつて、長く向うへ。體は笠石を緊乎抱いて、瘠せた腰で縋つたまんま、七ケ所傷を負うて、美く齒を嚙ひしばつた、刃物は向うへ怪し飛んで、野郎さ、」

と大の字に反つて見せた、腰の確な親仁どの。

「仰ざまぢや。天窓が潰れて居たといふで、石燈籠に打附かつたものでがな、新田さまの罰づらあ。」

九

「闇の師走ぢや、可哀相に、襦袢や帶に、たきしめた薫でもなかつたら、手探りにもつかまるまい。野郎さ太く、面くらつたものと見えて、これも眼のふち鼻のわき、顏中疵だらけ、撲傷だつけえ。逃げた方の血だらけな、細い指の手の痕も、あつちこつちにあとが消えねえ。石燈籠に霜がおりると、なほ美いもみぢが散るだね。

其のもみぢといやあ。……

大太郎樣、故鄕ぢやあるけんども、こんな片田舍に引籠つて、明暮願文を讀まつしやる、其の事の起因といふのも、矢張もみぢの頃だとの。

けんども、これは冬のもみぢ、霜で眞紅になつたのが、雪と一處にこぼれる時分だ、さうでがした。……

此處さ、」

と額に手を加へ、

「しく〳〵痛む病氣でね、振出しではなほらねえだで、何でもはあ、奥州の方の、場所は賑でね

えが、水の綺麗な、山の閑靜な溫泉さ、湯治に行かしつたもんだね。
すると其の過般、蟹を送つたことをいひましけえ、其の情婦といふのが、又、一昨年取つて五つになる、男の兒を一人連れて、矢張保養に來て居ただ。
えら、身分のある奥樣だといふでがすよ。
何でもまあ、話の工合が素ばらしく別嬪には違えねえね。これが、大太郎樣にや善智識になつたでがさ、昔から宗門にあらはれさつしやる女といふと、辨天樣でも七面樣でも、皆美しいお姿だ。其の奥樣といふ人も、婀娜な菩薩ぢやと考へるだてね。
處で右の、閑靜な湯治場のことでがす。客も澤山は居ねえださうだで、一週間二週間となる內には、廊下の行さ歸るさに出會す時さ、目と目で、お客樣。
會釋のするやうになつただが、未だ言をかはしたこともなかつけえ。
一晩、寢られねえ事さあつて、夜の九つ過ぎに、大太郎樣、湯殿をさして、はたり〳〵と行かしつたと思はつせえよ。
數のねえ客人もぐつすりなりや、帳場でも寢入端ぢや。寂として、二ケ所といふもの、廣いのと、長いのと、段梯子を下りて行く。湯殿まで、山一つ越えるやうな心持ぢやつたとい。
湯は、はあ、取附さ、横手さ、二つ仕切つてあつて、其の取附の湯は一段低いさ、此處が女護

の島だね、婦人ばかりが素裸で浴びるだよ。
横手のが男島ぢや。いやも、夜中のこんだで、大晦日の夜のちくらが沖見るやうに、寂——として、雫さ落ちる音も、びちや〳〵と嘗める容體。湯氣も凝つて、清水の底に白い雲さ、靜と澄んだを見るやうな。戸外が此の、騷しい風の音ぢや。己が話は聞えめえだが、いつか、己との、佐五六との、三男の金次樣と、三人に、茶を入れながら、夜話しをさしつた時は、此處ではあ、胸をそいで、魂を入交へられたやうに、げつそりと寂しくなつただね。
其の女護の島の方さ、ざぶりと、海へ、幽な物音が聞えたと云ふでねえかね。はて、桐の葉が散込むか、來る路すがら梯子段にも、ばら〳〵と影がさした。木の葉が吹き込んで、がさ〳〵足に觸つたかと思はしつて、ふと衣服を脫がうとして見ると、大な姿見のかゝつた、暗い棚に、新しい莫蓙を敷いた上に、おくれ咲の秋草の花さ、室の中に圍つたやうに、寢衣の羽衣が帶もなしにぞろりとある。
是を脫いだは、雪の膚と思ふにつけても、ぞッとするほど、山風が身に染みるで、すぐにどんぶり、男島の中へ入つただとね。
岩を削つて平かな、湯船のふちに肱をかけて、靜に溢れて音もしねえ、滿々とした溫い泉さ、どつぷりと浸つて、仰向けに長くなつて、好心持にうつとりとなると、向うへ白う、綿をふつく

りと積んだやうに、姿見さ中へ顯れた、朦朧とした姿が見える。」
戸が烈しく搖れたので、外套を着たのは手を組違へに緊乎と肩を抱いた。うつむく頸へ、颯と雪。

十

「おい、何うした。」
蓑の人は、活潑に腕をさしのべて、首垂れた其の連の背にかけて、輕く搖り動かしたやうであつた。が、敢て答を求むるとにもあらず。其のまゝ親仁に、
「何うした、それから、」
「然でなうてせえ、澄み切つた溫泉に浸つた自分の膚が、氣味の惡いほど蒼白い晩だで、や、我が魂さ、拔け出したかと思ふと、二つに分れただ。
すぐに三つになつたとの。
其の雪の膚で立つた姿さ、一つは黑光りのする床板へ横に倒れて、一つは目の前の岩壁へ斜かけに映つただ。皆これが其の奥樣だね。
（はあ、さては七面樣の權化だつぺい、いくつにも見えただな。）と己口い出すとね。

大太郎樣は、（いや、佛は一體だが、お姿は寺々なり、堂なり、御廚子になり、山の中になり、谷になり、又海になり、川になり、幾つあるか知れないよ。）と言はしつけえ。もし、分つたやうで分んねえね。
そして、いはつしやるには、大太郎樣、自分は最初、其の奥樣を一目見た時から、あゝ、綺麗な方だ、氣高い人だ、凡そこのくらゐな別嬪さ、世界に三人あるだらう、と何といふことはないが考へた、と恁うでがすよ。
其處で三つに見えただもんかさ。
主さ直ぐに目い塞いだ。
（貴下、御ゆつくり。）といふ聲がするで、はあ、と見ると、空色の扱帶くる〳〵と捲きながら、木の葉の落ちて居たと思ふ上へ、ちら〳〵と足さ見えて、髪の黑いのが暗い中へ、寢衣を曳いた裾の端も、すらりと天井へ見えなくなつたわ。二階へ歸つたもんでがすて。
主は挨拶も出來ねえだつた。
凡そ世界に、凡そ世界に、唯た三人と思ふ其の一人が、今、目の前を、二階へ歸つて行つただね、お客樣、可うがすか。
と、あとの二人は、何時何處で、何十年何百年、又何千年經つて、幾度生れかはつてから逢へ

るだか、それも長崎の果で見られるか、蝦夷の奥で拜まれるか。來年の仲秋の月さ待つ法はあれ、彌勒菩薩の出世までと考へると、矢も楯も堪んねえ。すぐにもあとを追つかけて行つて逢はねえでは、これが別れ、見納めにならうも知れぬと、不思議、希代な心になつた。これさもし、惡緣でねえかね。

すぐあがつて、それから、いつも眞直に下りて來る廊下さ、少しまはり路して、丁度、角座敷に住まつて居さつしやつたといふ。

其の奥樣の部屋の前さ、思ひ切つて通つただね。乳母どのと、侍女と、四人づれの湯治だね。すや〳〵と寢息が聞えて、閨と障子は暗えだに、廊下に明く月が射すだ。

角の戸袋の雨戸一枚、半分ばかり開けてある、ト見たればよ。聞かつせえ、奥樣は今の湯上りの扱帶のまんま、立膝に恁う、腰を少し浮しての、前へ乘出したやうに欄干の外へ肱を出して、」

皺手の二の腕、握拳で、親仁は丁と打拍き、

「此の邊まで、絶壁の上さかけて、白う曲げた頰杖ついて、下唇を一寸上へ、うつとりと、睡つたやうに、目を細う仰向いて、其癖片手を懷に、寛いだ衣紋の、乳首さ壓へたやうな姿して、向うの山を視めるのが、水晶の函の中から、透通るやうに、月あかりの凄い光に歷々と描かれたさ。霜月の末ぢやねえかね。

目の下は、谷の、藥研形に漆のやうに暗えだが、向うに見える山々さ、鷺が、幾つも、揃へて首を伸ばした鹽梅、寒い綿を着て寢て居るだ。

（貴女、湯ざめがします、かぜをひきますよ、）だと云うて、うつかり口い利いただね。

然うすると奥樣が、

（おや、）

はゝゝはゝ、私いふと、ホヤと聞えべい、これはあ、何うもなんねえだ。」

と額をたゝいてニツと笑顔、雪より白髪の多ければ、吹き込むなんぞ物ともせぬ。

十一

「此處さ、本家もうまくねえだよ。已、年紀い取つてから段々に覺えの可いは自慢だけんど、都上蔦さ口上は、もの煩かしい。

何でもの、恁うだに因つて、えゝ、それ、あれだ。

お前樣は早くおあがりだ、私は長湯をして居たので、ひや〳〵冷いのが好い心持で視めて居るが、おいやでなくば、一處に、まあ、此の景色見なさいまし。

あの、向うの方に、白鷺が、幾つも眠つたやうに遠くに見えます。其の長首の間々へ、角は立

たず切れ込んで、大く圓く、どんよりと月に薄光、ぼつと光つて見えるのは、はじめはあの向うへ、良人が行つて居ります、其の雲かと思つたが、よく視めると水のやうな。

つい寒いので不精して、山は遠くへ行つても見ず、障子も閉めて籠勝。それゆゑ、あの方角に、あゝいふ處があらうとも思はずに居ましたけれど、大な池か、沼でもありませうか。

と摺寄つて、肩を並べて、向うへ指さしをする所さ、成程、月夜の水の色だね。

これがさ、どうも因縁事だよ。

其の溫泉の山の中には、大な沼一つあるだけんど、樹立や山の形、又霧や雲の、包み隱して、めつたに宿の二階から、どの方角にも見えた事はねえ、といふだね。

こりや後で、土地のもののいうた事で、何でも其の夜さ二十日頃だといひますわ。月の上り工合で、水さ光つて、天に映つて、目についたものに違えねえ。

あくる日、大太郎樣、一寸支度さつせえて、山へ出がけに、あれだね、宿のものに、近所に沼があるかと、尋ねさつしやると、はあ、ある、と言うたでがす。

聞いたが、外の人ならば、宿の返事も、別に何とかあつたんべい。行つてはなんねえとか、可怖え處だとか、人捕沼だとか、何とか、氣い附けて饒舌るべいに、髯さおやかした屈竟な先生だから、話しても眞實にしめえ、と積つたかな。それともうつかりしたものか、何でもはあ、尋常

事ではねえ。

其處で、ぶら〳〵、山道の、月の出た方へ辿つて行くと、さしたる難所も越さねえで、畝つた兀山を一座、大く跨ぐと、直ぐ足許に、動かねえ、のんどりした大い月があつただね。

ひよろ〳〵した松の樹が、彼方此方五六本、葦蘆もぱら〳〵と疎なもんだが、向うのふちに、荻、尾花、一面に茂つたやうに、押合うて、鴨だの、鷺だの、薄日にぢつと當つてござるだ。

一發放す、十羽は擊てる、と大太郎樣思つたげな。又早や、鐵砲は得手ものだ、十四五まで、此の村に育つたで、私等一處に、裏山、向峰なんぞ駈け廻つて、獸どもさ腰だめで、ころりといはす手錬だで。

囊のものを取るやうぢやが、沼の兩方は、岩角、樹の根、一日かゝつても向うへは渡れさうにも見えねえだ。こりや仕留めてから——と、四邊を見るとの、茫乎山陰になつて、お前樣、船がの、……船がの、……櫂も一挺、奇妙頂禮、と引返して、其の晩、最うそれ知己になつた、奥樣にこれ〳〵だ。

昨夜月あかりに遠くで見て、あゝ高くては海かも知れぬ、何か夢見るやうな景色。あれが池で、もし鴛鴦でも遊んで居たら、此の世の中ではあるまい、とつく〴〵氣を取られて居なさつた、其の正のもの見せませう！　鴨なり鷺なり鴛鴦なり、手捕へにして、見せられる、幸ひ、こんな事

もあらうかと、好な鐵砲も持つて居る、一處に、と獵を誘ふと、二つ返事でお喜び。
金太郎を連れまして山めぐりに出かけます、歸つて來たら白髮にならうも知れぬなどと、緣起の惡い常談ぶつて、あくる日は好天氣。
出かけるといふ段になると、男の兒は當世ぢや、竹馬より鐵砲の方だもんだで、こりや早や、躍つて出たが、逡巡をしたのは、乳母どのと女中でがす。
合藥の臭さ、人燒く煙より大嫌ひ。ズドン、ドドドと來た段には、雷樣よりもおそろしい、とおともは御免を蒙つただね。」

十二

「其處で、この家來衆二人は、裏の山の上さまで送つて來て、向うにこんもり森が見えて、きよきよらと鵶の啼くのウ聞くと、最う何時飛道具の音が出るか、分んねえ、といふ肚だ。
それでは御機嫌よう、とこゝまで持つて來た辨當を渡すだね。
これさ、奥さまの心づくし、昨夜のうちに宿へいひつけて置いたもんださ。
陰には處々雪がある、風も冷いで、獵虎の毛皮のふつくらしたのへ、手を入れて居さしつけ。
其の手で風呂敷包さ受け取らうとさつしやるで、大太郎樣、いや此方へと、遠慮するのを引取つ

て鐵砲にかけて、」
と親仁は手眞似で、
「先づ擔いだね。坊ちやまは乳母どのの手を離れて、ちよろ〳〵と來て、先生の手に掴つただ。
何もこれ、いづれ、好物なものは入ツつらうが、辨當についたわけではねえだよ、鐵砲が嬉しいだ。
乳母どのがこれを見て、
(おや、)
又ホヤと聞えべい。已どうもなんねえだよ、はゝゝはゝ、まあ、聞かつせえ、」
と手を擴げて前へ出した、
「(いゝお父さまが出來ました、) いつたとの。
奥樣はずん〳〵、下り道を五足六足、さきへ立つて行かしつけ。やがて供のものの姿さ見えなくなつて、薄暗い森の下潛る時から、一處に手をひかれただ。獵虎の皮は取つて提げの、眞中へ小兒を入れて。
沼へ來たわ。
思つたよりは小さいが、こんな沼が、つい此の近間にあらうとは氣がつかずに、と奥樣は樂し

さうぢや。

が思ひの外で、鳥は一羽も見つからぬ。唯一羽、二羽、遠くの方で鴉が、ひよいと潛つて、ねんばりした水脚引いちや、けろり、榮螺が歩行くやうだね。

物蔭に隱れて居よう、岸を搜さうにも、歩行かうには踏處がないで、こんな時の船だ、と纜さ解かうとすると、結び目が濡れて緊つたか、堅かつたで、ぐいと引くとの、結へてあつた榜示杭が、ぐづ〳〵と弛んで、根から他愛なく、ぽきと取れて、横倒し。こんなのは、世が代るまで起上る瀬はねえだで、さらば寂滅、情なくずぶりと寢たわ。水が刎ねもせず、ぶく〳〵と、打込んであつた跡からと、倒れた地からと湧いたげな。其の榜示杭のこける時さ、フト其の正面に、何か字が書いてあつたのが、雨染のあとさ見るやうに、大太郎樣、目に入つたといふでがす。」

客は二人、思はずいひ合せたやうに、納戸の屏風の、雨漏のあとを見た。

「これにや、何十年前からだか、——

此の沼漕ぐべからず、船は何の世にか渡りの開けなむことを念じて、里のものども、祈願のために備へ置くなり。——としてあつたものだと言ふだね。

讀めねえ目ぢやねえだけんど、女にくらんで居るで埒あかねえ。すぐに胴の間へ入ると、あかも乾いて、わりに綺麗だけ。すぐ又艫の方さ押へにして、柄のあたりまでぐッすり突立ててあつ

た櫂を拔いた。平でおすと、續飯が和かうとけるやうに、粘つた水がつら〳〵と動き出しただ。七八間汀さ漕いで、奥樣の待つて居さつしやる處さ持つて行くと、手並は分ッつ、何は措けぢや、坊ちやまが勇んで刎ね込んだもんだで、輕く跨いで乘らしつたげな。これさ、胴の間へ敷かつしやれと、先生が、洋服の外套を脫いで擴げるとの。何の勿體ないというて、彼方はコオトとやらいふものさ敷かしつた。裏は、錦の袰になつたと。

漕ぐほどにの、靜かにすべ〳〵とある水の上へ、こひしきだ、ゆかしきだ、ゆくだわ、もしだわ、櫂の裾からすら〳〵と搖れて流るゝだね。沼へ入つてから、寒さも弛んで、あたりがのどかに、空もどんより、春十八番といふ風だで、縮緬の頭巾を脫がしつた。彼方は目のふちほんのりとしてござつたげな。」

親仁はしよぼ〳〵とする目を拭つた、其の手でふけを搔きながら、

「船が段々眞中へ行くと思ふと、こゝに其の、不思議なことがあつただね。空が近くなつたといふだよ。」

十三

「はい、そりや漕いで居た大太郎樣自分だけの、心持だ云はしつけえ。

櫂で恁う漕いで居る、舳さ少しづゝ上へ上へと上るやうでね、何の事はねえだ。水の坂さのぼつて行く氣がしたといふのでがす。山ならば頂ぢや。沼の眞中と思ふあたりで、船がひッたり留つたね、また留めねえではなんねえだね。それからは向へ押すも、後へ引くも、辷りこけて押沈みさうで危くて堪んなかつた、と言ふでねえかね。其處で一呼吸つかつしやると、思つたよりは、沼もぐるりとまはりが廣うて、岸で見たより、ものの五層倍もぼう〳〵とした大海、汀が幽になつて行く。……

はて、をかしいわ、と驚かしつけえ。奥様は、何も氣がつかねえ樣子での、大太郎樣が安からねえ顏の色さ、はあ、こりや話ほど鳥が居らぬで、其の所爲で氣を揉むだ、と察したと、……もの、見えるだね。

何といふ佳い景色、景色ばかりで不足はない、重詰を開けませう、其内には時刻があつて鳥が來よう、――と言はつしやる。

何と最う、鴉さへ姿隱して、大沼に石ころ一つ見えぬでねえか。

彼方の言で、些とは心も落着いた。大太郎樣さ、恁う沼が變に思はれるは、知らぬ夜道に高足を蹈むと同一事で、馴れぬ處に目が狂ふものでがな、氣さへ靜まれば何の事もあるまい。

其時、重箱さ開かしつたけえ、溫泉の宿でも、客人が退屈して、歸り風の吹かうか、と心配さ

するだから、こんな時と發奮んだわ、料理に手をさ盡しての、尤もはあ、沼へ漕ぎ出さうとは知んねえだで、木の葉さ焚いても燗は出來ると、口い固くして德利まで入つて居ただね。

阿母樣は何とおつしやつても、重詰の國、馳走の城の合戰な、坊ちやまが一番乘！

蒲鉾の手に持つて、乘り出いて、水ン中覗きながら、魚魚と名乘を揚げた。

魚は坊のお手々に、と奥樣がいはしつても、矢張、魚魚と手を振るだね。

大太郎樣さ氣がついた。水は淺いで、櫂をぐいと突込むと、ずぶ〳〵と鳴つてぐつと沈む、何十里地の下まで、そないな泥だか分んねえだが、五六尺ハヤ黑くなつて底が見える。

櫂をの、突込む時、とろ〳〵と其黑いものが流れるで、土が動くか、藻が分れるか、と目を留めると、何事かい、これさ、はあ、不殘鰻鯰でねえかね。のろり〳〵かさなりあうて、裝ひろげたやうにさ、其の夥しい事わい、鯰も鰹ほどの大い奴、五尺六尺とも覺しく、太さ大人の腕ばつかある圖體が、ぬら〳〵と並んだだ、中には弓形に反つたもあつけの。

これが、お前樣、一面でねえかね、今さ櫂をつきさして、水がおだつたので、ふうわ、ふうわ、浮き動いて、又何處さ風が吹くと、凝と底に伸び居つた、百も二百も一ッづゝひく〳〵顆を蠢かすぢや。

坊ちやまが言はしつた、魚魚な、もの、是だよ。

さあ可いものあげる、と、洋服さ手ッ首につけてあつけえ、珠を取つて握らすると、坊ちやまは是に氣を取られて、魚魚ウいはなくなつたね。

大太郎様計略だて。餘りはあ魚魚に心づかせたかねえ、何か知んねえが、奥様に見せたくねえ、と思はつしたとの。何を食べる氣もしねえだつたけんど、杯さ差されたで頂いてうけた、と云ふだ。

（貴女は、）

（お一つぐらゐ、）

はあ、お客様、これはあ一つ二つさ、いける、」

と指二本口へあて、

「奥様がいふだね、もし。

餘り綺麗でないやうだで、此の水には清ぎません。とさすと、うけて、それさ、それさ、お相酌。

ほろ〳〵と醉さまはるほどに、何處となく、さあ——と。

いや、厄介にゆすりをる、あれ、いふ下から、がたびしわい、」

と家の内を、ぐるりと睨めて、向き直り、

「恁うでねえね。寂しく、さあ引と吹いて來たがさ、汀の松は小せえに、大木の葉のゆさぶれる風の音だ。」

十四

「奥様は顔を上げて、薄り雲が一杯で、日の影のない空を見さして、

まるで銀河にでも居るやうなと、景色を眺してござらしつけえ。

其の時杯をばつたり落して、……

（おや、おや、）

やッと今度は出來いただ、はゝゝはゝ、もし大事な處だで、ホヤ〳〵を言うてはなんねえ。

（あれ、又彼處に、）

彼處さに、昨夜見たと些少も異らぬ處が、と手を伸ばして指しはしながらの、身體は船の、右の舷の方へ引いて言はしつたわ。

何と、遙ウか雲の下、昨夜と同一ぐれえ放れた前途に、あれ、矢張。

白鷺の首さ並べたやうに、雪の山が裾を引いて、一つ一つ、角なしに切込んで、どんより沼があるでねえかね。是は、とさ大太郎様、視め、さつしやる。其の奥に、又一ケ所、道なら百里遠

かつぺいが、一段雲に附着いて、白首が長う並んで、水の色がぼうつと見える。

そればッかりかい。

（あゝ、彼處にも私たちが、）ぢや。……奥様の目にも入つただね。其の沼さ一つ一つ、眞中あたりに船が浮いて、小さな人形が三つあるだよ。

南無阿彌陀佛、向うから、矢を射るやうに、此方からも礫の飛ぶやう、風を切つてすッと寄つた、奥様と坊ちやまと、自分と三人、同じ顏を九つに見合つた時、二人ともあッというて、我を忘れて突立つたわ。

船が傾くと、あゝ、叫はぬ。飛道具は魔物ぢやよ。舷へ建てかけてあつた鐵砲さ、がたりと落ちてカチリと鳴つたわ。引金さ外れただね、ぐゞッぐゥぐわあ！　どゞどゞと鳴り渡ると、四邊の水が眞黑になつただ。何千尾か魚さ浮いて、中にも長い奴が、胴中ばかり、水を離れて、のろのろと舷を渡つたさ。

奥様は蒼くならしつけえ、ぶく〳〵ぶく〳〵と船底から、圓い圓い水の泡が白眼で覗いたわ、彈丸で穴が開いただね。

了つた、とつて大太郎様、いきなり膝折つて、突立てた櫂を拔かうと、水さ覗くと、もし、お客様。

總身金色、黃金の鱗、長さ凡そ一丈ばかり、蛇の形した不思議な龍さ、件の櫂をぐる〳〵と卷いて、水の放れ際といふ處に、鬼のやうな口い開けて、眼さ怒らして睨むだね。

あゝ、いつか、こんな夢、見た事があつけえと、うつとりとさしつたが、忽ち身ぶるひをして、櫂を向うへ突放すと、纜がぷつりと切れた。

むく〳〵と早や水に浮び出す重箱さ搖りながら、船はくら〳〵と動出いたが、見る〳〵傾いて沈むでがす。」

眉を顰めていふ親仁の顏を、蓑の人は、凝と視詰めて目も放さず。

「奥様は膝に取つて、抱き緊めた、坊ちやまを、眞正面大太郎様さ顏に向かせて、

（坊や、坊や、父様と、）

おとつ様と云へ、と一聲いはれただ。

もし、思へば其の兒を助けるだつたね。大太郎様は九死一生、泳は出來たが水が重いで、其の奥様を一人だけ、緊乎抱へて、不思議に岸へ上つただ。膝に突伏した和かな死骸の、柳が雨にぬれた姿の、背へぴつたり顏をあてて、氣が弛んで絕息けただね。

目をあけると大勢ぢや。溫泉宿のもの總出の上、村長までついて來たといふものは、殘つた乳母と女中の口から、沼へ行かれたを聞いての騷動。この徒さ來て見ると、案の定ではあるめえか

ね。人中も忘れ果てて、奥様さ大太郎様の頸を抱いて、何故、貴下、坊やを助けて下さらない、はじめから私の生命は貴下に上げました氣だものを、助けられたが怨めしい、とはら〳〵と泣かしつけえ。

いや最う、昔獄門磔の、引廻しになるとつて、それから跡始末、萬端ね、東京さ邸へ歸つて、坊ちやまの葬禮の濟むまでといふもの、幾十人か人に顏さ合はせた度の苦みには、迚も較べものにはなるまい、と大太郎様言はれたことでの。

こりやはあ、察しられるでがすて。」

十五

「此土地は此方で甚六さ、三國の藝妓殺一件だね。

勝次姐やの死骸さ、抱主が引取つたが、こりや言ふまでもないこんだがね。甚六どのは、誰取片附けるものもねえのでがすでね。

もうそれまでに下女下男は、使ひかねるで隙を出す、第一佛様置かうず家さへ、人手に明渡さねばなんねえ所を、又何でがすわ。

死ぬまで惚れられるほどの男さ、萬事行方が違うて居るだ。甚六どのが、火水になつて三國が

よひする内に、疾くから人のものにならうとする、田地や家をの、金次乙子が、養父さ縋つては、幾度取直したか知んねえだね。又其の伯父御伯母御といふに、めあての娘といふもねえ、小兒さ唯た養子一人だもんだでの、身にも金子にもかへて可愛がるだが、あり餘る身上といふではねえで、本家と一處に瘦せただよ。

怜悧な兒だ、兒というても婦人に押惚れられる年紀だがね。養父にや何んなにか、氣兼苦勞さつせえて、これも瘦せたぞ。其の苦勞をはあ何故するだ、惚れた婦人に横惚イしをつた兄哥のためではあんめえか。こゝへ女が生命を吳れたね。

其の死骸の取片附けする頃にや、養家でも、最う〳〵、二進も三進も行かねえ處を、伯父伯母御も可愛い養子の心を察して、自分の家さ半分にして、本家先づ四つ割一分、屋根なら一棟、納戸なら、座敷なら、二室が處取り留めて、漸つと位牌を飾つたわ。

此處へ何と、大太郎様、洋服を着た旅僧見たいに、身體一つで歸つてござつた。

訃音は、行違ひになつたとの。東京では、お前様、湯治場から直ぐに、其の奥様の家へ歸つて、下宿へも歸んないで、萬端とひとむらひ、はて、引廻しにあつたやうぢや、と今でも顏の色をかへて話さつしやるは此處の事い。其のさ、魂とも血とも肉とも譬へやうさない人の、一粒種の坊ちやまを、我が過失、心得違ひで殺して退けた。奥様は最うそれから、姿も心も半分病人、そん

なかなしみを人に見せて、此方さ何と世の中へ、面さ向けよう、樣がない。山の中へ引込んで、百姓すると言はしつてね、大太郎樣、弟御の情で殘つた本家の離座敷へ、しつかりと膝を組んで、目を瞑つて手を合はせた、あけ暮れ讀まつしやるのが、はあ、己まで聞覺えた、敬つて、はい、西方のけしゆ、阿彌陀如來、觀音勢至を驚かし奉る願文でがす。

そこで、弟子になつたのは、東京さ學校の、帽子を被つて洋服着た、千と二千の少え學者のかはりに、爺樣の文盲二人。猪の佐五六と、狸の萬平、……己が名だ。案山子のやうな御前立。雨の日も、雪の日も、蓑笠で聽聞のしに行くだね。其かはりには、それ、鋤鍬を持たしちや、己が方がお師匠樣なり、葛、山の芋を掘らしちや、佐五六がお師匠樣。

でがすから先生は、猪と山へ行き、狸と野らに行きだ、願文を念じちや後生さ願つてござらつしやるがね。煩惱の絆は切れねえで、始終其の東京の奥樣の事を案じて居るだね。何も煩惱といつて、色の、戀の、逢ひたいの、見たいの、といふぢやあんめえさ。

大太郎樣も然ういふだ。溫泉の二階さで、月の寒い晩、遙かに雪山の中の沼をさして、良人があの向うへ行つて居る、雲の形かと思つたら、水のやうだッて奥樣が言はしつけ。其の時さ、旦那は亡くならしつた、未亡人さまかと思うたが、後で樣子を見聞きすりや然うではねえ、旦那樣は名高い軍人、歷然としてござるにやござるけれど、やがて何處かの國さと戰がはじまる、其の

下しらべに、海を渡つて行かつせえて、七年も八年も行方さ知んねえわけだとの。

行方は分んねえでも、旦那樣がある人に、逢ひたいの見たいのは、これはあ、密通だ、そんな不了簡のあるもんではねえだがね。」

十六

「奥樣は、長年獨りで寂しい上に、蝶も花もなくならかいた、坊ちやまが居なくなつて、氣病みに煩つてござると云ふので、太く、はあ、身體を案じて居さしつけね。

奥樣からは切々、文通、せめてそれを、思ひやりにいたしたゝ。

返事を吳れろとあるけんど、我が手で其の兒を殺したやうな、何で自分が、氣晴しになるもんだと、めつたに返事も出さつしやらねえ。

其のさ、返事をしねえのも、又氣にかゝつて心を責めるで、體さ揉んで居さしつけえよ。

又金次乙子は金次乙子で、はじめから、繩、蛇さぶら下げて、夜夜中、罪もねえ旅商人を驚かした、其種蒔の發頭人だね。新田樣の鎭守で、藝妓殺しさあつてから、評判に芽がふいて、浮名の幹が太つたわ、騷動に枝葉が繁るでの。

朋輩衆に面目なうて、是も中學の下りさしつけえ。

丁ど歸つて來さしつた、大太郎樣に相談ぶツて、東京さ、修業に行くといふ、色の白い、金次乙子の手を取つて、大太郎樣ためいきをついて言はしつた。

措け！此方のやうな履歴があつて、此方のやうな弱い身體で、學問に目まひがすると、中途で屹と自害する、大枝の血筋は貴樣一人だ。

跡を絶すな。

と御自分さ、世を捨てた氣だものを。

力業さ出來めえから、商ひでもして、良い兒を拵へろ、と意見をさつしやると、すなほな人だで、領かしつたわ。

早や大した資本もないこんだで、其處で、そら、天秤をかついだだね、小さな笊に魚さ入れて、師走の二日の日さ商ひはじめ。

都ぢや正月賣初だ。あと月のはじめでがす、祝ひかた〳〵初商ひと、日の暮方に大太郎樣さ背戸口を入つて來さしつた。朽ちた緣側には蓑笠二組、雪沓二足ころがつたは、佐五六と己が行き合はせて、願文さ習ひをつた、雪の暮さの。

兄樣々々呼ばしつけが、雪で重いやうな障子あけると、爐の此方さ、爺々二疋胡坐かいて、大太郎樣お眞向ぢや。胡粉塗つたやうな、天秤を笊から拔いて、兄弟分のやうに白い、矢張ちらち

ら雪のかゝつた、緣側の柱にたてかけさしつた、畫に描いた二十四孝さ、竹の子ほりのやうな形。雪を着て、雪さ被つて、素足に雪さ穿かしつた。薄赤いのは爪先ばかり、雪のやうな顏をして、笠の下から莞爾したわ、魚屋の金兄哥。はて兄哥といふ威勢でねえだね、矢張いとほしげな乙子よの。

それと見ると大太郎樣、ちやん〳〵こを着たなりで、緣側まで出さしつけえ。

（金次か、）

（兄樣、）

（おゝ、坊ちやま、今商ひの歸りかね、）

と佐五六は聲をかけただ、己、はあ、ぽろ〳〵と涙が出ただよ。

處で聞くと、歸りでねえ、商ひはこれからだと云はつしやる。三國口から一里半、雪は深し、柔い肩に荷はおもし、ものの一日かゝつただね。

（はて當事もねえ、）ツて、己が我知らず吹出すと、今度は佐五六が涙ぐんだだ。……お客樣をかしかつぺい、他愛はねえ。

さてお魚は？と尋ねると、賣物は向うから、もそ〳〵脚を出して名告つてござる楚でがした。おもしろし、口あけぢや、祝つて、しやん、買ひますべい、と佐五と己、氣を揃へて手を拍つ

と、ざら〳〵と金次乙子が、蟹を二疋さ取つて出したわ。中から、かさ〳〵と横ざまに笊を跨いで、ざくり三つ、雪の上へのさばり出ると、さく〳〵さく、鋏を立てて、一三昧、目を空ざまに駈け出して、三の字を崩して遁げるだ。」

十七

「あつと驚いて、膝で摺つて追つかけものした、金次乙子は埒はねえ、手がかじかんで摑まへはぐす。どつこい、と飛んで下りた、佐五六め、夜がかゝつて凍て氣味の雪に辷つて、何うしたか、山も谷も、猿や兎と、かけッこをする奴が、氣を張り過ぎて、向うざまにつんのめると、同一時だね、己も緣側へ尻餅支いて、ひよいと、鞍が天井へ口を開けたよ、はゝゝはゝ、いやはや。

（待ちな、金次、商はじめの初物だ、無鹽でも可い、死んだ勝次に手向けて遣れ、）

での、其蟹は雪にかくれたい。其處で自分も、弟が初商ひ、送つて遣りたい人があると、——處で爾時、其の晩さ、染々懺悔話さしつたのが、——右の奥樣の一條でね、お銀どのといふさうな。

尤もはあ、金次乙子も草鞋を解いて下つただ。已が一疋、佐五が一疋、故と買うたわ。總がかりで、ほか〳〵とうであげた。金次乙子が初穗ぢやというて、兄樣にあげさしつた三疋の、それ

がそれ東京のお銀奥樣の處さへ、苞入の分でがす。

これにつけると云つて、手紙を書かしつけえ、大枝大太郎。

同　金次、

と、これは乙子が手で、自分名をのせさしつたわ。

疾いが良い、とそりや猪めが雪の中を、村端れの郵便屋まで一走り、小包といふものにしたさ。歸りがけに、はい、どびろくを一德利、才覺の良い氣轉もので、澤庵一本へし曲げて繩からげ。行きにや被つて出かけたつけえ、晴れたで、月夜の雪道を、ざら〳〵と歸つて來ただね。

これから爐を圍んで、大太郎樣、其のお談義でがした。

已是をお談義といふだね、色咄には似つれども、發願のはじまりだでの。乙子は固より、兄樣も飲まぬだ。佐五と已と、ぐび〳〵、ちびり〳〵遣りながら、身に沁みて聞きつけえ。丁ど雪の晴れた月夜なり。壁の小窓はあけねえだが、此處等の三方さ、大く天窓の上押つゝんだ、雪山の裾九十九折に一ッづゝ、浪の寄る三國の海も、新田の池の氷も、裏の小川のちよろ〳〵水も、丁ど其の、人とり沼で見さしつた、鷺の首に挾つた空の水か、と思はれて、窓の障子の紙さ透かして、月あかりにあり〳〵と、三つになつて見えつけや。

前世か、娑婆か、未來か知んねえ、魂さ皆そんげえな處を一度は通るだと、悚然として、已念

佛さ唱へた時、話聲がぴたり止んだだ。
緣側から、芬と、梅の薫さ浸み入るではねえかね。本家自慢の、其の背戸の寒紅梅も未だ咲かぬ、それぢやが枝の影でもさすかと、己先づ振向いて鼻をひこつかすと、はて違ふ。
髮の毛の良い匂だ、髮つけの薫さね。少い時三國港のお祭さ行つた時、東京からわせた藝妓ぢやいうて、藝妓島田で、褄さ取つた繪に描いたやうなのが、盆踊の月の下、人垣を造つた私らさ前を、通つた時の髮の香ぢや。これがはあ大太郎樣、金次乙子の母樣に當るでがす。
佐五六が、づいと立つて、緣側の障子、開けると、何と！
雨戸は繰つたが、其外にや、乙子の天秤がたててある、緣側の柱に凭れて、綺麗な婦人が悄然と、懷手して、俯向いて、今の話を聞いてるだね。
風さ入つたか爾時、燈火がじり〳〵いうて、薄暗くなると、藤色に見えた其の小袖さ、白くなつてぽつと消えただ。
（やあ、勝次あねえ、）と娑婆ッ氣な賭博打さ、見知越で頓興聲。
吃驚して退かつしやる、金次乙子が、坐つた所に、又見えるだ。今度は白い手をついて、はつとつむりを下げたがね、髮が崩れて、爐ぶちにかゝつた、ト燈が消えて、」
といひかけて、ちりけ元搔いすくめた、親仁は、直ぐ茅の、屋根うらを仰いだが、浸み入つて

こぼるゝ雪、上から廣くかゝつたのを、手で搔い拂ひ、搔い拂ひ、珠數を以てするやうに掌を左右に振つた。吹き込む粉は風向で、或は右から、左から、或は前から、後から、時に上からひらめいて、稻妻の如く襲ふのであつた。

十八

「暗くなるとお前樣、さら〳〵と音がした、棟の雪さ辷つたなと思ふ氣の所爲か、自在竹の架つたあたりへ、白いものが見えたでがす。
あとは風になつたでね、佐五六は、あけた障子をしめながら、
（あゝ、蟹の禮にござつたか、）
（南無阿彌陀佛々々〳〵々々）己お念佛を唱へただ。」
「然うか、」
といつた蓑の人は、溜息とともにはじめて聲を。——默つて聞いて居た先刻からの物語が、胸に迫つたものであらう。
「禮に來たか。」
と又呼吸をつき、

「其の蟹が、嬉しかつたな。」
今度は爽にいつた。
「おい、どうかしたか。」
唯見れば、外套を纏へる人は、帶と思ふ腰のあたり、嬶娜に身を捻ぢて、床几にひたと俯向けに、兩手で顏をかくしながら、裾は眞直に焚火の向、右の足を少し上げた、美しい足袋の爪尖が、唯幽に震へて居た。
親仁心づいて、
「えゝ、これは。已つい話に氣さ取られて、粥の出來るを忘れたつけえ。冷えが強いで、焦げはせぬぢやか、彼方、お腹が空いたつぺい、お鹽梅のう惡かねえかね、どれ。」
「いや、」
蓑の人手でおさへ、
「待て、爺さん、連は何にも得食ふまい。」
「でも、お前樣、」
「可し、可し、」
と、言尻を落して頷くが如くに留め、

「何は、其の大太郎先生も、金次といふ人も達者かな。」
「はあ、」
立ちかけた腰を、又どつか。
「處が、それが不可ねえだね。」
「何、不可ん？」
と蓑の人のことば急なりける所に、外套の方は、自ら捻伏せたやうな其の、つむりを上げようとして、打悶えた氣色であつたが、又崩折れて打臥しぬ。
「それがもの、」
と目を睜つていふやう、
「其の晩さ、其處で燈をつけたが、何となく乙子の顏色、蒼ざめて惡かつたよ。話も理に落ちたわ、小夜ふけて、雪の氣勢も重くなつて沈んだで、これから三國へ一里半、お暇をすると言はつしやる。
寒さは寒し、見た所、身體の容子も常でねえ、是非泊れ、と大太郎樣いはしつけえ。內では親が案じるとつての、兄弟おもひの親孝行、無理に暇乞をさつしやるで、そんなら、とはあ、佐五六だね。こりや一杯機嫌でがす、腹も緊乎して居るで、今見た亡靈さものともしねえ。

笊はからげて一纏め、天秤を縱にかついで、乙子の手をひいて、其の一里半送つての、夜の內に又のんのこ、村へ引返したもんでがす。

翌朝未だ疾えに、村からは又半道ぢや、己が此の狸小屋の戸を叩いて、

（起きぬか、萬平、朝寢は情婦とすることだ、）

と六十越した猪めが、いや吐く事。

（昨夜は夜がら寢られなんだ、狸はどんな夢を見たよ。

やあ、これ一人寢かと思うたりや、此方が帶ひろどけ、起きぬけの其の褌、梅の移香がするぞやい、にう、）というて、こんな手つき、」

と其の手つき。

「ぶらりとふつて驚かすだね、駭かす下から、目を瞑れば、己も一處に南無阿彌陀、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

それでも元氣は好かつけえ。

金次乙子は病みついた。

何もこれ、惚れた婦人、死んでも偕白髮と祈りこそせ、それさ、祟るではねえわけだもんでがすがね。無理はねえ、馴れねえ重荷に身あ揉んで、夜道の雪にあたつただよ。」

十九

「又、心も虛弱だで、小兒で居ながら、身上の心配、金の苦勞、それも自分遣ふでねえ兄哥のためさ、身を削らうといふ人だけに、何となく、夭死の相があるだ。

七里潔排、そんなことさあつてはなんねえ、大枝の血筋さ絕えるだで、滅多なことはねえだがね、其の上學問で心勞すると、病は殺さいでも、自分で死ぬ、と兄樣が相さしつた、目は高い。

と己何となく胸に浮ぶだ。

容體が惡うがす。

大太郎樣、村と三國口へ行つたり來たり、氣い揉んで日參だね、佐五六も其の通り、己も行くだ。是がさ。

又一昨日も佐五猪さ、茱ツ葉の煮たので、午餉さ濟まして、これから見舞に行くべいとね、大太郎樣いつも一處だで、さそひに行つた門口で、……先刻いつけえ。

旅僧を見かけただね。

そら、生命さ危い、引留めろ、と大太郎樣出さつしやる、猪も飛び出したが。

あとが、吹雪になつたもんだで、其事さ聞いて歸つた、己が倅めさへ、一昨日の、昨日の今日。

今になつて歸らねえだで、何うさつせえたか分んねえで、先刻、寢そべりながら、惡く佐五の奴さ出しぬけに出て來ると、又しても、朝寢は情婦とせいなんか食ふべい。

吹雪で消えらば消えろやい、倒れた所さ極樂と、己もこれから出べいとして、願文のう奉つたが、お前樣方の耳へ入つただね。

これぢやで、達者とはいかねえだね、この風に金次乙子さ當てられでもしねえだか、と實は案じられてなんねえだよ。……はい、」

「おゝ、ぢや、爺さんも出かける所だつた、氣の毒だな、」

「はい、……何、お前樣、可うがすよ。出家一人さ山の中に入つてせえ、二人で追ッかけさつせえた、此方衆二人、己一人でもりをするに、何、氣さ置かつしやる事があんべい。

些と風さ凪いだやうぢやが、まだ〳〵これでは、はい、畷は危ねえ。

何なら二人泊らつせえ。

蒲團はあるだ。

事に依りや、のえ、留守さ賴まれさつせえまし、私一寸くら一走り、大太郎樣許まで安否さ訪ひに行つて來べいよ。しかしお連樣さ、憂慮ねえかね。」

「むゝ、此の連だ。心配のない事もないから、長く此處にや居られんのだ。爺さん、お前出かけ

るなら、何と、次手に村まで案内をして呉れないか。

話の内に知己になつた、其の人たちの顏も見たい、通りかゝりに尋ねよう。都合に依つたら、其處で一晩世話になりたい。――どうだ、出かけるか、」

といひながら、顧みて、連の背中に手を置くと、頷く狀が袖に響いた。

親仁は固より其の氣の所、

「それ、極上、都合好えだね。恁う、お前樣は大丈夫だ、連の人さ弱らしつたら、己負つても仔細ねえ、小造りでござらつしやる、掌にでも乘せられべいか、待たつせえ、戸外を一つ、」

と、焚火の埃の手を、丁と、大きく拂いて、腰を上げた。親仁は一跨ぎに床几を跨いだ。片足を敷居際、土間へ開いて、踏張つて、

「えゝ、」というて、がたりと開ける。

一目見ると、屋根の下の靜かさは、恁くまでかと思はれた。柱が搖れても壁が動いても、ものかは、外は横にした大川の白い早瀨、矢の飛ぶやうな横吹雪。

これに目もくるめかず、膚もさて撓まぬよ。

親仁は風の走る方、畷の方を熟と見たが、

「や、」

と叫んで、床几の裾に置いたる片足、それも、戸口へ持つて行つて、斜ツかひに半身を、雪を浴びつゝ乘出した。

「來る〳〵、豪い奴ぢや、遣つて來るわ。」

「誰か見える？」

といひさまに、さらりと蓑を捌いて立つた。旅客は此の際、人といふものの此處に會した三個の他に、なほ世にあると喜んで、懷しげに戸口へ出た。

二十

果して人影在焉。雪の底に淡く更に雪を束ねた趣や、諸翼搔い窘めた鳥の、人なきあたりを通るが如く、天に亂れ、宙に碎け、地に迸る、雪と風と風と雪と、相擊つて、山から谷へ、轟と流るゝ流に逆ひ、頭以て突き潛り、突き潛ると望まるゝが、畧は既に越したりけり。背なる方に一幅長く、眞黑く走る吹雪を曳いて、其の形天を突く一頭雄大なる白象の、日の本の、こゝに蟠まつて、むずと鎭る山の裾を、向うは左に、此方の目には、右に楯に取つて防ぎ、風に向うて次第次第に、長く曳いた鼻を攀ぢ、むつくと垂れた耳を蹈んで、頭を渡り、頸を迚り、やがて近く背にこそ進め。

見るに重く、彼の潛水夫が鐵を身に纏へるに異ならず。恁くして吹雪の瀨の底を、一足づゝ一足づゝ、磐石を擡ぐるかと、ぐいと蹈めば岸破と穴、沖の石の飛々に、雪を崩してくぼむや否や、忽ち颯と白くなつて、亂れ亂るゝ浪がしら。

唯見れば一人皚々として、身に纏ひたる一着の蓑、頭に頂く筵頭巾、向脛せめた藁靴も、曇れる銀の大鎧、ざつくと掛けたる風情あり。

手に一本の、槍の柄の、長さ約二間にして、穗尖鋭く針のごときを、搔込みざまに拔いてはさし、拔いてはさして杖にしつゝ、片手に太き繩を占めて、一臺の雪舟を雪の上。沈まぬばかりに、曳！と引いた、荷は何やらむものの姿。

「おゝい、〳〵、」

「おゝい。」

「應。」

「お前樣、」

「お、おぢい、」

と、門口にすつくと立つた。

爾時まで、親仁と肩を並べて居た蓑の人は、靜に座に復つて元の床几。

親仁其の人の袖ごしに、背後に曳いたが、此の折から、體を門口に向けたため、大きく二條の白輪を描いて、戸外の道へ縱になつた、雪舟の上を凝と見たが、

「やあ、熊の。己、黑いもんを載せてござるで、死骸になつた坊樣の法衣かと思うただ。豪えもの捕れただね、道理こそ、此の吹雪ぢや。」さても、というて手を拍つた。

北國の冬、雪中、山に熊、海に鯨の幸ある時は、境を連ねた七ケ國、犇々と戸を鎖して、吹雪に籠るが習と聞く。

「どうして捕つただ、お前樣、まあ、入らつせえ、入らつせえ。」

今度は揉手で身を退きつゝ、

「坊、坊樣は何うしただ、金次樣、何うでがすね。」

其の人白き鎧とともに、力ある重い聲して、

「殘念ながら……」

「えゝ、」

「旅僧は行方が知れん。弟は見直した。」

「然うぢやろ、然うぢやろ。熊捕らつしやる勢なりや、お前樣の其の呼吸さ、吹きかけるばかりでも、半分金次樣病はなほるだ。

さあ、ござい、どうしてはあ、此の吹雪に、」

「おぢい、」

といひつゝ、高くあげて足を蹈むと、龜甲形に雪は崩れた。蓑の毛は肩に亂れて、沓は彌深く埋もれる。

穗尖を見ながら、槍を軒端、ガツキと氷柱に組み合せ、雪舟の綱を放した手で、かなぐつて、頭巾を脫ぐと、づツしりと又落ちた。

途端に横顏へ吹きまくる、風に、秀でたる眉を顰めて、入りざまに其戸を礪、づかりと蓑をぞ脫いだりける。是なむ大枝大太郎。

焚火のあたりに寄ると其まゝ、

「おぢい、佐五六は一昨日死んだぞ。」

「何でがすと！」

大太郎は、はじめて哮と呼吸をついた。爾時蓑の人に會釋をしたので、帽を脫いで、あからさまに其の面を見せた。髯あり、鼻高うして眼淸く、髯短に額廣く、色淺黑うして淸く瘦せたり。

「情ない事をした。おぢい、佐五は死んで、私は恁う助かつた。一人は死なねばならんのだつたな。中の河内を二十町ばかり、雪を分けて、二人で入つた。岨の突當りと思ふ處に、判明とは見え

んかつたが、黑いもののあつたを。
喃。
今お前が思つた通り、私は旅僧が倒れたと思つたのだ。
引起さうと、一足寄ると、むつくり起きたよ。退く間も引く間もあらばこそ、槍の柄だけ飛退つて、屹とつけると、對手も留まつた。
たゞの一呼吸の間を、凡そ何年の間と思つたらう。私ながら、大呼吸つくのが、波のやうに槍に傳つて、震へると、いつか話した、沼の底の金色の蛇が、櫂に絡んで睨めつけた、其の譬へやうのない獰猛な面を思ひ出した、今の敵は熊だ。
最う死ぬ事と覺悟して、おぢい、槍を落してな。」
大太郎は控乎と床几へ。
親仁はその響きで刎ねたやうに、手を宙にして、
「はあ、はあ、はあ、」
「ドンと身體へ打つかつたのは熊ぢやなかつた、私の身體を飛越して、前へ出たのは佐五六なんだ。
はツと思ふ時、柄短に千段卷、穗をすれ〳〵に握つたので、月の輪をさして居たが、しばらく

靜と動かなかつた。
拔くと血が、二條、眞赤な山藤を咲かせたやうに、雪の上を何處までも谷へ落ちた。
一條ならば差支へん。
月の輪からでない一條は、佐五六の脇腹から、流れたではないか、恐しい爪の痕が、抱きついた黑い毛と一處に入つて居たのだ。
背後から緊乎抱くと、かすれ〳〵に笑つてな、
（今はの際に打あけますべい、三國の勝次さ、私若い時の、因果の固りを棄てたでがす。惚れたといふものは切ねえもんだ、私もはあ、勿體ねえが、物心覺えてから、お前樣や金次樣の阿母樣さ陰ながら寢た間も忘れたことはねえ。三國の天人といはれさしつた女子だつけ、死んでお傍へ行かれると思へば、嬉しくつて、疵が疼む。
其の生命も無駄でねえ。事ある時は、お前さま方、一人の、生命にかはらうと思つたで、本願此の上もねえだに喜んでくれさつせえ。
お前樣は萬々年、金次樣、病身案じられてなんねえが、可い土產を上げますべい。旅の出家を助けに來て、死んだと思へば後生も可い、大方先刻のお姿は、觀音さまだつぺいよ。
深い〳〵此の雪ぢや、路の枝折にお前樣、槍をついて出さしつた。私も負けねえ氣になつて、

豫て勝手は知つとるで、用箪笥の抽斗から、此さ持つて出て來たも、）

とおぢい、短い山刀を帶から拔いたぞ。

（何となく蟲が知らしたつぺいよ、どれ、）といつて、直ぐに熊の腹を裂いた。」

雪は十間二十間見る〳〵内に血に染まつた。

あはれ、越路の冬の山、一山紅ならむ處、此の佐五六のあとにこそ。

「臟腑を分けて膽を出して、（これなり嚙んで金次さまに含まして上げさつしやい。あの世から娘と一處に御本復祈るだ、）としつかり、私の手を握つて渡して呉れた。熊の膽は、ひく〳〵と掌に動いたが、おぢいはそれなり、萬平、」

とて、はら〳〵と落涙した。

大太郎は又一呼吸、親仁はがつくり首を垂れた。

時に外套の人は屹と起きて、肅然としたのである。

大太郎は心着いて、寂しい顏を打向けつゝ、

「貴下方、國がかはれば、不思議な事をお聞きでせう。

いかに雪國でも、しかしこんな事は、我々をのけて他にはないです。」といつて微笑した。

客は二人、肩を交へて、身動きもせず默然として答へなかつた。

又萬平に打向ひ、

「おぢい、佐五六の體にも、熊の死骸にも、此方の若いの、御夫婦はじめ、澤山、村の人達の世話になつた。まだ跡始末にかゝつて居る、――歸るまい。

熊の膽は、弟の枕許へ、位牌と一處に飾つた時、床の上へ置き直つたぞ。

人も勸める、自分でも、此の熊の血の乾かん内、市へ出て肉を賣つて、潔い、勇しい、佐五の最期の話をしようと、吹雪を衝いて出かけたが、三國の町は一軒も殘らず戸をさしたな、……恐しい雪だ。

出て居るものは、酒屋、薪屋の印の棹が廂の上に見えるばかり。屋根の上を蹈鳴らして、大熊を積んだ雪舟を曳いて歩行くに、窓から覗くものもないわ。

まるで賣れない。槍は其まゝ、山刀も蓑にかくして持つて出たが、話す對手は一人もなかつた。

これから夜をかけて北の城下、府中を越して福井へ行かう。賣れずば丸岡、大聖寺、加賀の國へも行くつもり。

おぢいの許へ寄つたお庇に。

貴下方にもお聞かせ申した、佐五六は死んだですわ。」と、愁然として其の心常を失した風情であつた。

「失禮ながら、」
許さるべし、と、蓑の人聲をかけ、
「其の熊はお賣りになる？」
「勿論、」と答へたのである。
爾時、じり〳〵と膝を向けて、
「買ひませうか。」
「何、貴客が、買つて下さる。」といひざまに立つた、起ちざまに戸をあけて、不思議に小止んだ吹雪の隙。
「お目にかけませう。」と出でながら、雪舟の傍に踞つた。
「御覽下さい。」
聲に應じ、答へはなしに、床几を離れたは蓑ならず。すつくと立つたは外套で、頭巾を刎ぬれば、これ什麼、たゞ白妙のかゝる世にも、これありけるかな、雪の顏、翠の黑髮すら〳〵と、ほつれげ肩まで打靡けり。
釦をはづすと、背後へ脫いだ、肩を辷つて下るのを、しばらくは支へたれ。玉の腕に力なく、肩かけも一處にするりと、衣紋の花は二重三重、羽織は裏から亂れ落ちて、土間なる雪に未開紅。

見も返らず、激した狀に、蓑の人を離れて出た。雪杏はひとりではづれて、胡粉の土間を足袋跣
「大枝さん、私ですよ、しばらく、」
と、玉の緒、聲に搖ぐと聞えつ。敷居際にひつたりと、柱に縋つて身を斜に、面を隱してふるへたのである。
蓑の人自若として、
「はじめまして、大枝君、蟹の禮に來たんです。」
「肉は、肉は、何斤、」と、大太郎、山刀をすらりと拔いた。這度は一尺銀鱗の怪蛇、三たび文學士を殺さうとした。
自殺すると見えたので、
「待て！」と留めて、蓑の人、はじめて急がはしく、づッと寄つた。
「ほんとうに難有う存じました。」こゝに美人は辛うじて、其の爾あるべき美しき姿を調へ得たりと思はる。
「はあ、はあ、」
はと呼吸を引いて、萬平親仁、
「お、お、お前樣さ、其の蟹を食はつしやる情婦か。」

勿、いひそ翁。甲は碎けて花となり、玉を削れる肉は雪、脚は珊瑚の枝ならずや。抱きつ含みつ翳さむに、何かあらむ、婦人の身。良人に面を背けつゝ、萬平を見て、もの寂しく、莞爾と微笑む顏を一目、神か、人か、と吃驚して、思はず、

「ひやあ、」と退ると尻餅。

「肉、肉は、何斤、」と、ちらめく雪に瞳を定めて、決然として呼はつた。

「否、其まゝ頂きませう、皮ごと、肉ごと、手足ごと、」言を刻んで、爪尖を土間に、烈しく動かし刻んだが、

「貴下、私は畜生になります、」と、すつと出た白い風の中、身を横倒しにもつるゝ裳、はらりとこぼれた友染は、霞む柳の淺綠。雪を包んでくるりと寢た、帶は櫻の薄月夜、朧おぼろと消ゆるやう。見よ、紅と、紫と、紺藍綠、相爭ひ、花片蔽ひ重れる、あゝ、腥き牡丹園。黑き獸の血を分けて、雪舟の橫木に眞白き片頰、がツくりと根が拔けて、しばらく髮の搖めいたが、そのほつれ毛も見えなくなつた。剖いた熊の後足から、血に染つて燃立つばかり、漏るゝは亂れた小袖の褄。

熟と見て、

「姦婦、」

といひさま、槍を取つて、斜めにつけた、蓑の毛怒りに逆立つたが、大太郎が、下に居て、其の山刀を逆手に取る時、親仁が念佛を唱へた時、ひらりと得物を肩に引いて、

「大久保ぢや、大枝君。――

しばらく私は公用で、露西亞の內地へ行つて居た、祕密にです。

妻は小兒を亡してから激しくヒステリイを起してな、私が歸つた時分は危なかつた。先月末。

醫者もどうかといふ所へ、君だち御兄弟から贈物が屆いた、それから食づいてやう〳〵活きたよ。

兒を亡くした一生の思出、字を見ても綺麗らしい、賢弟の顏が見たい、逢つて禮がいひたいと、此の銀は、一生懸命にいふ。

七年も八年も留守にした可哀相に、と思つて、病氣もなほれ、と此の雪を冒して來た。

先刻から此の一軒家の老人に、凡ての事を聞いたのです。

私は武骨一片ぢや。

貴下方の情は解せんが、何となくあはれになつた。

銀もあはれです、いたはつて遣つて呉れたまへ。

世間は何といふか、それは構はん、私は軍人ぢや、別に仕事がある。

今度はおもて向きに出かけるです、然して、貴下方のために戰ひませう。」
今我國には怨敵あり。
「國に仇するものがあつては、貴下方ばかりでない、其の可憐な勝次とかいふ藝妓の靈も、佐五六か、其健氣な親仁の靈も、安らかには眠られますまい。」
然までに戀は切なりや、あはれなるものどもかな、あはれなる人々かな、あはれなる御身等かな。其のあはれなるものは尙、世に仇あらば安かるまじ。色も、情も、月も、花も、涙も、雨も安らかならじ、いで我、敵と戰はむ。然らば、此の山の靈も安んぜよ。
さらば、さらば、やがて蹈まんず滿洲の雪にくらべて何かあらむと、恩愛の絆を斷つて、絡ふものなき潔さ。道のしるべと、槍を其まゝ、鐺を山に突き立てた、任俠の英氣天に沖して、穗尖に日の影、蒼空出でて、其の行く方に燦然と、功名の星の輝く絶景。時に維明治……年……月……日、征露の神軍雲を破つて、將に海を渡らむとする、前二月であつた。
大久保秀氏は參謀部の少佐である。
彼方は山の頂へ、槍煌々と輝いて、此方は里へ、蓑の下に、吹雪に曇る山刀、夫人の玉の緒手に取つて、雪舟曳く……道は晴れずとも、心の通ふあと絶えめやは。……
「佐官、萬歳、――」

「おゝ！健在なれ、文學士。」
左右を送つて茫然たる、親仁の小屋から雪を分けて、別々となりにけり。

瓔珞品

旅商人　天人石　紅瑠璃菓　苺實檢　伽藍の鬼　三十五人
火の鼠　卯の花傘　波のしらべ　腰蓑

旅商人

一

「私は夜さり、此の道歩行くのでも、恐うてならんやしな。」

と小店の表、軒下の土間へ、新筵折敷いた上を、白い素足で蹈みながら、恁う、其の聲の優しい事。

褄を横に一寸取つて、肉附のふつくりした脛を合はせて、上へ、下へ、輕く蹈むに、囁くばかりの、水の流の音もしないが、腰に絡へる雪の布、なほ晒すかと見えるのは、餫飩の粉を捏るのである。

是なる餫飩屋、飯もあり、諸子の附燒、小鮎の煑浸、芋、牛蒡、蓮、人參、燒どうふの煮染も召せ。これは年紀のころ三十路ばかり、眉のあと青く、髪黑く、齒を染めた、いゝ女房。

内端に働く傍に、長くなつて、伸々と泥草鞋、筵に近う差伸ばし、胴體を框に渡して、上り

端六疊ばかりなる處に据ゑた、角火鉢の前に、肱を曲げ、脰を支へ、俯向いて饂飩を蹈む件の女房の顏を、下から見上げるやうに、仰樣に寢轉んで、蛇が見惚れた風に、ぐッたりした、背のひよろ〳〵と長い、髮の房りした、頤の尖つた、目つきのわるさかしげな、旅商人體の生若い男が、すぐに言じりについて、だらけた調子で、

「へ、へ、へ、をなごの恐いのと、猫の冷いのは、嘘やといふわいな。」

「いやらしい、あんな。」

と打棄るやうにいつて、女房がフト目瞼をほんのりと染めた時、奥からつか〳〵と出て來た、一人、手足に當てて稍太い、胸に合はせて些と廣い、膝のあたりの聊か古びた、黑の背廣の服を着た、頭の地の透いて見ゆるまで、一分刈の短いので、鐵ぶちの近眼鏡をゆるく嵌めた、中肴の人物。眉にも、目にも、口許にも、威儀はづッしり備つて、學は眉宇の間に深く、德は全幅に溢れたが、我を輕いものあつかひに、然も無雜作な步行振。

二足三足、表座敷を、火鉢に躓くかと麁匆かしく、茶の中折の帽をひよいと冠つた。

さあ、此の人のつむりの上には、帽子があつて、天井があつて、屋根があつて、而して五月晴の天がある。此處へ娘が送つて出て來た。

十八九の、目のぱつちりした、色の透通る、髮の濡れた、それを素直な銀杏返、黑く艶やかな

のが、にほひ溢れて、一重つゝんだかと思ふ顏の色、肖て其の母よりも花やかならず。

「おかさん、おたち。」

「はあ。」

とうけて、女房の顏を上げた時、客は早や旅商人と、押並んで框に腰。

ずぼんをあげて、靴を仰向けにして、引くと、爪尖を下ろすが如くにして穿いた。

土間に立つて、穿き占めて、二つばかり踵で蹈むと、女房の其の足取と、ゆるやかに調子が合つた、長閑な日和。

右の方で、

「よう、おいでやす。」

「お世話、」

といひながら、左の方に生々くと橋を渡した、件のひよろ長い旅商人の胴のあたりに、ふと目がついて、唯見直したが、如何にしけむ。

渠は其の濃な、柔和な眉を顰めたのである。

同時に其の手は、何物かもとむる狀して、齊して左右の衣兜へ入つた。

どちらにもものこそありけれ。一方は分らぬが、左に端のあらはれたのは、安繪具で、蒼く、

紅く、べつとりとなすくつた、石版畫の、部の厚い表紙のついた、ものの本。
旅商人は、此方には目もかけず、丁ど其の顏に間近く來た、娘の縞の前垂を、熟、とろりとした目つきなり。
女房が心着いて、
「あんたはん、お忘れもの、もしな、お荷物は。」

二

「あゝ、いや無い。荷物は殘らず停車場前の茶店へ預けて來た。」
渠は又、自分の樣子に氣がついたか、然あらぬ狀に笑を含んで、三間間口を明け放して、驛路に面する敷居を跨ぐと、差出でた廂の下。
柳の蔭はないけれども、日に疎くて暗い軒を、すらりと燕が流れて通る。
これに瞳を遮られて、立淀んで左右を見たのを、娘は土地に馴れない人の、方角に迷つたと推量したらう。左へ行けば停車場、右は此の一條の故道を、次第に何處までも山になつて、湖を見ながら隣國へ通ずるのである。
裳に飜然と白い蝶、赤きはな緒に素足を留めて、背後から送つて出て、

「あのな、天人石へ行きやはりますなら、南だつせえな。」
と指さしする。燕が又一羽、其方から地を低う、すら〳〵と、波に海松房の寄る風情。柳も前途にちらほらあり。
「然うかい、分つた。」
といつて、づッと道へ。……
旅商人は頭を擡げて、厭な目をして見送つたが、此方は娘にも振返らず、袖ふり合ふてふ緣も離れて、たゞ道中の孤客となンぬ。
道づれは燕が、背後から肩を越し、前から袖に行違ひ、ひらりと白く、ちらりと黑い。
さても此の驛に年少き男女あらば、心を此の鳥の翼に委ねて、思を空に通はすであらう。あら、せはしなの戀、のどかなるながめやな。
旅客は凡そ一町ばかり、ふら〳〵と通つた。
鳥の囀る聲あり。燕の兒の親を呼ぶ、と見ると、今辭した饂飩屋には向ひ側、左手の軒に板を合はせて、往來へ何憚からず衝とさし出したは其の巢である。
又六の門ならなくに、杉の葉を束ねたやうな、影一ツ日向に落ちて、上には三つ四つ、頰を合はせて愛くるしい。

旅客は是に足を留めたが、もの懐かしげに店を覗くと、雖も人形もあるのではない、草鞋がかつて、笊が見え、新しい釣瓶縄、古びた箱など並んで居る。

一足退つて見ると、澁色の帆木綿に染め抜いて、萬あら物類、御煙草として軒暖簾。

「一寸……」

煙草を一個買ひに入つた。

「御免よ、」

「はい、」

といふと、商賣は内よりせず、横合から、四十ばかりの痩せた男、どんつくを裙長う、小倉の帶をきちんと〆めた、背に六ツばかりの男の兒をおんぶしたのが、ひよつくりと顏を見せて、

「はあ、何でございます。」

言はゆるいが、唐突なあらはれ方。これでは今足を留めた時、肩を並べてでも居たのであらう、旅客は俯向いて歩行いて、氣がつかなかつた。

旅客は、負はれながらうしろへ反つて、伸上つて巣を覗く背なる童子と、此の重量にもたれて、前屈みになつて突出した、保名の顏を右瞻左瞻たが、

「煙草を下さい、卷いたのは。」

「お生憎や、ございませんでなあ、其處にのせてございます、そればかりでございます。」

「此の、團にした是かい。」

といつた、箱の上に三つばかり、袋にもせねば結へもせず、朱を入れた棒のある、手習清書を切つた上に、ふはりと輕い忘れ草、暖簾にちら〳〵とある影は、此の精靈が風なき日和を、絲遊になつて遊ぶらしい。

子持の商人は客の肩越に店を覗いて、

「はあ、それだつせ。」

背を遮つていはれたので、煙管を持たぬ、旅の風、刻は要らぬ人らしいが、出勝手が惡かつたか、

「それでは、此を一つ貰つて行かう。」

「あんたはん、お取りやして。」

ぐるりと胸を曲げて仰向いて、拔衣紋で、小兒に、

「ばあー」

三

「坊やは幾歳になる。」
手づから煙草の反故包を、左の衣兜に突込みながら、立向うて旅客は聞いた。兒と親と這個三つの顏は、巢の中の燕の如く、日向に並んだのである。
「五ッや、もし。」
「あゝ、然うかい。」
「あんたはん、小兒衆がござりますかいな。」
「いや、ともだちに一人あるんぢや。おゝ、佳い兒だな、名は？」
「げんきちにござります。」
聞くと齊しく、額のあたり、片手蔽うたやうに、颯と曇つた、旅客の面。冷い風を避くるが如く、横樣に打背くと、
「あゝ、然うか。」
とばかり斜めに向う側へ身を開いて、其まゝ前途へ。
薪屋、古着屋、小間物屋、金物屋など店を並ぶる、此の側は、前の饂飩屋と軒續きで、鍋は、釜は、鯛、達磨、小袖も、頭巾も、前垂も、路とともに物ふりて、煙草と類は齊しけれども、兎も角も廂は揃つて、屋根なりに日影が長く、店前に老若男女、ものはいはぬが、聲はせぬが、通

りかゝる旅客を眺めて、首が傾き、脰が伸び、目が動きなどもした。
來た順で覺えて居る。此の背後は田を一ッ、川を一ッ、遙かに其處が停車場まで、青田を見通す透のなきだけに、宿屋も殘つて、出女の、毛筋はすらりと通つたが、あはれ片鬢は、ほろ〳〵と、黑髮の拔けた趣。あら物屋のある側は、空屋やら、仕舞屋やら、燒たと思はるゝ痕もあり、刎釣瓶の井戸も見え、壁の落ちた厠も見え、蜘蛛の圍も見え、蜂も啼く。
三軒飛び、五軒飛び、辛うじて路を縫ふ、其の破屋の間々は、羽目の穴からも、戸障子襖の破からも、直ちに草の萌黃の峰、松山の松が覗かるゝ。
其の裏山の松の根は、戸毎の背戸に蔓り、峰の草は屋根に繁つて、此の片側は、恁くてあるうちにも、次第に地に埋るゝかと危く、又數世紀の以前、世に葬られ果てたのが、草鞋とともに燃え出でて、失せし驛路の俤を、幻に日影に描いたかと疑はれて、おつゞら馬が、こゝにひらめく燕のやう、宙を步行いてゆきゝせぬのが却つて怪いばかりであつた。
さて、其の窓を蔽ひ、棟を壓した、山は、驛の半ばと思ふあたり、頂高く、次第に脈を南に垂れて、衝と走つて、行方なき雲に入る方の、路もやゝ爪尖上り。坂と明かに認めらるゝやうになると、角に一座の伽藍あり、古寺に突當つて、其處から兩岐に左右に岐れる……

弘化三丙午年再建之

左仲仙道

とだけ讀まれた。石碑は苔を被て、草を敷寢、ごろりと寺の門に北枕。

及腰に、禮拜するが如く打視めて、

「あゝ、此處だ。」

と呟いたが、眞直に立つて、見直して、

「蘆澤辰起、爰に來たつて亡ぶ……と書いてもないか。」と唯一人立つて、物さみしげに苦笑した。

靴をのせた路の邊の草は、濃き雲の裝して、左は山へ、右は野へ。

やゝあつて低徊して、踵を山の方にめぐらした、此の寺と向ひ合つて、壁も柱も塗の兀げた、薄暗い大構の古家が一軒。

土間を廣々と取つた、地の濕に、山の色が蒼く射して、夏の近い氣勢が見え、清酒の樽が積んである。

四　天人石

「杯はよし、要らん。」

と、兜衣に手を入れて、

「今朝旅籠屋で吳れたのが、こゝにある。それは可し。何か、些ばかり肴が欲しいと思ふがね。」

「はい、はい、お魚は恁うやつて、皆な活かして置きますけに、鮮しいのがございます。」

若い男の實體なのが、色の褪せた紺の筒袖、布の廣い前垂して、ゆつくりと踞んで、手を翳して見せた。水は樋の口からむく〳〵と溢れ出て、石疊へ灌いで、水脚を輪にして流るゝ、五尺ばかりの生洲の中へ、皿小鉢の影もさし、吊つた棚の影もさし、人影もさして、鰭ひら〳〵と、鮒あり、鯉あり、仕出し料理もするらしい。

「それにや及ばん、一寸皮包みにでもして袂へ入れて行かれるやうな、何か出來あひのものはないだらうか。」

「はい、」

といひ、生洲の前に踞んだなり、のろりと客を打仰き、

「可いものがございます。表にも看板を出してございますが、鮒の鮨がありますで、これは、はい、當所の名物で、又私どもが名代でございますが。」

辰起は打頷き、

「ぢや、それを些と下さらんか。」
「どれだけさ差上げます。」
「何、ほんの少々で可い、然うさ五錢も貰はうか。」
酒屋は兩の頰を擴げた、以つての外の顏色で、
「や、もし、そないなもんぢやござりませぬ。それに、はい、切賣は出來ませんでな、强いお氣の毒でござります。」
「切賣をせん、な。」
「はい、」
「一體どんなものかね。」
「これにござります。」
悠々と腰を切つて、兩手で抱くやうに緣を壓へた、鮓桶であらう、しツくいで塗つたやう、中から白い汁の溢れる中に、づッしりと沈んだ、手ごろの壓石。よい、と取つて、どかりと置き、桶を向うへ傾けると、上澄がざッと流れて、生洲へ落ちて、鮒も鯉も、醉ひさうな酒の香。
「粕漬か。」
「さよぢや、鮒の鮓でござります。これは、はい、三年漬け込んで置きました、ようなれて居りますで、藥になるでござります。
土用の暑氣拂にな、あんたはん、白湯に入れて用るますで、骨も、鱗も、とろ〳〵に溶けるでござりますよ。」
ぐいとつかみ出して、指で扱いて横啣へ、ぺろりと中指を嘗めて舌鼓。
「味は極上でござります。あんたはん、旅のお方やで、ぐッと廉うして置きますで、二貫下はりませ。」
「あゝ、可し、其を一尾貰ふとしよう。土產にするのぢやない、山へ行つて、直ぐに一つ、酒の對手に下卑ようといふのぢやから、切つて貰ひたいな。」
「はあ、可うござりますえ。」といつたが、棚から庖丁を引出した。是が又、途中古道具屋の前の、雨落の莫蓙に錆ついた、柄のなかつたのと大差はないので。酒屋はちやぶ〳〵生洲の水で、束藁をごし〳〵とかけはじめたから、魚頭から尾に至る、八寸を切つて十六斷。竹の皮包みにするまでは、しばらく時が經つたのである。其の間に、樣子を尋ねた辰起が、先刻に饂飩屋の娘に聞いて、是から行かうとする天人石と稱ふる名所は、つい此の屋根の上にあるといつても可い、松山の松の梢に、高き枝に絡んで咲く、藤の花房で繫ぎ留めたやうに、半腹に美しくかゝつて居る。
路は此の坂を半町ほど、それから上つて一まはり、山をあとへ戻るが順。

けれども、家の垣根について、背戸の畠を突切つて、松から松へ足を運べは、直に手が屆く、と教へたのである。

五

佛のたまはく、劫に二ツのたとへあり、芥子劫といふ。一大城あり、東西千里、南北四千里、此中に芥子を滿つ。百歳に天人天降つて、一芥子を取つて、盡す、一劫なり。

又、一大石あり、方四十里。百歳に天人來り下り、羅縠衣を取つて、拂ひ盡す、磐石劫、といふとかや。子の日の狀も偲ばるゝ、枝、幹、細く、柔かな、葉毎の露や、水の色。湖水の姿梢に宿つて、玲瓏として長に月の夜の景色あり。滿山の隈唯一ツ、一大石の、其の質瑪瑙に似たるありて、中空に、珠の臺の架かれる風情、こゝにこそ降り來らめ。白、紫と咲き交る、藤の花房、低く垂るれば、波のしらべ、松に通ひて、里人の寢覺の耳に、裏の山行く天女の氣勢、霞の衣の音なひは、石に袂の觸るゝぞとて、扨こそ稱へて天人石。

「これだ、」

と獨言した旅の姿は、高く、衝と其の石の上に、松を離れてあらはれた。

前後に松葉累つて、宿の形は影も留めず、深き翠を一面に、眼界唯限なき漣なり。

此の處に攀づるまで、手を縋り、且つ足を支へた、幹から幹、枝から枝、一足づゝ上るに連れて、何處より寄するともなく、瀲灩たる波、白帆をのせて背に近づき、躑躅を浮べて肩に迫り、倒に藤を宿したが、石の上に、立直つて、今や正に、目の下に望まれた、これなむ日の本の一個所を、琵琶に劃つた水である。

妙なるかな、近江の國。卯月の末の八ツ下り、月白く、山の薄紅、松の梢に藤をかけ、山は翠の黑髪長く、霞は里に裳を曳いて、そよ〳〵とある風の調は、湖の琵琶を奏づるのである。

この眺望、久しうして、辰起は磴と横に寢た。

其の目のふちの血の色は、既に二ツ三ツ傾けたので、盞と、酒の瓶と、包を解いた竹の皮は、石を避けて、松の根に。

やがて大理石の机の上に、衣兜から出した件の一冊。

ボオル紙の厚表紙に、雪輪を散らして、山形段々の枠を取つた、下にいの字の星兜、三ツ巴の陣太鼓に采を添へて、怪げに彩色したのは、天人石に坐し、琵琶湖に面して、繰開かるべき詩集でない、經典でない。廣く民間に流布して、牛打つ里の童といへども、一見してそれと頷く、赤穗義士銘々傳、忠臣藏の讀本である。

辰起は頰杖つき、板を扱ふやうに堅く手に採つて、先づ其の表紙を視めた。

横にして、茶色に塗つた綴目を眞直に、恁う縱に、返して裏表紙の萌黃色の、手擦れに斑に兀げたのを翳した時、重いものを支へた形の、腕は柔かに一段曲つて、肱枕は低くなンぬ。

と葉越しに日の當る、光線はやゝ薄らいで、湖の波は藍にちら〳〵、音もなく眉に搖れて、山の上、石の周圍を包む。

其時うつとりとして半ば眼を閉ぢたが、むつくと頭を、肱を立てて、辰起は、本の緣を握つたのを、綴目を石について、指を割つて、掌を開くと、颯と左右へ表紙が分れて、絲の拔けた一ページ、こゝに赤穗の城騷動の圖。

天に聳えた城の棟に、瞳を据ゑた目を留めて、思はず投げ出して居た脚を縮めた。大手の櫓に描いてある、當時の凶き兆なりし、大なる蜂の巢が、爪先に落ち散つた、松球に似て居たから。

石垣高き城の濠、線を繞らした充滿の皺は、こゝに梢の波紋に同じく、下馬先に一騎あり、鞭を擧げた白鉢卷。遠く小さく、東海道を早打の駕籠が雲の空。

辰起は愁然として首垂れた。

紅瑠璃菓

「あ、あ、これは！いや、串戲ではない、あゝ、寐たか。」

「あなた、どうか遊ばしたのでございますか。」

「はあ、」

とばかり茫然として、斜めに起直つた辰起は、夢の覺めた枕許に、磐石劫の天人の天降つたのかと呆氣に取られた。

天人石を取り廻して、美しく幹を揃へ、枝を交へ、葉をかさねた中に、一葉の鬢を犯すことなく、小枝も袂を遮らず、梢の藤は袖に映つて、すらりと安らかに彳んだ、額のかゝり、耳許など、月や山の端にと清らかな、うら若き婦人の姿。

「呀、私、どうかしたですか、」

眼鏡に觸れて音のするまで、幾度も瞬きした。

「あの、おやすみ遊ばしていらつしやいましたのでございますか、」

「寐ましたかな、」とぼーといふ。
「それでは、あのお魘されなさいましたのでございませう。お寢みの處なら、お起し申しますのではなかつたのでございます。
何か存じませんけれど、お苦しさうに、聲を出しておいでなさいましたから、あの、それでお起し申しました。
却つて失禮でござんしたこと、御免なすつて下さいまし。」
雲間に月の動くよと、柳の腰をしをらしく、打屈めたが靡くやう。
慌しく禮を返し、
「失禮、……失禮などとは思ひも寄らん、飛んだことを。はや、實に其の、……いや、何とも、其の……むゝ、」
とむぐ〳〵、武骨に手の甲で、ぐいと唇をこすつたは、言に差支へたのを悶ゆる狀なり。
「あゝ、驚いたです。失、失禮などとおつしやつて、途方もない、私、私はお庇で助かりました、何ともどうも、」又むぐ〳〵、きよろ〳〵と四邊を眴す。膝許に銘々傳、傍に酒の瓶、鮒の鮮など狼藉たり。
眠りの去らぬ眉を顰め、

「これだ。」
と辰起は羞ぢたる色あり。足をずらして居直つて、更めて、美女を。瞳は漸く清かつたが、眼鏡の下で押拭つた、少し言も判然と、
「貴女は？」
「近所のものですよ。」
「此の、御近所、此の邊の……」
可怪と見る影瞼に浮んで、朦朧とした氣色。
敏くもそれと見たらしく、
「はい、まるッ切、當地のものではございません。家は遠方でございますが、旅をしまして、此驛で煩らひました。それであの、停車場寄に宿を取つて、逗留をして居りますのでございます。」
「しかし……」
「否、山坂をこんな獨歩行をしますんですもの、唯今では、最う身體のわるいのではございませんが、其の病氣で滯の出來ましたのが、思はぬ幸になりまして、豫て尋ねて居りましたお方が、あの、貴下。
不思議に當地にいらつしやるのに、ふとお目にかゝりましたものですから、何時までもと存じ

まして、しばらくになりますのでございます。
最う恁うなりますと、道中すがら、可鹽梅に、病氣をしたと思ひますが、其の當座は、まあ、どんなに心細うござんしたでせう。
一寸お見受け申しましても、旅のお方と見えますのに、もしや、おあんばいが惡いのではありますまいかと、大抵胸が痛うなりました。」
觸れなば今も惱むべし。簪ならでは、勿刺しそ、松の葉、俤に立つ琵琶の波さへ、靜に胸に寄るにこそ。花の唇美しく、戰ぐが如く微笑みて、
「それではお夢でござんしたか。」

七

辰起はやゝ我に返つた。
「夢、然う、夢といへば夢ですが、今見て夢と思ふが其れか、あなたに起して頂いて、恁うしてものをいふのが夢か、殆ど自分にも分別がつかんのですが、」
神か人か、微妙き御前。
「不躾ながら、恁うやつて、貴女と口を利く方を、夢なら覺めるなと思ひます。

しかし、」
しかし、といひつゝ腰をずらして、身を近づけ、
「いふことが、何です、私の申すことが分りますか。先づ、此の顏は人間の顏ですか、別條はありませんか。」
と髯ある頤を下に當てて、兩の腕のつけもとを壓へて試たが、面を上げて目を合はせると、きれの長い、瞼をふツくり睫毛を濃く、下伏せに、答を傍へ外づしたのを、追うて縋るやうにした時、辰起は美女が其の片手を、衣ながら透明るばかりの胸に置いた、右をしなやかに垂れた手に、柳の絲かと眞蒼な、竹で編んだ籠を一個、爪紅に添ふ淺みどりの、葉をはら〳〵とかさねつゝ、裳涼しき白脛の、殘んの雪を彩りて、眞紅の露の滴るを見た。鮒の鮓の臭も恥ぢよ、酒の香も消えよかし、苺なりけり、松の中に。
辰起は一目見て、思はず兩の瞳を睜つた。
美女はこれがために、苺を提げた袖ながら、腕ながら、いつしか我を忘るゝ風情に、手首に形なき絲を繫いで、じり〳〵と引くばかり、强き力が辰起の目に籠つて、しばらくは傍目も觸らず。
見る〳〵、一種いふべからざる痛苦の皺を額に刻んだ、辰起は吻と呼吸をついて、
「あゝ、最う、夢を今、夢を、貴女にお話しいたさうと思つてさへ、咽喉が乾いて、咽喉が乾い

て堪らない。煎りつくやうです。
口を緘ぢつけられさうで、何ともたとへやうがありません。
貴女、其の苺を下さらんか。
無禮千萬。
無法極まる御無心ですが、不可ませんか。
不可い？
知つて居ます、私は知つとる。
貴女は、貴女は、私が、此の神聖なる天人石の、名に對してもあるまじき大失態。竹の皮を引散らかして、熟柿の息を吹いて……呻つて居た、蛇が鳴くやうな聲だつたであらうと思ふ。
それを御覽なすつて、毒蛇が寢て居るとも思はないで、旅のものの急病かと呼覺まして下さつた、神とも、佛とも思ふ、慈悲深い、しんせつなお方だ。
優いお方だ。けれども、其の苺に限つては、一個も、缺も下さるわけには行かんでせう。ゆかない理由がある、丁とある、それは有るのです。
知つとる、分つて居ます、な、いけますまい。下さる事はなりますまい。
いふ息づかひも最忙しく、顏の色も尋常ならず。

美女は從容として、迫れる風采更になく、
「私のものでござんすなら、何よりお易いことなんでございますが、これは、あの、何なのでございます。つい此の山の上に庵を結んでおいでなさいます、お爺樣がございましてね、其の方から、私のお師匠樣に下さいましたのを、頂戴に參りました、私はつかひなんでございますから、」
聞くや、爾が上に色動いて、
「御、御覽なさい、それ、貴女はおつかひ。
山の上の其の御老人は、恐らく蓬萊山から、此の琵琶湖のあたりへ、別莊でも持つたやうな、不死の仙藥を煉るといふ、道士のやうな翁でせう。」

八

「又、貴女の、貴女のお師匠さんといふのは、天人、神、神女でおいでなさるであらうと思ふ、いや、思はねばならんのです。
何は措いても、其の貴女のお師匠さんといふ方の、名を聞きたいと思ひます、名です。
然うすれば屹と、今私が、多分然うぢやらうと考へて居る名と、同一であらうと信ずる、確です。」

と激しくいつたが、やがて弛んで言弱く、
なほ、其の苺は下さるまい。
敢て貴女がたが、惜むといはん。天命だ、天が命ずるのぢや。末期の水よりも一層、一滴の飲を求むるものの、身體萎え、心疲れ、氣おとろへ、足窘んで、麓へ下りて、酒屋の土間に湧く清水を飲むことならず、其上山躑躅が、彼方此方に炎を吹き出すやうに燃えるのに、せめても露を含んで居さうな藤の花は、其處においでなさる、貴女でなうては影も映らず。然も此の頰を浸して唇に觸れるまで、湖水の水は樹の間に滿ちて、湛々たる淨水あり、天人の視ること瑠璃の如く、餓鬼の視ること猛火の如しぢや、呼吸をしても飲めさうで、影ばかりで飲めないため、百層倍、渴きを增して、悶え苦む、惡魔に、餓鬼に、苺、苺、震ひつきたい貴女の手の苺の實は、與ふるな、嚙ますな、遣るな。
餓鬼を責めろ、と天が命ずるのに違ひない。」
と黑い呼吸を吐いた時、美女は、怪むとより、恐るゝとより、寧ろ、慰めむと思ふやうに、
「まあ、あなた、」
「否、屹と然うです。
試みに誰方か知らんが、貴女の其の、お師匠さんの名を當てて見ませうか。

確に疑はん、當る！
又餘り唐突で、狂氣じみたことをいふとお思ひなさるだらうが、此の麓の宿の、貴女、あら物屋の男の兒の名を御存じぢやらうか。
彼はげん吉といひます。」
とて遙にもの思ふ眼鏡の光輝。
「字は知らん、げんは何と書くか分らんが、同一響きです、げん吉と。
最初、饂飩屋の店前で、不思議にひよろ長い男を見てから、私は妙に氣がさした。で、もう、げん吉とでもいひはせんか、と危みながら、其の兒を負つて居た父親に聞いて見た。
然うでなくて、でなくば、貴女、通りすがりに旅のものが、小兒の名を聞く事がありますか、」
自からたしなめるが如くに言つて、ねばるに苦しむよ、舌を喘ぎ、
「貴女は、何も貴女は御存じない。ないが、しかし、私の腹の中まで、洞察いておいでなさるやうに思ふ、如何ですか、御存じない？
はあ、では、あなたは御承知なくとも、其の庵の御老人、又お師匠さんは御存じだ。
それですから、此の下の寺の門で、向うへ倒れた、石碑の面を見ました時――蘆澤辰起――私の名です、蘆澤辰起、此處に來つて亡ぶ、とおのづから文字が浮出いて見えるぢやらうと、戰き

且つ恐れたのでした。

けれども唯、仲仙道を指したばかりでありましたのは、要するに未だ罪が滅びないで、飛びつきたい、搔拷つても欲い、其の苺に咽喉を干して、悶えろ、苦しめ、といふ天命だ。

貴女！

貴女のお心には、罪、萬死に當るものだつても、御覽になればあはれでせう。

神龍の御袖に縋つた餓鬼に、世尊の御手に、水の印を結ばせたまうた話もあります。

強ひて苺を下さいとは申さん。願くは、貴女は天の使でいらつしやる。途中天人石をお通りの時、毒蛇あつて、是を狙つた、其の忌むべき、恐るべき、獰猛な、鱗の黑い形を見て、貴女、驚いたとあきらめて、其の、其の籠を此處に落して下さい。

願ひます！」と葬々と擦り寄るを、拒むともなく猶豫ひながら、美女は、じりゝ〳〵と附廻さるゝ狀になつた。あでなる姿は、避けつゝ、石の上に乘り、辰起の身はぐるりと廻つて、上下に、其のすまひのかはつた時、玉の腕も片袖も、しびるゝばかりに、礑と籠を。

苺は散つた、あゝ正に是れ、熟とみつめた毒蛇の目の血汐の涙こぼれし風情。

九

「何とも申しやうがありません。體のいゝゆすりでした。畫强盜といつても宜しい、實に、したたかな事でした。

それにも係はらず、惡魔に見込まれて、驚いてお落しなさつた分の、苺を又、手傳つて拾つて下さつて、お手づから頂いたは、望外の幸福、私は一生の思出です。

孃さん、私は、あなたのお師匠さんの召食る、苺を横奪した毒蛇ぢや。

けれども、孃さんに對しては、蚯蚓ほどのことも仕出さんから、御安心をなさい。

大方は間違ひますまい。過日からの私の境遇につけても、一昨夜來の心痛に思ひ合はせても、饂飩屋の店に居た男の、何かに肖て居たのに考へても、確に然うであらうと思ふが、孃さんのお師匠さんは、何といふお方です、一體男の方ですか、御婦人でせうか。」

問はれて美女の猶豫ふ狀は、苺を强請られた時に略同じかつた。

「はい、それを、あの、申上げましても可うございますか、如何でございますか、私にさへ、はじめはお祕しなさいましたほどなのでございませんの。」

別に恁うと、貴下をお疑ひ申しますのではございません。

「愈々然うだ、違はない。まあ、兎も角、それだけは聞かせて下さつて宜しからう、孃さん、御婦人でせうな。」

「……」

「御婦人でせうな。」

強ひて問はれて、美女は困じた狀で、身を寄せた、松の幹に手をかけて壓へて輕く指で叩いた。

如何にせむすべを木精に問ふや。

背けた顏を、半ば此方へ。

「それは私のお師匠さんでござんすから、御婦人でございますよ。」

謹んで答を待つかの如く、時に、湖の景色に背いて、天人石の一端の低き處に腰かけつゝ、離れて美女の袖の下あたり、頭を垂れて聞き取つたが、思はず深く頷いた。

「果して御婦人、」

辰起は改めて、

「孃さん、それに就いて、些とお話し申したい事がある、が、お急ぎでありませうか。」

「否、」

「お急ぎでない。しかし日が暮れませうか、此處へ來る途中、松の暗い處がありましたについて、先刻時間を見たですが、時計は留まつて居ました。その上、一寢入したから何時か分らんですが、何だか、一夜明けたやうにも思はれる。目の覺めた折は一生懸命、咽喉が乾いてまるで夢中、唯

今は又苺のうまさで生れかはつたやうな心持、殆ど前後不覺です。」

「まだお月樣が、白くておいでなさいます。それに、御覽なさいまし、湖水の波もきら〳〵明うございます、日は永うございますよ。」

「重疊々々、孃さん、御迷惑でありませうが、しばらくお耳を拜借したい。

それではお草臥れなさるであらう、此處へ、」

といつて、手早く上衣を脫ぎかけた、幅少し廣き仕立の、直ちに、斜に肩を辷つた、ずぼんの釣は千鳥がけ、小波さらりと襯衣に皺、日あたりながら薄ら寒さう。

「否、否、貴下、」

「はあ、是を脫いで敷いた處で、鱗があるやうに思召さうか。」

「貴下、飛んだ事をおつしやいます、そんなでお辭儀をしますのではござんせんが、松の若木が柔かで、まあ、しなひます椅子のやうな、此が宜しうございます。」

猶凭りかゝるやうにした、衣のひだ、安らかに、なよやかな裳にも、袖にも幹は逆はず、柔順に美女を支へたが、最と輕らかな身じろぎにも、梢にゆるゝは、さゝなみ、藤波。

辰起は打仰ぎ、

「あゝ、成程、花は梢にあつて草臥れませんな、われ〳〵如き臭骸でない。

では、それに……」

といひながら上衣は其まゝ脱ぎ棄てた。

苺實檢

十

「我意を徹すではありません、嬢さん、昔の人がした通り、此の上に茨を負うて、私はお詫をする氣であります。唯今も、强ひて苺を頂戴した、是は私に取つて、はじめての亂暴ではない。以前も他所の庭園から、苺を奪つた事があります。

其時は私自分で、此の身體を惡魔にし、毒蛇になつて、持主の方を怯かしたわけではない、小さな、何です。

私の影法師のやうなものでした。此の松の露が凝つて、松露といふものが出來るのなら、私の魂が形をあらはして鬼となつた、小さな鬼でありました。九ツになる男の兒で、それが名を玄吉といひました。

私は今三十五、それは十年ばかり前の事、斷じて兒を持たんといふ年ではないが、しかし自分

の倅でない。

其の時分、私は東京小石川の奥に、自炊をして居た。長屋中、御同樣に貧乏人ぢや。兒澤山の中の餓鬼大將、恐ろしく目の光る、色の眞黑な、まるで黑猫、猫の中でもいかもので、黄領蛇でも黑蜥蜴でも、捕つて喰はうといふ豪い小僧。

夕立に傘もさゝなけりや、氷の上も素跣足で、駈け歩行いて、些とも靜とはして居ない、寢て居る内も轉げまはつて、寢惚けて木登りもしかねないといつたやうに、炭團が赫となつた小坊主で。

此奴、總後架の蔭、緣の下、納屋の隅、晝でも暗い處を選つて、礫を持つたり、棒ちぎれ、人でも犬でも狙つては、眼を輝かして居たもんですが。

母親はない、お人よしの父爺ばかり。雀と小兒を可愛がつた、安直妾ぢやが氣立ての優しい、隣長屋の叔母さんにも馴染まないのに、どういふわけか私にはよく懷いて、奥の書生さんも五ツ店賃が滯つたと、井戸端で風説をしても、旦那々々と、蔭の背戸口を掃いてくれる。日向の緣側を拭いて呉れる。間には使ひはざま、出しなに路地まで送つて出て、餘所から歸ると前へ立つて、溝板を駈けて入る。嬢さん、古いたとへですが、昔、陰陽師がつかつた、識神と申すものの、童子になつてあらはれたやうな體がありましてね、段々馴れると、了ひには勝手口を覗いて見て、

默つて水を汲んで臭れたり、味噌漉を提げて駈出して、所帶を手傳つて臭れたのが、今度は小遣の足になる。

花活に花がないと、桃でも、梅でも、椿でも、莟の内から折つて來る、薔薇も薊も手あたり次第。若い人たちの戀のやうに、美しい、水入に菫の花、一輪ざしに朝顏、とは對手が熊猫だけに、然うは行かんのであつたですが、机を置いた窓の下には、暗の夜でも踞んで居て、ばあ、と覗いて、えへゝ、と笑つて、植込の中を、かさ〳〵といふ串戲はしたけれども、其の蛇や蛙をです、床の間の置物に、啣へて來るといふ惡體はしませんで。

小遣の足といふのは、土筆、芹、嫁菜なんどを引掴んで來ては置いて行くです。

春菊といふのがある、よく、其の和物に中毒つて死んだなぞといふ、彼奴ですな。

あれを引ッこ抜いて、一束抱へて來て臭れたのを、氣がさしたから、食べずに置くと、それなり臺所の板敷の隅に干乾びたのを、水を汲む時氣がついたものと見える、——私は濟まないが忘れて居た。

ちよこ〳〵と背戸口から庭へ入つて、緣先へ廻つて來た。

目が光つたので心着いて、私、此の怠惰ものが、机の本から、顏を上げると、旦那は嫌ひか、といふ。何を。春菊よ、といひますから、おゝ、然うだ、せつかく持つて來たものを、見えないやうに打棄りもしないで、婆も氣がつかんと、氣の毒だから、然う〳〵、一昨日貰つたッけ、とせめてもの事に、立つて勝手許へ出ると、小僧は疾い。

もう臺所口から、眞黑な顏を出しました。

十一

「其時に、孃さん、」

「は、」

と答へて熟と聞く。水の淺葱が、明く冴えて、輕く梢を傳ふにつれ、松の葉の色は沈んで、梢の藤の紫は、艶やかなる其の黑髮に影を添へ、一際顏の白うなつたは、晴れた日のやゝ暮初むる、天人石の光景である。

筒服の膝を動かしつゝ、辰起は、頭を掉つた。

「いや、嫌ひぢやない、人間の血が薫つたら、と思ふほど香の高い、佳い野菜ではあるけれども、斑猫が卵を產んで、春菊の根に巢くふといつて危險だ。玄吉、貴樣も食ふな、といふと、旦那大丈夫だ、といつて、孃さん。ちよろッと其の干からびた菜を攫つて、五六本根を揃へ、泥なりに、かし〳〵とやつて、眞白な、貝のやうな齒をきしませたが、ぐッと鵜のみにしたでせう。」

美女の息は細い咽喉を通つた。

「まあ、」

「で其の、好物ならば食べろ、といひます。

鮪を皮ごとぶつ切に、婆さんの手を借りず、春菊とぐつ〳〵煮ながら、はじめて、小僧とお取膳で食つたですよ。

飯も肴も一口ぢや、握箸でぐいと呑みます。それに驚きはしませんでしたが、日に幾度といふことなく大地に轉がるのぢやから堪りません、歸つた跡で、其の坐つた處が、」

と、裾のあたりの石の上を、搔い探るやうに掌以てして、

「ざら〳〵、砂――まあ砂利ですわ――砂だらけなのには弱つた。

けれども何、其の時分は、」

辰起は靜に手を伸べ、

「大の字形に寢て居るうち、世が變つて、疊に草が生えようが、流元が川にならうが、そんな事は構ひつけん、亂暴狼藉な心意氣で居ましたので、其晩一つ鍋をつゝいた時は、小僧と心中をする覺悟でした。

何も春菊を食べてはならないと、亡くなつた親どもの遺言があつたわけではないですけれども

……」

笑つたのである。

「はゝゝ、馬鹿々々しい羽目になることがありますものです。

匹夫も其の志奪ふべからず、小僧、意地は立ちましたらうに、其ッ切嫁菜も摘んで來ませんから、怒つたか、それとも、しよげたかと思つて居ますと、孃さん。

夏の取ッ附の事でした。

朝寐をして居る枕許へ、旦那、これを食ふかよッて……唯今お持ちの苺です。

苺は同一苺ですが、孃さんが籠をお提げなさつた、綺麗事とは世界が違ふ。それでも奇特と思召せ、蛇蛙の手つかまへ、毒で鍛へたやうな掌へ、二枚、朝ばれの月の雫は其れにもかゝつたやうな、濡色の青々した、苺の葉を、二枚で片掌へ丁どでした、其の上へ實を十ばかり、初物の取たてで、觸ると紅が溶けさうな、寢起の目にも涼しいのを、さあよ、と差出したんですが。

まるで、お庇で助かりでもした、猿が其の恩返し、夢枕に立つたといふ風に見えましたつけ。

最う此の苺と來ると、去年の師走、雪のかゝつた南天の實を視めながら、うはさをしたくらゐ、好きも嫌ひもない。

直ぐに飛起きて、緣側で嗽をした。齒に染みて、悚然とするほど嬉しかつた。

あくる日になると又持つて來た。昨日の二倍はあつたでせう。段々量が增し、數が殖えて、あとぢや何處で工面をしたか、笊に裝つて、凡そ一杯、然も毎朝。

此方もそれがために朝起きをするやうになつて、窓を開けては、其の笊を兩手でづいと天窓の上へ差上げて、背戸を入ると、苺の露に、植込を透す金絲のやうな日が射して、白い雲がちらちらと、蒼空が出て、ひや〳〵と、夜のあけるのを視めました。日和も續いて、何事もなかつたですが、」

辰起は空を仰いだ、憚る處ある如し矣。

十二

「芹、嫁菜とは違ひますわ。

路傍に蒼んだ枝でも、梅には鶯といふ主が居る。奥山に咲いたにせい、櫻には歌の主もあるものです。苺のそれも草苺、蛇苺といふなら知らず、大切に造らなければ出來ない上品、何處にただで取つて來る處があります。いたづらも些と嵩じた方で、屹と、餘所の畠を荒すに違ひない。

私は其の事を合點で居て、誰にことわつて來たとも、何處から撮んで來たとも、一言も聞かないで、笊から取つちや頂戴したのです。

實は傲然として、苺を實檢といふ構へ、玄吉が持つて來る笊を屹と見る時の考へは、まるで、敵の首を見るやうな、嬉しい、嶮しい、勇しい、糧に敵によつて、戰に勝つたも同樣。

ですから、孃さん、手下の小僧に掙がせる。しみつたれな、畠泥坊で居た癖に、自分ぢや修羅先陣の大將が、其眷族をして、梵天の紅瑠璃菓を奪ひ取らしむるやうに感じて、愉快で愉快で堪へられんのでありました。

なぜなら、敵手は世にいふ天女、苺は其の後苑の月かげに實るのであることを、豫め知つて居たんです。

爰に今、天女といふのは、やがて自分を、惡魔、外道、餓鬼、畜生、であつたことに思ひ當つたから申すので。孃さん、卽ち恐らく其の方であらうと思ふ、あなたのお師匠さんのことなんです、如何ですか。」

といつて一息ついた。辰起は答を聞かむず面色したが、それも纔かに一分時、時未だ疾矣と悟つて、美女の、口を開かざるに、先づ又熱心に語り續けた。

「其の時分は私決して、對手を天女と信じない、斷じて魔ものと考へた。それですものな、苺の實の美しく紅なは、やがて世界を燒き亡ぼす恐しい炎の尖の、凝つて冷くなつて居るのだといふことを疑はないで居つたので。

其の癖、界隈では、慈母さん――えゝ、これは何です、然う教へたものがあつた。居まはりぢや日南へ出る、定店の、ぼつたら燒の爺まで、私の敵の姫のことを、慈母さん、慈母さんといひました。西洋で、まどんなとか申すのと、同一寸法にはまるのです。

おつかさんなら、おつかさん、おつかはおつか、おふくろならおふくろだ、第一慈母さんが氣に入らんといふ、此の曲つた根性では。

嬢さん。

慈母さんの庭に、あの苺の實の見事なのは、皆姫様が、私たち貧しいもの、哀なもの、罪あるものを憐んで、月を眺めて落涙あると、涙の露が袖を溢れてなるのだ、と、いや、聞いちや居られん――眞面目に云つて、痰の絡んだ、いまはの際の病人も、吸へばなほると評判をした。

巫女め、善男女を誑らかすわ、と朝晩其方を睨みつけた、棟割長屋の北の窓から。それ、うらがれつゞき、葎つゞきの、落葉すると近うなつて、高い其の棟も見えました。

窪地を一つ、前にも申した、小石川の、茗荷谷といふのを隔てて、第六天の森の此方に、德孤ならず必ず隣ありといふ、有隣とした私立學院。

其の有隣山、學院洞の主人といふのが、嬋妍たる姫の姿の魔物でしてな。」

柔しい目ながら眼鏡の色、屹と輝いてきらりと夕日に。松のみどりは墨となつて、霞は石の根

に近く、波を含み、つゝじを籠めて、薄き虹ありて繞るに似たり。

時に天人石に相對せる、二人とも、世に超然として高かつた。

「主として貧民の兒を教育する、着物も食物も與へて、といふので、學校といつても、要するに、一人持の孤兒院、養育院といふやうなものでした。」

伽藍の鬼

十三

「家は伯爵だといひました。姫の名は、つき子さん、都、城、と書く。これでも生れが分りませう。春日井姓で、仔細あつて、一生尼法師にならうといつて、高島田の根を摑んだ處を、見附かつて留められた。綠の髪の、元結が最う切れて、ばらりと下つたのを、其のまゝ下髪にして、膝を結へた友染の扱帶を解くと、其の足で洋行した。屏風の中の香の煙が、二筋になつて、横濱の沖を遙に見えなくなる。船は香木で刻んだらう、薫が長く、其の居室に殘つた始末。十八の時だといふので。

ふらんすへ行つたんですな、八、九、十、二十、二十一、二、二十三の年、七年目で歸朝する

と、それまで仕送を續けて、都城子さんの身體についた財産を、大切に、護つて居た、姫には乳兄弟に當る男が一人、其の金子の事について命を亡くしたといふ事です。

しかし生命がけで預るやうな、志の厚い人が居たお庇に、身上は無事だつた。それを悉皆、有隣學院へかけたのださうで、一頃は養はれた生徒の數が、三百人上も居たものです。

姫が、鏡臺の引出しから小判を出しての仕事です。扶持をする小兒どもに、枝豆を賣らせたり、早附木を持たせてお辭儀させたり、そんなさもしいものではありません。

生徒の小いのは緋の洋服、又桃色の、十、十一二、四五あたりのは綠の服。女の兒は、看護婦の着るやうな仕立てにして、これが、はら〳〵ちら〳〵と、花園の中に戯れる。奥深くピヤノが聞え、高い處で鐘が鳴つても、諸行無常と響くのではない。

臺町といふ高臺の、戸外から一町ばかり四季咲きの薔薇の中に引込んだ、門まで敷いた小砂利さへ、瑪瑙の橋のやうに見えて、櫻が咲けば映るやう、もみぢが散れば流るゝやう。

人は是を、東京の乾の空の、天堂、極樂だと申しました。

苺は其の庭のを盗むんでしてなあ。」

辰起は苦笑した。

「いや、盗むんぢやない、分捕るんだつた。女妖魔の炎を消す、其の猛烈な擧動は、決して圓滿

な佛菩薩の所業とは思はんぢやあつたが、自分は昂然として、摩利支天の荒れさせ給ふと同一事だと思つて居たので。

さあ、それからです、苺は實つて盛りになるほど、戰は愈々勝つて、日一日分捕が多かつた。

ト一日、其の日の朝に限つて、玄吉が冷い炎を引掴んで私の前へ備へない日があつたんです。

鬼の霍亂、かぜでも引いたか、節分でもないに人間に追はれたか、と頻に氣にかゝつてならんのでした。

暮方、些と前。格子の外に、御免下さいまし、といふ媚かしい聲が聞える。

江戸の中でも場末です。初鰹だといふのに、盤臺を、紺の筒袖の下に抱へて、魚屋の女房が、亭主の代理に來る事がある。その他には更つて尋ねる女はない筈ぢやがと、上框の障子をあけると、目の覺めるやうな綺麗な令嬢、水際立つたのが袷の着流し、しとやかに、土間へ入つて、慇懃に會釋をなさると、(臺町の學院から參りました、つかひのものでございます。

御地内の小兒衆に伺ひますれば、苺が大層御好物で入らつしやいますさうで、丁ど庭にありあはせましてございますから、春日井が申します、貴下へ、)

といつて、手つきの籠を出されました。

私はハアといつたッ切。

其の時のおつかひも、年紀ごろといひ、容子といひ、失禮ながら、嬢さん、と一目仰いで、面を背けた、頭を垂れて歎息し、

「嬢さん、貴女にそッくりのやうに思ふ、私はどうかしましたな。」

十四

「それとも、それとも、嬢さん、貴女も何です、ふと私の此の顏に、お見覺えはありませんか。勿論、十年經つたです。自分ながら目も柔和に、頰にも肉つき、髯も生えて、其頃の相に較ぶれば、狼が象になつたやうだ。擧動も同樣、爾時は、然やう、先刻苺を頂かうとして、此の天人石のまはりを、嬢さんにからんだ通り、毒蛇のひらめくやうな、鋭いものでありました。如何です、」

屹となつたが、心弱くて、さし俯向き、

「いや、神佛は見通しでも、罪は淨玻璃に映つても、懺悔は自からいふべきものです。おや、嬢さん、煩くも聞いて頂きませうか。」

「其の玄吉とおつしやるお兒は？」

と松を離れて、やゝ近う、揃へた膝に手を乘せて、片手を靜に石に垂れた。妙なる乙女の姿し

て、打恥らへる狀ながら、爪さぐるべき塵のなきも、袖があたりを拂ふかと、ものの氣勢の神々しさ。

「はあ、先刻の夢が一寸の間で、今日がもし今日ならば、一昨々日、京都で腹を切つて亡くなりました。」

また四邊を見つゝ、力ある聲でいつた。——

新聞もこれを報じたのである。漣や滋賀の都、茶座敷に薄日のさすやうな、おだやかな京の町、俄然として腥く、腸を長く曳いて、東山より伽藍高く、蔓の浪に紫雲靉靆く、本山の門の扉に、仰向けざまに突立つた、首をがッくりと下に曲げ、鬼齒は春の霜柱、土氣色の唇を嚙んで、凶き星の如き眼を塞がず。出刃庖丁に諸手をかけ、足を踏張つた下腹へ、ずぶり拳の隱るゝまで、血汐は雲の渦を卷いて、立腹を搖斬つた、逞しきものの姿ありけり。

東雲になりても消え失せず、恐ろしかりける事かな。

まともに門をあけるが最後、天窓から此の鬼をかぶつて、地にめり込む處であつた、寺方は朝はやく、門番が潛を開けると、ぎやつといつて引くりかへつた。時に詰合の衆、肩衣して、手に念珠をかけた親仁、佛心ある上に、夜があけたれば驚かず、靜々と立出でたが、慌てて本堂へ引かへして、階を這ひながら、事ありく、としはがれ聲。

夥しく烏が鳴いて、忽ち人は黑だかり、僧俗馳違ひ折合ひて、前代未聞と上を下、洛中擧つて色を失ひ、えらいこッちやと大騷動。

やがて三條の片邊に、信州屋甚兵衞といふ、入山形に信の字の、暖簾も古いが、疊も古い、木賃めいた旅人宿の客と知れて、昨夜夜の九ツ時分、嵯峨野を斜に、光りものの轟と飛ぶのを見たものはあるが、比叡山の、天狗のなせる業ではない。貧ゆゑの往生、未來を助かる近道に、本山の門を借りたぢやまで、南無阿彌陀佛といふもあり、狂人だらうといふもあり、是尋常ごとにあらずとて、立退きの用意をするのもあり。

狂せりや、妖なりや、知らず、但貧ゆゑの死ではない。信州屋は木賃だけれども、東京からのぼる毎に、必ず彼處を宿とする、一個宗教界の名士がある。釋門の大德、蘆澤辰起氏は、山の俊、水の靈、信越の雪を分け、上野下野の雲を開いて、笈を京都に荷うた當時、信州屋に世話になつて、水菜の浸物に舌鼓を打つた昔を忘れず、今も定宿とする習。

近來、當地本山の財政悲境に陷りたるため、其の建設補助の許に、蘆澤氏が管理にかゝる、東京に於ける、なにがし學校、存亡の問題につき、昨週以來上洛中と聞く。自殺したる快漢は、名を玄吉といふ氏の從者なりと、新聞は種々にして、同一意味。

「小僧は二十歲になつて居りました。尤も自殺をする前夜、それとなく暇乞をした。其折に、小

兒の時、臺町の天堂を、自分が放火して燒き立てたと申しました。」

三十五人

十五

「其の時私は、敵が亡びたと雀躍した。魔窟が燒けた、と祝したです。

味方の勝利はそればかりでなかつたので、豫ての心願ではありましたが、迚も出來ない相談と斷念めて居たのが、京都の本山と調つたですな。

城の先づ繩張りが出來て、其處に、同宗門の子弟を、及ばずながら私の名で預ることになつたのでした。次第に規模も大きくなり、學校も立派に出來、博士學士の講師も入つて、生徒に俊才も顯れる、寄宿舍も建つ。講堂教室も落成して、一萬餘坪の庭も開け、松が榮える、螢が飛ぶ、萩も咲く、雪も降る。

此處を學生が揃ひの制服制帽で、肅然として出入りをするのを見ると、夏は其の色の白いにつけ、然もない時は黑いにつけ、さあ、恁うなつてから思ひ出すのは、緋や桃色や綠を着た、其の花園の小兒たちです。

あゝ、都城子さんの學院が今もあつたら。帝都に兩々相對して、此方に靈界の月が照れば、あちらは浮世に花を咲かせて、世は嘸風情なことであらう、賑かだらう、樂しからう、と身に染むやうに思ふにつけて、次第に空恐しくなつたのは、私が、自分の罪なんです。

學院は燒け落ちると、天堂は滅びました。慈母はそれなり、行方が知れなかつたんです。

凡そ私が思ふやう、呪つたやうになつて了つて、跡は叢になりました。蟲は鳴くがピヤノは聞えず、花は咲いても鐘は鳴らず。寂寞として、孃さん、こぼれ種の、苺はちら〳〵實るんですが、蛇が多い、巣だといつて、小兒も足を入れんのです。

あゝ叢になりました。

が、孃さん。

聞し召せ今鎌倉は麥畑ぢや、いづれか秋に逢はで果つべき。

本山の建設で、東京に私が預る、唯今申した學校も、一昨年あたりから、豫て亂れて居た本山の財政が、一昨々日——然うです、玄吉が死んだ、

其の前一日、同一叢となるべき運命が最う定りました。

燒けたのではない。

漸く學校も完成して、略礎も定まつたと思ふ一昨年あたりから、豫て亂れて居た本山の財政が、蔽ひ切れない破綻を生じて、次第に學校に影響し、雲行きが怪くなつて、會計の手元が暗く、

果は講堂の電燈も闇になつた。門を流すやうな雨は降つても、地固るわけには行かんで、日ましに土臺が傾くのです。

それがといふと、數百の生徒を教育する、衣食ともに、殆んど本山持であつたからで、私一個人の借金も、千を算へるやうになつた。

いよ〳〵土臺から覆つて、學校は骨ばかりにならうとするから、京へ上つては談判し、東へ歸つては交渉して、今月は今十日、十日の内に三度といふもの、東海道を上下したです。

最後の會議に、本山樞要の地位に在る、出家三十五人、尤も私ばかりでない、是がために、國國から馳登つたのが澤山あります。づらりと大書院に座を列ねた時、私は先づ其の着到の人數を算へて、あゝ、こりや不可ん、と豫め、それまでは未だ一縷繋いだ望みも斷つた。が果して廢校といふに決した。で三十五人も、恰も私を葬るために經を讀んだと同一形。

なぜ其の人數が、不吉であると申すのに、何處の諺にもありはしません。唯其の數が、十年前、都城子さんの有隣學院の燒けたのを祝して、地内の廣場に、長屋中の澤庵桶を持出させて、臺にして、雨戸を渡した卓子の上に、馬な、豚な、葱のぬたなんざ摺鉢ごと、貧乏徳利をすく〳〵並べて、立食の大盤振舞。

まさかに其の祝とはいへません。それ火事だ、學院だ、天堂が燒ける、といふと、駈け出した、

隣はなし、野中の煉瓦づくりだから心配はない、幻燈の火事を見るやう。」

十六

「然も、眞晝間燃えるんです。背後は茗荷谷なんですが、學院は高い處、崖になつて、竹藪がありました。其の崖下の家なんぞも煙をかぶりながら平氣なもので、煙草を飲みながら視めて居るやら、小兒を負つて、ねん〳〵ころりよ、なぞと見物をする女房が居ます。大勢の中へ交つて、私もしばらく見て居ると、向うの坂から十四五人、一隊旋風のやうに、颯と、足並を揃へ駈けつけた、いづれも同一火事裝束。

何の組だらうと見る間もなく、左右へ哄と開いた彌次馬の中を、眞直に縱に拔けると、眞前にたつた一人が、崖下に繞らしてあつた、藪を其まゝ倒して使つた、六尺ばかりの竹垣へ、身を搖るやうに乘りかけて、兩の肱を弓なりに、兩方へ引裂くと、ばり〳〵といふ音と一所に、突立つた頭巾の中から、凛々たる聲をかけて、

（耶蘇教の家だ、消すな！）といつた。

途端にぢやつた、吹下ろす風とともに渦いて來る煙に紛れて、同勢殘らず藪の中へ入つて了ふと、急に靜になつたやうな心持がして、ぱち〳〵燒けるのが壯に聞えた。

其處ででした、最う大丈夫と、引返して、其の祝なぞとは申さん。今日は誕生日だ祝儀をする、小兒たちは買出しに、女房がたは煮方に廻れ、甘味連には鹽煎餅、柏餅を振舞はうと、號令をかけたです。

此處で地内、五十坪ばかり、半月形に總井戸を取卷いた、長屋中、大掃除の騷ぎになつて、釜の下をもしつける、七輪から火花が飛ぶ、車井戸がキリ〳〵カラ〳〵。

通の板橋街道は、消防夫が引揚げる、見物はぞろ〳〵歸る、其内に支度が出來ると、お長屋の亭主連、ぽてふりやら、植木屋やら、仕事さきからぼつ〳〵戻る。おそくなつて、何と、老人の冷水で、火事見物に出かけた、中風症の親仁が到着に及ぶと申した工合で、雨戸を圍んで飲み出しましたな。

いや恐しい、惡いことには染り易く、私の惡、隣に及んで、小兒二人、手をひき、おんぶで母子三人、遠く市ケ谷のお濠へ行つて身を投げたものも長屋中にありましたが、そんなに食へなくなつてさへ、學院の慈母さんには、世話にならないといつたやうな、氣を揃へた外道どもが、羽目をはづしたから堪りません。

裸踊り、鮹踊り、野毛の山からノーエとやると、古風にかん〳〵のうを刎ねるのがある。七十になつた婆さんが、べこ〳〵三味線に調子を合はせて、猫化同然。いや、貴女の前ぢやが、其の

失態、お話にはなりません。

月夜になつても、影法師が騒ぎ止まんで、中には何です、自腹で、花火を買つて來て、鼬を放す、線香を卷き散らす、癇癪玉を踏み潰す、どん〳〵ぱら〳〵、其間にや聲を合はせて、萬歳、なぞと吶喊の聲だ。屋鳴震動、投げ上げる花火が破れて、井戸端の柳の葉が、夏のはじめだといふのに散るだらうではありませんか。

夜の九時半ごろでした。呆れ返つて、洒落らば洒落ろ、死なば死ね、此方人方は娑婆の人間、緣の切れた魔道ぢやと、斷念めたもののやうに、おもての人立もなくなつて、庚申塚のあたりまで、寂として了ひました。

踊るにも、唄ふにも、汐のさしひきがあるかして、びたりと水を打つたやうな。

其の時づいと立上つて、

（耶蘇は磔ぢや、天堂は燒けた、めでたい！）と大音にいふと、一同哄と諸聲に、

（萬歳！）

と高らかに唱へた途端でした。キラリと光つたものがある。

キラリと又路地口に、二條キラ〳〵と空に流れて、角長屋の破廂と、すれ〳〵に蒼い星が流れたと思ふと、沈んだ陰々とした靴の音、肅々と響いて來て、地から生え拔いたやうにすツくり、

野天の大卓の前に突立つたのは、銃劍を高く、しつくり肩にかけた二個の兵員。

一目見ると、蜘蛛の兒を散らすやう、月の隈々へ皆隱れた。中には、かひやの下へ這込んだものさへあります。よい〳〵殿は、からの澤庵桶を、倒に被つて踞む。」

十七

「別に仔細はないのです。地續きの近い處が、陸軍省の所轄地で、大な焔硝庫がありますから、番兵さんが注意のため、今のパチ〳〵を檢めに來たので。

（花火ですか、宜しい、）

と、直ぐに引返して地内を出ました。劍の、恐しくどぎ〳〵したのが、廂合の闇に消えると、薄ぼんやり、急にそこらが明いやうになつたですが、月が曇つて來たのです。

唯……

（旦那、旦那、）

と呼びます、私の事です。見ると四邊に音もしない、鼠が靜まつたやうなんです。井戸繩のきしむのが、ぎいと聞える。

（旦那、旦那、）

と呼びます、嬢さん、變な調子だが、玄吉の聲ですわ。
はてな。
覗くと、井戸の中に入つて居た。
「其の方なんでござんすね？」
頷きながら一呼吸つき、
「然うです。——
（縄を引張つてお呉んなさい。輕いからわけなしだ、）
といふ。井戸縄は、一つ中央で捻つてありました。緊乎と摑むと、片釣瓶に密と乘つた、ぎり
り、ぎりり、六尺ばかり、上までは未だ二三尺間があらうと思ふのに、ひよいと飛んで、井戸が
はへ、大な墓のやうに蹞んだのです。小僧の輕業は見事だつたが、不意に力が拔けたんで、私は
縄を曳いたまゝ、仰向けにずでんどう。」
「まあ、貴下お危い、」
顏を見られて額に汗、横ざまに搔撫でて、
「釣瓶が、ぐわッと、上の車に喰ひついて、何の事はありません。龍が口をあけたやうに、半分
殘つた水を吐いた、天窓から身體、びつしよりです。

駈けつけたのは、玄の親仁、私を抱きながら、
（馬鹿野郎、）
と叱りますと、
（爺が前へ遁げたぢやねえか、驚いたい、驚いたい、）
いや、一言もなかつたですが、玄小僧、其日は又、餘程水が戀しかつたものと見えて、晝の内
も、何か撮んぢや食つて、駈け廻つて、きり〳〵扱み上げては、釣瓶から口のみに、ごツく、ご
ツく、虎が渴いたやうでした。
私が水を絞る時、かこひもののをばさんは、内から路地を閉めました。これで、幕は切れたの
ですが、嬢さん、其の時のです。」
參會の連判狀、小兒を除いて男女とも三十五名と註したのであつた。
「お客が同一數ですものな。」
名は誕辰の宴にして、
「都城子さんの學院を、呪ひおほせた祝ひでせう。最後の會議に三十五人、私の學校の存亡も、
前から分らんで何うします。
丁ど、垣根を分けた消防夫が、

（耶蘇の家だ消すな。）と聲をかけたを聽いて、學院は根太までも殘るまいと、安心したのと同一事に。

せめて、其の燒けるのを、崖裏から見物せんで、表門の方へ廻つて、薔薇の花で緣を取つた、絨氈のやうな、芝生の中で、彈きかけた洋琴の前に、其まゝ悄れて立ちなさつた、羽衣を盜まれた天女のやうな、姫の姿を取卷いて、緋と桃色と綠の衣服の、愛々しい兒たちが、窓々を傳ふ炎を見ながら、周章狼狽して悲しみ惑ふ有樣を見ましたら、少くとも三十五人で、酒は飲まずに濟みましたらう。

實は私、言ひやうのない事をしました。

何と、それに、其の火事で、人が二人といふもの死んだです。生徒の內ではありません。保姆が一人、男教師が一人。慈母だの、天堂だのいふ語を、小兒にも敎へ、飴屋にもいはせたのは、此の人たちで。」

火の鼠

十八

「其の男の敎師にです、先刻饂飩屋の店頭でふと出合ひました、のたくつたやうになつて居たひよろ〳〵と長い旅商人體の男が、顏色もそツくりです。脊も又あのくらゐ長いのは、世間に澤山あるものではない。

尤も、姿はまるで違ふ、敎師は、其時分からもみあげを剃込んで、第一色の蒼白い、油できちんと髮を分けて、雪のやうな襟の幅、縱に五寸といふので、いつも薄色の服をつけて、竹馬に乘つた小兒のやうに、大股に、ひよい〳〵と。

これが、天堂々々と、階子をかけられるやうに稱へると、慈母さん、慈母さんと、敎へて、腹へおそなへを盜んだやうに、白い服の外からもだぶ〴〵見える、大な乳を、大道で、直ぐに飲ませさうな見脈をして步行いたのは、四十恰好の女敎師で、此の又づんづら短い事、橫ぶとりに肥つた事。顏といひ、容子といひ、ぶく〳〵とした工合、眞鰒を風呂敷に包んだやうで。

よくあの界隈を晩方なんざ、二人並んで步行いたもんです。で感心をするものは、あの靑竹を女敎師の胸へ立てて、其處から小兒を天へ昇らせるのであらう、と蔭でいつた事でした。

何も、學院の姫が、故と不思議なものを選つて、廣告につかつたわけぢやないので、膨れるものはます〳〵膨れ、長くなるものは愈々長くなります、どうにもいたし方はないのです。

いつもは此の人たち交る〴〵、遊戲の時間には洋琴を庭へ持出して、小兒たちの、櫻々、など

と唱ふのに、合はせるのが習ひでした。

姫は、唯、召ものの袖の綾が、窓かけの切に映つて、奥床しく見えるばかり。花園の花に影がさすと、綺麗な蝶の行く方へ、其の窓、此の窓、あの廊下、其處を通らるゝ、と思ふに過ぎず、戸外へなぞ、めつたに出た事のない方が。

燒けた其の日の晝に限つて、自分で洋琴に向つて居られた。騷ぎの前に、垣間見たものがあつて、お十八九にしか見えなかつた、と驚いて申しました。

二十五です。

其の日は學院が出拂ひで、室内には人つ子も居なかつたでせうな。

玄の奴は、藪を潛つて、其處へ裏口から忍び込んだ。日中だのに、桁を走り、柱を傳ふ、恐るべき火の鼠なんです。

小遣で買ひ溜めた、石油の鑵をぶら提げて、窓掛、襖、額、戸障子、打灌いだあとへ火をかけたんです。高い處は、口へ銜んでふきかけたつて、勿論、形も影もないものの手傳ひもあつたのでせう。怪しい獸が、駈け拔けるやうに、くる〳〵と廻つたあとから、火と火と八重に、十文字に、繋り合ひ、結び附いて、筑紫の不知火見るやうに、數限りのない炎になつて、ひら〳〵と燃え出した。

花園には姫が彈いて、小兒が唱ふ、櫻、櫻、蝴蝶、蝴蝶でありましたのに。

姫は唯白い片手を擧げて、小兒は殘らず留めました。

背入れないで、乘込んだのは、例の肥つたのと長いのとで。

一人は玄關へカラーが支へ、一人は入口へ腰があふれて、重つて、押し合うて、しばらく淀んでもがいたのは、入るなといふ、天のしらせ。

部屋々々殘らず、火が廻つて居るのですから、やがて一所に入りッ切、煙に卷かれて出て來なかつた。其の時分にや玄吉が、おもてへ廻つて見て居たさうです。

物心覺えてから、玄吉は、自分ながら、不思議な事があるものだと、いつも其れを思つた、と申して、其の自殺をする前の晩。最後の會議の濟んだ夜です。はじめて放火をしたことを、私に話をしたことですが。

苺を盜むのを目つかつて、二人の教師に縛られた、腹いせに、鍋墨を拵へて忍び込んで、方々へ噴き散らした。

丁度其のあとが、故としたといふではなしに、殘らず火になつたといひました。教師二人の顏とからだへ、先づ眞さきに塗つたのですつて。

あゝ、此の事は未だでした。」

といつて小首を傾けた。

十九

それよ。

「嬢さんによく肖たといひましたな、其の學院の、お使の參つた翌晩の事だつた。

餘り前後になるやうです、其の賜物の籠は突返して、

（お使者がら恐縮です。お庭の紅い實は、ありや、毒草だと思つて苅らせるのです。歸つて姫様に然うおつしやい、苺なら入らんのです。決して頂かん。）

と冷汗を搔きながら、やけにふてくされを申して、障子をぴつしやり遁げ込んだ。

矢でも鐵砲でも持つて來い、盜賊になつて縛られて遣るまでだ、とふんぞつて寢ましたが、玄吉が案じられる。日が暮れても顏を見せないではありませんか。

しかし雇ひの婆さんに聞くと、歸つては居るので、何故か今日は神妙に内に畏つて出ないといふ。別條はありません。

あくる晩、夜が更けてから、丸窓をコト〳〵と敲いて、キキと笑ふ聲がそれですわ。枕の上から、かたりと開けると、いきなり、ぬッと手を入れた、狸を見たやうに眞黑なんです。何だ、と

聞くと、

（旦那、昨日は遺損なつたい、三すくみだぜ、旦那。おいら、なめくぢを見たやうに、苺の葉にたかつて居ると、黄領蛇の教師の奴と、蝦蟇の年增めい、手をつながつて來やがつたつけ、しらしらあけによ。

見つけると引挾んだい。おゝ、苺盜賊はこれだ、いふと、引搔いたが間に合はねえや。長野郎はひよろ〳〵だが、ふとッちよめ、うむといふと引抱いた。恐しい力ですぜ、呼吸がつまつた、大いからね、蒲團蒸をされたやうだ。湯氣に上つて殺されさうだ、ぐんにやりしたい。

處をおいらが帶を解いて、縛りやがつた。あとでね慈母さんのお情だ、助けて歸す、盆に禮持て來いが聞いて呆れら。

口惜いからね、長屋中を駈け廻つて、臺所へ這込んぢや、鍋墨をこそげためて、溝泥で揑ちたぜ、斷切るやうにねばるからね、水で解いた、おまじなひに唾を入れて、空瓶の口を繩でからげて、拔けねえやうに、）

と鼻の下を、中指の黑いので引擦つて申すのに、

（恁う鼻膏よ、ずりッこけねえ、傳授事のおまじなひだ。其處で以てからに肩へかけて、日が暮れると、眞暗な庭へ潛り込んで、月の出るのを待つたんですぜ。

こんな晩にや、屹と二人でつるんで出やがる奴等だ、と狙つたやうに、お月様が歩き出すと、影ッ法師が動いて來やがる。

兩手へどッぷり、口へも一杯。はらんばひになつてると、姫さまが、どうとかだから、外國の誰とかを、引張り込んで、おもてから鎖をおろしや、右から左へ禮が何とか、いくらとかで、然うすりや、あんな人だ、口惜いとかで、死ぬとかだ、あとでは金子も、學校も、私たちが、何とかだ、とべちやくちや饒舌つて來たんですぜ。何とかが何うとかでも、そんな事は構はねえや、見やあがれ。）

と發奮んで、敷居に飛附いて、話しましたが、何でも、ちよろッと出て、べた〳〵と塗りながら、脊高の身へ駈け上ると、わッと反りかへる鼻へべとり。うむと呻つて一倍膨れた、女教師の胸を張つて仰向く顏へ、烏賊が吐くやうにふッかけると、地響を打つて、苺畑へ、ばあと裾が擴がつた。束髪の上を土足で飛んで、一目散に遁げ出すと、やう〳〵人心地になつたと見え、彼處だ此處だと、庭中を、よた、よた、ひよろ〳〵。

玄の奴は、草がくれに玄關へ又ぬいと出て、敷石の上へ、どぶ〳〵と一ッたらし。瓶を抱へ直して、二人の出たあとと見える、校内へ密と入つて、部屋々々を拔けつ潛りつ、額も、窓かけも、手當り次第に、鍋墨を塗つて通つた。石膏の美人像も、マドンナの油繪も、講堂の扉も、あくる

日は墨だらけ。恐らく夜を除いては、生徒の色も、花の色も、黑いものといつては、姫の髪ばかり、と思はれる學院中、鬼の足痕のやうに汚されました。

別に目印にしたといふわけではなかつたのださうですが、石油は自然と、皆其箇處々々。つまり鍋墨が炎になつて、蜂の巢のやうに燃え出したんです。」

卯の花傘

二十

「燒落ちると雲が出て、猫、狐、狼、狸、私の祝宴が果てた時分、——一面に曇つたのが、夜が更けて、寂寞した雨になりました。で、何處まで怪しからんか、數が知れない。傘をさして、密と木戸を開けて出たのは、慰みに燒跡を見ようといふ了簡なので。

大塚の通りは、朧々とシッとり濡れて、淀んだ河を渉るやうで、づッと果が黑い雲、夜目に浮上つて一條長い、惡魔の通る路なんです。

草深い土手の間と、樹の下の枝道を、二ケ處、眞暗な中を拔けましたから、臺町へ上ると又別の夜になつた。背後に森は控へても、學院の燒跡は、途中暗かつた目に、茫乎とはしたが明るい

のです。

混雜に押倒した門の上を、ばり〳〵と足駄で蹈んで越えた時は、一將功成つた意氣でした。

泥に塗れ、飛火に焦げて、むら〳〵と散り亂れた、薔薇の花の、なごりの香を吐くのが煙になつて、あつちこつち、まだぷす〳〵と燻る中に、芬と匂ふも可い氣味ぢや。

時は經つたし、雨にはなつたし、火の氣は塵も殘つちや居ません、勿論人一人居るのぢやない。

前途に、さつくりと稻妻形に、宙に龜裂の入つたのは、外圍の煉瓦の殘りで、其の物凄く、冷たさうだつた事、魔を封じた塚のやうです。

足許に障子が一枚落ちたのも、晝間燒けたものとは思へず、大波が來て、滅して、勝鯨波を擧げて、退いたあとと考へられる。

然ういへば、何處にか轟といふ音もする。

燒瓦の缺、木の焦げさし、黑く轉がつた石塊なんざ、女蔦に攫はれて、後に天狗にならうといふ、緋や綠、桃色の卵の殼だな、見ろ、苺も砂利になつた。……

ざら〳〵と足駄の尖に攪廻して、燒焦げだらけの芝の上へ上りかけると、若葉の枝ぶり、梅か、と思ふのが、薄墨で描かれた許に、見事な芍藥の花が一輪、すら〳〵と咲重つて、花片の刻はなく、なよやかな姿がありました。

透すと人です。

慄然としたが、勝つて驕れる愚將ぢや。

傘を斜に取つて、跫音を忍んで、寄りますと、そればかりは殘つたらしい、オルガンでせう、樂器の前に、椅子にかゝつて、額をおさへたなり、譜の上に肱をついて、呼吸もなささうな洋裝の後姿。

兩の肩のふつくりしたのが、髪と一所に搖ぐのは、此の花に降る霧雨が、霞となつて靡くのです。私は泣いて居るのであらうと思つた。

密と、上へさしかけたんです、降伏した敵將を憐む雅量、と大得意。

傘は、燒崩れた煉瓦の裂目の、最も高く、就中鋭いのとすれ〳〵に空でしたし、糠雨ですから、降りかゝる音もしなかつたのですが、氣勢が襲つたと見えて、俤に立つて、顏を上げて、」

と、ものに怖ぢたるさまして、辰起は手で額を蔽うた。

「私と屹と向き合つたんです。

一目見たのを忘れません。

あゝ、釋尊も、基督も、意地も、我慢も、信仰も、我身も、此世に忘れ果てて、惡かつた、と氣がつくと、石のやうになつて了つた。腰が碎けて、あはや、手をつかうとします處を、飜然と

出た小さな黑い影法師が、玄吉です。私が負けると見たか、姫をドンと突き遣つた。二三尺離れた隙に、前後忘却、疵だらけになつて遁げたんですが。

思ふまゝ、清洒に裝はせて、學生をづらりと前に、講堂の正面に、自分、倫理を說く時も、時時目が臺つたのは何の爲、其の夜を幻に見るからでした。」

波のしらべ

二十一

「一昨々日、愈々本山の會議が濟んで、悲しい運命の極つた時、信州屋といふ下京の、定宿へ歸つたのは、あかりが點いて、しばらく經つてからでした。

玄吉は、ごろりと肱枕で寢て居たです。其時に限りません、京都の上下ばかりぢやないので。三日學校をあける時は、屹と玄吉を同行しました。

ともを連れる用はないが、私の目が屆かない處ぢや、どんな事をしようも知れないからです。

飯は、と聞くと、待つて居てまだだといひます。私は寺で濟ましたのに。急いで食べさせ、遠慮は入らない、些と見物をして來いといふと、上方の風はぬる〳〵して厭だ。そんなことをいふ

なと云つて、無理に小遣を持たして出した。

私は一人で落膽して居たかつた。玄吉のむず〳〵したのは、いくらか顏色でも惡かつたのを氣にした所爲と見えるんです。

一杯機嫌で、威勢よく歸つて來ましたが、更めて手をつきました。

私は丁度、學校を閉ぢるに就いて、傭を解いたり、補助を留めたり、さしづめ途方に暮れようといふ少からぬ人たちの名を、手帳に記して、床の上に、坐つて、ぼんやり行燈で讀んで居ました。

（旦那、私ア餓鬼の內から、長いお世話になつたんですが、此場ッ切お暇を頂きます。）

と悄れながら、いひますので。

（いや、學校は止しても、お前は違ふ、私と一所にくらすんだ、）

ッて大方、會議の樣子でも聞いて自分も入らない人間になつたから、と氣の疾い奴、先を見越していふのだらうと思ひました。

玄は何です、怪しからんお話しですが、奴の親仁ですな、かこひもののをばさん、と申したのと密通をいたして、遁げまして、勿論小僧を棄ててなんです。

で、私が世話をしました。學校へ入れようとすると、本はいやだ、小使なら遣る、といつて、

望なんで、人の五人分立働いて居ましたので。

（否、旦那がお見棄なさらねえのは存じて居ります。おもてで、様子を聞きますと、學校はとうとう立行かねえと極つたつていふことですが、就いちや、）

と、此處で放火をいひました。餓鬼の内は小さくつて、網の目はこぼれて居たが、罪の免るゝ處はない。こんなものと、深い中で居らるゝから、天地自然に其の祟りで、學校が潰れるんだ。惡緣を切りませう、斷つて然うしないと氣が濟まぬ。尤も生命は惜い、暗い處へも行きたくない、發れるまでは祕して居る氣、しかし思ひ立つた事ですから、お別れ申すだけは、此の場切ッて、何うしても肯きません。

昨日なら又もしやといふ事もある。不可んと相談が極つてから、身を退いて何になる、罪は私も同類ぢや、半分背負つて償はうからと、いつて聞かしても頭を掉つて、曾我の五郎を御覽なさい、由井ケ濱で斬られようと、首の座に直つた時、赦免の上使が駈けつけたつて、今にも相談をやり直しの、學校を續けるといふ電報が來ないと限らぬ。是非、といふので、味は知らんのでありますが、弟にでも分れるやうで、一晩眠られなかつた翌朝。

洛中は一夜の中に、本山の門の前へ火山が湧いたやうな沙汰です。

まさかと思つたが、行つて見ると、目を開けて死んで居ました。

私が庫裏へ抱へて入つた。懷中に、釘の折を、嚙んでたゝきつけたやうな字で、

——おいらは死んでも突立つてら、學校を倒すな、賴むぜ、坊さん——

と、してあつた。

頂いたのは私ばかり、呆れるのもあり、笑ふのもあり、馬鹿々々しいといふのもあり、大概は狂人あつかひで、中には眞面目に怒つた人さへありました。

人生意氣に感ずですが、金子のないには勝てんのです。虎は犬死しましたが、骨は私が佛にした。で、戒名だけを膚身につけて、悄々東京へ歸り道。」

二十二

「急ぐ張合もありませんから、彦根の中學校を預つて居ます、大學時代の朋達がありますので、それへ道草、道草が嵩じて、彦根から又石山へ、湖水を引返すことにしました。

學校へは屠所の羊、半日でも遲く歸らう。面と向つては、さていひ憎い。いよ〳〵廢校のことの趣、これを、一同、教授連と學生へ、手紙でいひ送つて、久しぶりで、……一杯飲んだ。

日暮前に、湖水を船で、石山へ渡つたんです。

今日のやうな好天氣、月が出てから景色は見よう、と取つて置きにして、日のある内は閉籠つ

て居たのですが、徒然でなりませんから、其處で、般中にありあはせた、講談本の、此處に、酒の瓶、鮒の鮨と一所にあります、此の義士傳を讀んだのです。

お話し申すまでもない、大石が城を開け渡す一段になつて、思はず俯向けに伏せました。最う讀むまいと思ふと猶見たい、三度同一ところを視めながら、何となく、恁う、胸が迫つて來て、心が闇になりますので、あゝ、と自分で顏を掉つて、霞んだ氣がしますから目を擦つて、それから駈けるやうにして甲板へ出たのです。

何時の間にか夜が更けて居ました。豫てそれを見ようと樂みにした、水を切る舷の波の走るのが、銀を流すと、白い瑠璃の階が、星を鏤めてきら〳〵と月の下へ搖れかゝつて、神女の、月宮殿に朝する姿が、あり〳〵と拜まれると申します。

それには月が高過ぎましたが、霜のやうに輝いて、自分の影の映るのが、可惜いほどな甲板。湖水は、唯渺茫として、水や空、南無竹生島は墨繪のやう。御堂の棟と思ふあたり、影がさし、月が染みて、羽衣のひだを見るやうな、水無月の富士山の頂に、雪の枝打つて細いのを、遙に望むやうでした。

勿體ない、其の島影を拜むのにさへ、神女は宮殿に住まるゝ、とお堂のあるのが羨しかつた。私は大石の心を察して、背後を向いて泣きました。

學校を家とした、教師に別れねばなりません、生徒に離れなければなりません、都城子さんの學院が燒けた如く。ト船は今三界に住家のない、孤客を乘せて、琵琶の湖心を、晩春の月皎々と更けた夜、撥を動かして走るのです。浪の音は悲哀な調で、樂器を鳴らすやうなんです。

然うすると、孃さん、其の中空の何の邊にか、學院の姫が居らるゝやうです。何となく見えるやうです。もし一點の、美しい、雲の形でもありましたら、直にそれを都城子さんの姿ぢやと思ふうたでせうが、澄み渡つて星もない。

水には時々隈がさす、けれども、それは水草が漾ふのです、魚が遁げるのです、覗く自分の影なのです。

以前學院の内を、お歩行だつた氣勢にも、窓かけの色にかさなつて、薄く紅は透く、淺く綠は透く、輝く指輪の黃金の蕋に、慕ひ寄り憧れ寄る、蝶々の翼は映つても、つひに姫に、黑い影があつたことを見たものはないのです。

ですから影もない、形もない、衣ものもない、袖もない、縫目もない、絲もないが、唯其の時、湖のいづれにか、いや、いづれにか、といふよりは、月と水との間に、みち〳〵ておいでのやうに感じられて、身の措き處がなくなりました。

で、唯恁う、甲板の冷い欄干に取着いて、俯向いて居たんです、然うする内に、水が恁う、」

と、辰起は左右の手が、大氣に交る水の影、樹の間の波の影を撫でた。雫も露もかゝらぬが、手首冷たく覺えたは、不覺の涙のあとであらう。松の葉は、はら〳〵と、琵琶の音じめに紛うたのである。

「顏へ近くなつたやうな氣がしますと、湖は狹くなつて、瀨田の橋が白みました。」

二十三

「白雲がかゝる、松が見える、石山寺はほの〴〵と、漁師町は遠見の靑柳。

昨日石山へ參詣して、彼處で海を視めたですが、昨夜の景色が忘れられず、又つかぬ考への起つたのは、今にも背後の襖をあけて、紫式部のやうな姿で、姫が出てみえはせんかといふので。

もし然うしたらお目にかゝつて、一言おわびが申したい、と何となく襖一重、むかうが千疊敷の廣間ででもあつて、端嚴微妙の方が其處にといふやうな氣がして、一日。

黃昏に石段を下りる時も、のぼり下りの見物の行逢ふ中に、自分だけ、一人、うしろ髮を引かるゝやうで、一段づゝ、あとが霞に包まれるかと思はれてなりませんくらゐでした。

石山では、玉喜屋といふのに泊りましたが、宿の裏は、すぐに琵琶湖のへりでありますから、昨夜も月夜で寢られませんので、寢衣に着かへてから、裏へ出て、澪標に並んで、立つて居ます

と、亭主が氣の好い優しい男で、緣臺を出して呉れたんです。

此處で、ひがひと鯉を肴に、さしむかひで淸酌して、夜更けるまで、竹生島の話をしました。

胸もすが〳〵しくなつて、此の邊に庵でも結びたいやう、何事もしばらく忘れたので、昨夜の夢は穩かでしたが、彼處此方二階中、はた〳〵と夜があけると、すぐ又浮世の人になつて、汽車に乘ると、早や一足づゝ、東京へ近づいて、皆の失望した顏を見るのが、目の前に泛ぶのです。

ト此の驛で、汽車に故障が出來たんです。停車場前は俄に市が立ちましたが、私は一人、あの橋を渡ると、急に晝が夜のやうに寂寞となる、故道へ、ぼんやり入つて、下の里へ取つきから四五軒目にあります、饂飩屋へ入つて、一寸晝食を認めましたが、給仕をしてくれた、其處の娘に、此の天人石の名所を聽いて、名も湖も懷しさに、上つて見ようと出かける店で、よく似た男といひました、——旅商人に逢つたんです。

私は、志を得て、長屋から越す時も、ばら〳〵と木の葉のやうに背戸庭へ澤山來て、緣側で馴染になつた、雀に、唯其のわかれるのが、心さみしく思つたですもの。

燕の巢が懷く、あゝ、これも家があると、羨しくッて、お恥かしい、しばらく、店前を塞げたですから、煙草は用るんが買ひました。商人に尋ねると背中の兒の、名を、げんきち、と申すではありませんか。

其の目も光る、因果は繞つて、日……も、月……も、此處で結びがつく事と覺悟をして、恐々古寺の門前の石碑を密と讀んだのでした。

いや又、宿の片側の、道具屋、金物屋、石屋の店の不秩序に混雜した、商ものの並び工合、片側の荒れた形、右を向いても、左を向いても、怪しや、燒あとに肖たと思ふにつけても、魚屋のあるじに、恐しい石の下にしゝびしほになつた鮒の、三年經つた、といはれた時。——

あゝ、姫に對し……自分自體の處置は、其の粕桶の中であらうと、慄然と身の毛のよだつた所爲か、石に上つて、湖を見つゝも、心を責めて、船中から、給仕に賴んで持つて來た記念の義士傳を讀むうちに、」

あまりに胸の切なさや。

腰蓑

二十四

「身の置處はないにしろ、水の底にも墓はある、何故、其の時、湖水の魚にならなかつたらうと、胸は時間を刻むやうに、がく〳〵引き入れられさうに、氣が滅入つて行くんです。

然うすると、此の石に曲げて、顏を乘せて居た肱も、手首の方から、力が拔けた、身體は松の梢なり、宙に居る心持になりますと、まばゆくほてつたのも、冷々して來て、體中しびれたやうで。

此處へそよ〳〵と風が來て、此の波の景色が動くたび、常磐木がこぼれもする、こぼれた葉もさそはれる、それが、はら〳〵と頰へかゝつて、さらりと當るのが段々細く伸びて、これから、これへ、」

と頸を、肩を。

「撫でたり、絡うたり、擦りもする。其の中、びしよ、びしよ、何處ともなく音がする。來た路に清水はなかつた。樹蔭も乾いて、大雨に崩れたらしい窪んだ處も、砂利に山躑躅が赫とこぼれて、ちら〳〵漁火の燃えるやうな、山々は青々として綠滴るばかりながら、凡そ此のあたりの地は、不殘、琵琶湖へ絞り拔いたかと思ふまで、水は些ともなかつた筈。

天人石は上にあつても、罪ある自分が上るのだ、松の葉も針の山、と恐を抱いたほどだつたに、待て、此の石にばかり泉が湧くか知らんと、がツくりなりに、ぴつたりつけた。耳がひやりと冷たかつた。

唯颯々として何ものか地軸を吹いて行く氣勢でした。

やがて、それも聞えません。
床にも、枕にもした此の大石が、遮るものなく、繋ぐものなく、ねばりもせず、もろくもなく、根から離れて、ふは〳〵と浮いて、おなじ處を動くやうな氣がするので、心着くと、寒くはないが、光が骨に浸む佳い月夜で。
何と！四圍皆渺茫たる水なんです。其の有明の富士の頂、月に羽衣のかゝつたやうな竹生島を遙かに望む。
然し、それが、倒に水底の影を見るのか、月の下に、島が浮いて居るのか分りません。
場所は、一昨夜、確に通つて來た場處ぢやありましたが、私の姿も、船もない。
遠く向うに、明い夜を、竹の葉の落つる風に、一枚、小船が漕いで居ます。
別に苦しくもなし、痒くもないが、あまりのたよりなさに、其の船のある處まで行つて見ようとしたのですが、何のくらゐ遠いか分らぬ。雜と自分の考へぢや、三千里はあると思つた。
物語に聞いて居る、水晶の渡殿はないか、瑪瑙の橋はないか、物干棹の階子もあらば、それを便りにと、うつゝ心に、まあ、先づ鰭を動かしたんです。
此の目で。」
といつて、眼鏡をそツとはづして、其を、手巾以て拭ひながら、

「目を三千里の水面へ、半分出して、鯉や、諸子鰷や、自分の友だちの姿は見ないで、偏に其の船の方へ。
月夜は其まゝ。
明けもせず、日も暮れぬが、幾日經つたか、何月か、年もどのくらゐ越したか知らん。凡そ此の湖にあらゆる魚の鱗の數を合はせたほど、小うねりに畝る波の數を、次第々々に一ツづゝ泳ぎ拔いて、月に、やゝ、薄雲のかゝつたとき、船のほとりへ着いたんです。
唯、湖上へ、障子をはめたやうに、白くなつて、船の中に居る人が、影のやうに見えました。
二人居て、さしむかひに二人坐つて、二人とも婦人です。
舳を背にしたのは年紀が些と上で、舳に向いたのは少し年が若かつた。繪で見る、村雨、松風かと思ふと然うでない、饂飩屋の母娘かと見たが、無論違ふ。
少いのは水紅色の褄を深く、年紀上のは、淺葱の襟で、腰蓑をかけて居た。いづれも端麗たとふるにものはない。
夢か、清しい瞳が動けば、幻か、美しい影が流れる。其の黑髪も、あの雪を欺くといふ、顏も頸も見えましたが、船が開く、波が隔る。
と雲が晴れて、月が明うなるに從うて、船も人も、却つて澄み渡つて薄くなりますから。

慌てて、追ひ縋ると、又薄雲がかゝるんです。
船も人も明く見える、其の俤は、と寄らうとする。
船が開く、波が隔る。
と雲が晴れると、月が明くなる、船も人も消えさうです。
追ひつくと雲がかゝる。
あゝ、其の口許を、と水から魚の頭が離れる。
船が開く、波が隔る。
波は颯と、其都度、濃い緑になるのですよ。
おなじことを何度か、不思議に岩角に頭も碎けず、水草に咽喉も縊られないで、最後に、船と月との中に、一むらの白い雲が、やゝしばらく漾うて、十筋ばかり、絹絲をかけたやうに、颯と雨が來た時でした。
少いのが、小笠を取つて、腕を白く衝とかざした下へ、鬢の毛がはら〳〵と、年紀上なのが、つむりを入れて、密と其の掌をあげたと思ふと、霞を解いた小さな網が、澈のやうに水の面へ音もなく廣がつた。
私は飛上つて船の中へ。

少い方が、庇つて呉れると見えました、ト斜めに取つて、下へ開いた袖の上を、飜然と越えて、年紀上の方の、手の裡へ入つたんです。
乳房に縋つた膚ざはり、自分の母親の懐に抱かれたと思ふと、骨も身も溶けたです。
靴音がして、
(鮒の鮨下さらんか、)といふのが聞えた。
自分の聲です。
吃驚して目を開けると、私は俎の上に乗つて、屠犬兒のやうな、賤しげな、肥つた男が、前はだけにしやがんで、庖丁を取つて、逆手でせう。
野面で、戸外から、店頭の土間を覗き込んで、
(直ぐに喰べるのぢや、可加減にぶつ〳〵やつてくれい、)
といひます。
おのれ惡魔、學院の姫を呪つて、炎を吐いて、黑い影のある處を片ッ端から焚いた奴の。
洒亞々々と琵琶湖を渡つて、鮎の煮浸で三椀の飯を喰ひ、一錢が煙草を買ひ、義士傳と一所にして、衣兜の口を開けた、ずり下つた、其の態は何だ。
面はよ、目はよ、帽子はよ、服はよ、口はよ。

（馬鹿、）
今日は母様の精進日だに、
（馬鹿野郎、）
と喚きつけようとすると、聲が出ない。唇は閉ぢつけられて、舌にしつくいを塗られたやう、骨はしびれる、筋はなえる、いや、其心地といふものは、」
と、思はず口を拭つたが、今は早やしゝびしほの苦みを忘れ得て、唇に香の殘る、苺の露を拂つたのである。
思ふに、……其時湖水を通つた人があつたら、船も霞も見えないで、唯、水を放れて、潑剌として魚の躍るのを見たであらう。
「自分は鮒に化けたと見える。
酒の粕に浸されて、大盤石で壓しつけられる、其の苦みを呻吟つたんです。
さては夢と心着くほど、咽喉が乾いて堪へられないので、前後不覺、毒蛇のやうな形をして、嬢さん。鮒の癖にあなたの苺を奪つた、盗んだも同じです。
是なんですから……
引摑んでも、引摺つても、姫のかくれ家へお連れ下さい。しかし餘りの當推量、よし、間違つ

ても構はんです、命終つて仔細はないので、一目見て、お詫を、」
と心を籠めて、熟と瞻めた。
美女の目も露を含んだ。しばらくものもいはなかつたが、衣紋を繕ひ、容を更め、
「ともゞ〳〵お察し申し上げます、實は、私は、あの、其の時の使と同一ものでござんすよ。」
「……」
「更めて姫様から、貴下へお口上がございます。
仇同士も御縁の端、定まつた約束があるのでござんす。
決してお怨みは申しません。
懐しいお客様がおいで遊ばしたが、山家のこと、片田舍、せめて、これを、とおつしやつて、私と二人で摘みました。
苺は貴下へ。
私は、おつかひに參りましたが、思召しが以前のやうでございますと、召食らうとなさいましても、これが火になつて燃えますから、それでは却つて、お渴き遊ばしたお口を燒いて、猶お苦みを增すばかり、心しておあげ申せ、と姫様がおつしやりつけ。すぐにはお言に從ひませんで、失禮でござんしたが、私の手から召あがつて、冷い甘い露の味とお喜び下さいまして、お嬉しう

存じます。

而してお目にかゝりたさは、姫様もおなじお心。それでも貴下が五十年、百年の後でござんせんと、時節が來ませんから不可ません。それをおむづかりなさいますから、姫様もあなた、時々、あの……長いのと、肥つたのが、玄吉さんに鍋墨を塗られた時の、其の顏色のをかしさを、お思ひ出しなさいます時でなうては、莞爾と笑顏を見せなさいます事はないのでござんす。

貴下もおあきらめなさいまし。

……そんなに思召して下さいますなら、更めて姫様からお願がございます、お肯きなすつて下さいまし。

お住居の此の山は、清淨な處ですが、下には惡いものばかり、月の下へ黑雲のかゝりますと同じ事。學院の極樂に、長いのと肥つたのと、惡魔が住んだと違ひません。此處は天上、町は魔界。

あはれな美しい御存じの、あの饂飩屋の母娘の人も、魔に魅入られて危うござんす。商人の形に變じた、鬼のために、今夜にも汚されようといふ處、其の外の人たちも、皆それ〴〵に惱みがございますのを、自然とお分りなさいませう。

百人千人お教へなさいますのも、一人を二人を、お助け遊ばすのも、貴下の勤は同じ勤。學校のたちますまで、此處で庵をお結びあそばし、たとひお姿は見なさいませんでも、姫様と御近所

で、松の風、浪のしらべ、同じおもひを通はせたり、燕にことづけて、心ゆかしになさいましな。貴下、」

と教へる。

辰起は眼を塞いで、福音を聞くのであつた。

「これから山をお下りになると、下の宿は大騷動。

あの、寺は、怪しい恐しいことがあつて、長く無住になつて居ります。其の草の生えた本堂の、板敷の眞中、合せ目と思ふ處に、蛇の大きなのが、三條、鎌首を立てて、睨みますので、葬禮が一組、僧俗も立窘みになつて居りますから、貴下がおいでなさいまして、貴下がお世話なさいましし。

懷にお持ち遊ばす、其の玄吉さんの戒名を、掌へ取つて、お示しになりますと、煙のやうに消えませう。

宿の人は、坊を清めて、貴下にお机、お褥を差上げます、――しばらく其處に杖をお住め遊ばせ、と姫様がおつしやいます。……

私だけは御用の時、お傍まで參りませう。さあ、時刻になりました、又、お目にかゝりますまでも、おなごり惜うぞんじます、貴下、もし貴下。」

といふ聲、裳のはこびはら〳〵と、妙なる人の氣勢して、上衣を取つてかけたのを、法の衣を着る心地。

ぞツとばかりに身に感じた。

義士傳に手を支へ、明星を瞳に宿して、坐ながら半身伸上れば、燕が飛んで人もなく、唯松の風、浪の色、天人石に聲なうして、琵琶湖の水に調在焉。

あはれ恁るものをこそ、散らした酒肴恐しく、辰起は控と坐した。

「呀！」

唯見れば、傍に翁あり、白髪薄く頭禿げて、面長く棗に似たり。蠶のやうな眉白く、眠れる如き其眼ざし。袖なしをつけて、丈高く、長き杖を支いたるが、酒の瓶と、竹の皮を、靜に左右の袂に納むるなり。

「貴下は？」

といふに、敢て其の目を開かむともせず、從容として、影の如くに立つて、優しい口を堅く結

んだ、下唇やゝ解けて、

「淨めの手つだひをして進ぜる。」

「御老人！」

「私は其方の母親の父の弟ぢや。

大叔父ぢや、琵琶湖を船で渡つたあたりは、大事ぢやつたで、親類一門、其方の影身に附添うたわ、よいか。」

佛弟子、勉旃々々。

「今は此の山の神ぢや。」

少年行

一

「騒しい。」

卓子を磴と打つて、

「騒しい！」と一喝する、大音四邊に響いて、白首、緋の裾の女三人、派手な浴衣の袂から狐が落ちたやうに、きよとんとした。

女どもは、一個、大名縞のくすんだ袷に、茶博多の帶をきちんと〆め、籐の表、白の柔皮の緒の、薄い駒下駄を素足に穿いて、羽織は着ずに、椅子の手に引掛けた、痩ぎすな、鼻筋の通つた、目つきの優い、商人風の若者を取卷いて、歩行くのが倒るやうな、笑ぶのが悲鳴に似た騒ぎ方、とち狂つて居たのである。

夜は早や十一時を過ぎたのに、客足も未だ然までにない、夏の取ツつきの事なれば、此の三人の女、一人を紋着裾模様の奥さん風、一人を矢がすり、高島田の令嬢風、いま一人を何ういふ氣か、純白な服に赤十字、看護婦の扮裝に描いた、ペンキ繪の大看板が男を寄せつゝ繁昌する、此

のビイヤホオルも、星一つない暗の夜の表通に、變化の影が映りさうな、硝子戸越に燈が漏れて、中は、がらん。

客は、今件の若者と、――髪も伸び髯も伸び、背廣の服の折目ものびた、但眉の間の顰んで、目に稜のある、脊の高い、骨骼嶮く、巖の如き、學者風の人物、年紀は三十四五なると唯二人で。

喝したるはそれ紳士である。

聲は杯のビイルに震うて、座は窓かけとともに白け返る。

騒しい、と叱つたばかりで、見も返らず、肱をつくと、あらぬ方の、壁にかけた、如何な裸體美人の油繪を屹と見ながら、大の杯を腕長く、衝と正面に高く擧げた。殺氣四邊に滿ちて、其の胸の邊を取卷いた、空しい杯のすく〳〵と氷柱かと見えて並んだのさへ、ために劍を植ゑたる光景。

爾時まで、手足も袖も、口も、千條の絲で繰られたかと、目まぐるしいまで動いて居た、若者の身體は、ぴたりと止まつて、しばらくは瞳も動かず。

傍に二皿、三皿、一つの皿に半ば殘つた、青菜の艶に涼しい水鉢、凡そ小兒の一抱、ぎやまんの器に清水を湛へて、あはれ其の影に姿をひそめた一人の女。羅の袖ならましかは、雪の膚を透して、戀は不知火のやうに、ちり〳〵乳のあたりに徜徉ふであらう。緋に金色を交へた金魚の、

上になり、下になり、我を忘れて泳ぐのが飾つてあつた。
女どものありさまは、爰にいふ遑はない。
若者は手に持てる、銀煙管を、輕く置くと、右手をづッと其の金魚鉢。
手許に引いて、卓子から離した時、左手に底を持添へた。膝を斜めに、身體ごと、椅子の上から傾けて、土間にある、瀬戸ものの嗽壺にどッと倒に覆したが、勝手許を働く風情、平氣なもので、澄まして取直して、又舊へ。
女どもは二度吃驚。
「これへ、一杯、姉や。」と先づ澄ましていつた。
「えゝ、」
「何でございますか、」
そは〳〵して、
「どうなすつたの、」
「ビイル。」
「おビイル、」
と一人、あとの二人も變な顏。

二

「可いから、まあ可いから、注いで來なよ。慌てるな、お前たちに飲めとはいはない。」
と落着いたものである。
「お年さん、」
「おや、兎も角も取つて來るわ、」
二人で目くばせして、密と起つ。仕切が一段、此方は高く、床も麁末だが板で張つて、暖簾で隔てた向うは土間の、客にも段があるらしい。
島田が潛つて見えなくなると、唐縮緬友染のお太鼓が其のあとへ、續いて紅鼻緒の上草履、ばたばたと三人とも、汐を計つて退いて了つた。
「へい、お待遠樣でございます。」
女どもは憚つて避けたと見える。替つて給仕が、件のぎやまんの金魚鉢に、彩色した水を湛へて來て、密と卓子に据ゑると、其のまゝ身を開いて退つたが、竊むが如く若者の顏を一寸見て、すぐに暖簾を分けた。布の切目に、白躑躅、赤躑躅、夜目に、ちらほら洩れたのは、女どもが透見であらう。——時に、其の椅子に居直つて、ぎやまんに溢るゝばかりの、麥酒の泡に向つた若

者の面は、霜雪に對する如き、凛々としたものであつた。
兩手に受けて、ぴたりと取ると、肱を張つて、片頬を沈めるやうに口をつけたが、手に餘るばかりのビイルは、見る〳〵其の薄き褐色を消して、やがてぎやまんの底が見え、次第に消えて空しくなる。此の一滴の露を吸つた、蝶は靜に、其の雙翼をやすむる風情。若者は袖を合はせたが、瞬に花びらの影も留めず、依然として白面なり矣。
傍なる紳士は、思はず肩を聳かして、身構の傾くこと約三尺なるべし、愕然としたのである。
寂寞して、天井も高いやう。
手を鳴らすと、高く響いた。
「はい、」といふのが直ぐに一重、上草履は遠くから、白い首を暖簾の中、緋の蹴出しで、一段踏み、
「御呼び？」
「勘定だ、あゝ、一寸姉や、此方へ來てくれ。」
若者は、直ぐに引返さうとする女を呼んで、横向きになると、三ツ卷の懷中ものから、五圓紙幣を一枚抜き、
「勘定を、剩錢はお前だちで分けるんだ。」

「まあ、旦那、こんなに貴下、」
「何、些とばかり。お待ち、」と、未だ手に渡さず、紙幣を眞直に据ゑ、煙管を壓に置いて、熟と見る。女は妙な顏をした、勘定を五兩で取つては、御祝儀が餘りに多い。恐らく金子の格を見損じたのを、氣がついたんだわ。おや〳〵おや。
非ず、若ものは、かたりと椅子の脚を、腰を浮かすやうにして、卓子に眞正面に、つく〴〵と瞻つて打笑ひ、
「馬鹿め、ビイヤホオルの姉え三人といふものを生捕つて、夜ふけだといふのに、串戲ぢやない。抓るやら、擽るやら、あの騷ぎ方は何です。見ろ、彼方の旦那に叱られた。
お目障り、お耳障りは當り前だ、失禮な。お庇でお前の持主は、恁う聞きなよ、清水に杯を流すやうに、清く飲んで樂しまうと思つたのが、まるで大水でお流れさ。
皆お前の所爲だ、勘當ものです。
といつて又笑ひ、
「さあ持つておいで、」と押遣つた。女の呆氣に取られる内、煙管を筒に、帶腰へぐいとさし、づツと立つと羽織を着た、眞田の紐を上へ扱いて、茶の中折を手に提げた、左手の硝子戸は直ぐに麻布……

三

「待て、待て、待ちたまへ、しばらく、」と、烈しく足踏をして呼ばはつた。

紳士は肩も胸も動くばかり、大息をついて居た。

直ちに歩を止め、優しい顔で振返つた、目の色も透通つて、ぎやまんの酒は唯霧が晴れたとより見えぬのである。

女はあと退りに暖簾を背、驚破といはば遁げむず身構。

若ものはもの靜に、

「私ですか。」

「君ぢや、」と衝と座を放れた。電燈に目の輝くばかり、脊の高いのが、づか〳〵と寄つて、其處に若ものの居た他の一脚の椅子に、揺と腰を。

「好男兒、」と微笑した。濃い髯の中に白齒が幽で、

「失禮ぢやが、かけたまへ。詫をする。いや、實に濟まんことを申した、失敬ぢやつた、何とも恐縮千萬ぢや。」

「否、私こそ。」

「先づ、かけたまへ。

さて、何ともお詫のしやうがない。實はな、僕、些、むしやくしやすることがあつて、煩悶に堪へんで、……好な酒を苦く飲んで、頭を壓へて居た處ぢや、傍には、」

言正しく、

「どんな人が居らるゝか、そんなことは些とも知らん。で唯々、婦人どものきやつ〳〵といふ、奇聲がづん〳〵と耳に響いて、何とも不快に堪へんので、前後を辨へんで怒鳴つたが、喚くとともに、氣が着いて、大いに後悔をして、悄氣たのぢや。

それを何とも申されんで、飲むだけ飲んで歸らうと、大分量を一息に、今の痛飲は恐入つた。

羨しいな好男兒。君の風采には相應はんか知らんが、僕は野暮ぢや、好譬喩を考へん、蟒が蚊を飲んだほどにも見えんな、後生恐るべし。金子に對する君の言語も、申分なく我が意を得た、僕は、人事ながら、グッと溜飲を下げたぞ。

恁うすつきりと胸が空いては、向後禁酒をしても可い。

僕も隨分飲む、飲むが、君のやうに、酒落に、愉快に飲るのぢやない。殆どいふに忍びない鬱氣を紛らさうとして呷るのぢや。習慣となつてな、酒を飲んで苦痛を感じないものは一人もあるまい。と上は宴會のへゞれけから下は居酒屋のべいろしやに至るまで、凡そ目のふちに醉を帶び

たものは、皆一種の煩悶があるやうに感じて、自分も飲みながら、飲む人を見て氣の毒に考へた、酒に對しても濟まんわけだよ。

が、分量にかけては、僕必ず人後に落つまいと誇つたが、いや、お手際恐入つたな！はあ、舌を卷いたよ。

失禮をした上に、お呼び止め申した、が、僕も嚢中裕でない。特に其の計り知るべからざる酒量ぢやで、敢て仲直りに、君が醉倒れるまで獻じようなどと大言は放たんが、およそ何のくらゐいけますな。」と、紳士は手を膝にぴたりと一ツ會釋をして、やがて頭を上げて答を待つた。

若者は唯莞爾々々として聞いて居たが、こゝに紳士のいつたことは、はじめから委細心得て、其の思ふ旨を、すら〳〵と唯繰返されるのを待つて居たやうな樣子であつた。

親しく膝を交へつゝ、若ものは内端に俯向き、

「また、お目障りで恐入ります。何、貴下、私のは、ほんの附燒刃で、一向飲めますのではありません。」

「串戲を。」

四

「否、眞個、實は人眞似をしましたばかり。恁う申すと、嘸馬鹿なことをとお笑ひなさいませうが、――他所で何です、其の見事に大杯を傾けた人がありました。――見て居ても氣が遠くなるほど、可い心持のやうですから、内々、鵜烏で、遣つた見たくツてなりませんでしたが、内ぢや、親どもがさせません。

然うかといつて、又大勢居ます處では、どんな氣の疾い人があつて、二才め、生意氣なか何かで、張倒されでもしちや大變と、それも恐しうございますし、また何かはずみが無くては、迚も私には此のくらゐな、」

ぎやまんの鉢は未だ泡が殘つて、つひぞ覺えない酒の味に、胸の騷ぎが留まぬやう、穩かならぬ狀、可笑。

「此の大きなものでは、迚も思ひ切つて飲めませんから、貴下に叱られましたのをキツカケに、それから御仁體、決して喧嘩なぞなさいません、と安心して、詰らない眞似をしたんです、お賞めに預つてはお恥かしい。」

樣子を見て、安堵したか、婦人はつか〳〵と近寄つて、二人の前なる、煙草盆に手を翳して、

「お火を直して參りませう。」

「次手に、珈琲でも持つて來ないか、熱くして、」

「はい、」
「二個だよ、」と、若ものはいひ足した。
紳士は一度四邊を見たが、
「いや、益々お引留め申すやうぢやが、何か、眞似をなさつたのか。」
「えゝ、ほんの烏です。」
「すると未だ他に今くらゐ、飲る人があるんぢやね、」
「ありますッて。然もこんな水のやうなんではないんです。日本酒を、頃あひな丼に二杯、器が小さいといつたが、別に然るべきものがなかつたので、手水鉢で、」
「手水鉢で、」
「然うです、手水鉢へ八分目、恁う持つのは重いやうでしたが、唇へつけると、鵜です。見て居るものも、餘りの事に、好い心持になりましたよ。」
「何處で、ど、どんな人物ぢやね。」
「千葉でした。」
「下總の、」
「然うです。千葉縣、千葉の停車場から二三町入つた、左側の、一寸した居酒屋の店でした。」

「鯨が寄つたんぢや、」と紳士は快げに笑つていつた。
「否、江戸前の鰹のやうな、小造りな若い人です、而して二人です、二人とも、私くらゐの脊恰好、」と若ものも打微笑む。
「年紀ごろは、」
「矢張り似たり寄つたりでした。」
「すると、二十二三ぢやな。」
「雑と其のくらゐ、尤も一人はそんなにはいけませんでした。皆色の白い、品の可い男で、絣の着物を着たのと、背廣のと居たんですが、唯今申した、手水鉢は其の絣の方で。」
「絣にも、背廣にも、一體、そりや、何ぢやらう。」
「何ものとも分りません。」
「で、君は目のあたり見たですかな。」
若ものは打頷き、
「確に見たんです。私ばかりではありません、同じ席に婦人が二人見て居ました。」
「はあ、酌婦ぢやね。」
「否、身分のある立派な御婦人、府下で何とかいふ、有名な女學院の院長さんだといひます、年

よつた方と、最う一人は、其の嫁さんでございますさうで、二十一二の美しい人でした。」
紳士は聞くと、はたと何か胸を打つもののあつた狀に、一方ならず色が動いた。
「院長、女學院の院長といふ婆さんと、其の嫁ぢやとおつしやる。何う、何ういふ風でした。」
尋ねる聲に力を籠めたが、答は輕し。
「一寸した旅の風、」

五

「然うですね、院長さんか、其のお婆さんは、あれで五十七八、六十でせう、恐しく少造りだから。白髪は些ともない、いづれ染めちや居なさいませうが、べとりと塗つて、切髪で、お化粧は些と厚かつた。眞白でしたよ。でつぷり太つた、頰の垂れた、口のゆがんだ、眉の生えたのが、貴下、紋羽二重の被布、五ツ紋、紫の總を、金具のやうに打つけか何かで、仰々しい、勿論、白襟をかさねてね。」
「はあ、成程。」
「嫁さんです、若い方は。上げ切れないほど房りある、毛筋の柔かな、すなほな髪を、無雜作な束髪でしたが、飾りは簪も、何にもない。尤も、リボンといふ年紀ぢやありませんが、花をさし

たら、白百合も、紅芙蓉も似合ひさうな方が、眞に寂しい髪の容で、申せばハイカラといつて可い其の束髪が、不幸の時の毛卷きといつた風に、まつたく、ものあはれに見えました。
顏の色も然うでした。雪のやうに白いのが、却つて白粉でも濃くしたやうで、それにまた内氣な、謹み深いのが露はれます眉の濃いのまで、美しい生際に影をこしらへて、何となく曇つてましたね。清しい目も張がなく、弱々と俯向勝ちに、姑に引添うて居なすつた、これは衣服も質なやうで、振にこそ紅いのがこぼれましたが、すつぽり、コオトを着てでした、それも夜目には唯黑い。瘠せた方ぢやないんですが、撫肩で、恁う悄れて、」
若ものはあはれに語る。何となく引入れられて、紳士も首を垂れたが、思はず息を吐いて、
「何時の事か。」
「つい、此の四月の末でした。」
「千葉に於てぢや。而して、而して其の二人は、何か、どうかいふ變つた樣子でもなかつたですかね。」
「其の酒を飲んだ二人ですか。」
「むゝ、まあ其の二人もぢやが、婦人連は、」と、氣がさしたか些と口籠る。
然もあらむといふ面色。

「大ありです。」
見る〳〵顰んで、
「大あり、變つた事が？」と、半身を乘つて出る。
「其晩、千葉の居酒屋に入つて居ました、一番先客といふのが私で、實は雨やみをしたのでした。繁昌なやうでも田舍です。九時過ぎに着いた汽車ですから、停車場に一臺も車がありません。東京ぢや、先月の末あたり、日和癖で、曇り勝ち。大した雨も降りませんから、皆其の用意がなかつたやうです。
處が、其の日は、車夫大喜びといふ雨脚で、一汽車着く度にざつと來る工合だつたと申します。私が降りました時は、もう出拂つてありませんのに、停車場のあかりも陰氣に暗くつて、ばらばらプラットホオムを歩行く人の姿が、すぐにびしよ〳〵と消えてなくなる晩です。
待つてたら、途りつけた旅籠屋から、二臺や三臺、歸つて來ないこともなかつたでせうが、この、停車場といふものは、大勢のうちは然うでもありませんが、人數が少くなると、妙に空屋に立番をして居るやうで氣がさすもんです。
懷手で立つてゐるのも厭ですから、其處で雨の中を町の方へ入りました。土地不案内な心では、何處か辻へ行つたら、客待があるだらうぐらゐな考へで。

處がない。それに、兩側に四五軒づゝ、引手をかねた旅籠屋の茶店の前を通り抜けると、もう、ぼんやり、辻便所が黑く立つて、四邊は鼠色の田圃でせう。」

六

「大きな沼へでも入つた形です、雨はどツとひどくなる。
急に大川でも出來たかと心細いこと、其癖千葉は一度ぢやありません。前にも一寸參りましたが、其の時は出入りとも晝で、成田講の、樺色、淺葱の手拭が、ひら〳〵招いて賑でしたに。夜、雨と來ると酷い違ひやうで、大袈裟なやうですけれど、横澈を潛り抜けて、遙か向うの町の取附、居酒屋の薄暗い燈を目的に入つた時は、まるで、野末の一軒家へ辿りついた心持。……
酒は好ですが、此處へ、みこしを据ゑるべきでない。旅籠屋へ着いてから。しかし店つきには似ないで、佳い酒を賣るな、と三つばかり積上げた、菰被りの、堪らない匂を嗅ぎながら、大きなもので、ぬるい茶を飲んで休んで居ますと、今の、其の二人の御婦人でした。
コオトを着なすつた方が先に、深張の洋傘を疊まうとなさると、濡れしよびれて、附着いたか、やう〳〵かざしたのを取つて、店さきへ沈んだ顏を出しなすつた。雨が酷いばかりでない。何だか、人に見られるのを厭つて、と見て取つたも道理こそ。

其の方の、もの柔かな、しをらしいのに、押被さる、大ぶとりの被布姿で、引續いたのが、何と、鬢つけ澤山の切髪に、白粉べつたりの婆さんぢやありませんか。俗に年寄と二人歩行く、先へ少いのの行くのが娘で、あとへつかせるのが嫁だといひます。が、これは少い方がさきでした。けれども一目で母娘でない、姑があとについて居るんです。

其の段は可いけれども、何だか縄じりを取つて、追立ててでも來た體に見えましたのは、嫁さんの、おつとりして、ものあはれな様子にも依りませうね。

何しろ、五ツ紋も大變なり、一人のはでやかさも目覺しいから、居酒屋の亭主、目を充満に圓くして、慌てて腰かけの蒲團を直して、掌を前へ出して、首を引込め、小さな尻で、じり〳〵と退つて、

（はツ）と敬ひ奉る。

と婆さんは濡れるから、腕まくり。骨ぶとな上へ肉澤山、二の腕なんざ、こんなです。」手を圓めた若ものは、袖を開いて、兩手の指で腰のあたり、帶の上を押へながら、胸を正しく、すつきりとした姿で、

「其奴を、ちよい〳〵と引張りおろして、のそりとかけると、股が部厚だから乗つたやう、胸をそらして、背後に悄乎濡衣といふのを、じろり。

（掛けやれな。）

と、いや、厭な聲だ。

（何處ぞ、ことわつて置けばよかつたの、車の出迎ひのないことは、はじめてぢや、は、は、は、）

と笑ひました、さすがは年紀ね。

二重腮が、ぱく〳〵ぱく。

（はゝゝゝはゝ、此も教育ぢやな。）

などといつて、私の方を凝と流盼にかけられたんだが、御同然に、餘り惚々した様子ではございません。

亭主が恐る〳〵お茶を又奉つて、

（いづれへお越しさまで、）

（寒川ぢや、）と俯向いて鷹揚におつしやつて、鼻を寒川へ向けたんです。

が、貴下。

何うでせう、私は聞いたばかりで悚然としました。

おゝ、然ういへば、と思ふ、……お顔を見るのもお氣の毒なやうでした。悄れて俯向いておいでなさいます若い方を、心ならずも見直すと、まあ。

氣の所爲か、きちんと取上げておいでなさるが、それでも旅で、はらりと鬢の毛のこぼれたのも、黒髪が千筋に亂れて、のたを打つて、苦しむやう。しつとりと雨に濡れたコオトの袖の撫肩に細りしたのも、全身のあぶら汗を絞つて濡れ通るのかと思はれたんです。」

「何、何爲ですか、」

といひかけて、汚れた手巾で額を拭つた、紳士は酒がさめて色がよくない。

七

「何爲ッて、貴下。

前には銚子の方へ參る途中に、一寸千葉へ寄つたんですが、——二度目、——其時行きましたのは、……まあ〳〵其の御婦人のためだつた、と申しても可いくらゐ。

時に、寒川に一人、私の知己があるんです。

旅籠へは休んだばかり、湯から上ると直ぐに其の知己の許へ遊びに行つて、十二時頃まで飲みました。

其の男も隨分いける方なんですが、しかしこれは私に負けて醉倒れて了つたんで、それでは歸らうと、暇を告げると、細君が是非泊れ、といふのを、さしむかひの家ですもの、何だか眞中へ

入るやうで氣がありません。

無理に出ました。

若い同士だから、提灯は思ひも寄らず、さやうならと戸外へ出ると、軒下を離れるのが覺束ないほど、眞の闇。漆の如しッてんです。田舍道で暗いとなると、あゝまでかと思ひました。

東西少しも分らず、でもまあ、晝間來た方へ歸り足を蹈み出したんです。たか〳〵十町前後。何處へ轉んでも旅籠へ歸られるだらうと、高を括つたんですが、——さあ、困つた。

闇でも何でも、牴觸るもののない野原ででもあるなら、急に目が見えなくなつた、とあきらめて、夜のあけるまで踞んでも濟まされますが、時々冠木門が額際へぬッと立つたり、廂の端が鼻の先へづッと出るか、危險で堪りません。

鼻いきを荒くして、恁う手探りに貴下、其の內町角へ出たんです。空の色と、道幅が、何處か遠くで、ぽッと分れて見えますのが、何だか、いやな處へでも、自然と人を誘ひさうで、不氣味ッたらありません。

いかに夜が更けて居ればッて、恁うまで寂靜まつて了ふといふがあるもんか。小兒の乳を吸ふ聲か、鼠の騷ぐ音でもしないか。然うしたら、門へ行つて、せめて方角でも聞かうものを、と餘り寂として居ますんで、千葉ぢやこんな時刻には、氏神の申附けで一切もの音をさせないといふ

掟でもあるか分らん、と妙に怯氣も出ましてね、うつかり聲をかけるわけにも行かず。
腕ぐみをして貴下、しばらく立ずくみになりますと、自分が立つて居る足許から、路が少しづつ、左右へふら〳〵と動くんですね。
ふわ〳〵、搖れる氣がしませう。餘り希代だから、氣を鎭めて凝と考へると、何處か燈の漏れるのが、滅えさうになつて、又薄あかるくなるやうです。それで、此處だけは空と地との境目も知れるんですね。
十歩ばかり、家數二三軒、路を縫つて、透して行くと、あゝ、此處だと思ひました。
格子の中に、御神燈。些とそれも煤けたのが、ほんの滅え殘つたほどに點いて居たんですが、骨ばかり歴々と見えるくらゐ、薄ぼんやりになつて居たので、何か、其の筆太に書いてありました字は分りません。
此の家だけは、外面の戸が閉つては居ませんで、それに、其の御神燈を釣つた、土間の、取ッ着きの、上框の障子が片々、一枚細目にあけてあるんです。
中には、欠伸をしたやうに、大な紙の笠が仰向けに口を開いて、これも寢ぼけた釣洋燈、下に据ゑた長火鉢を取卷いて、婦人が三人、」
「婦人が三人、」

と息を詰めて聞いて居た紳士は鸚鵡返。
「御免なさい、願ひます、少々ものが承りたい、と二三度呼びましたが、返事をしません。尤も夜更けだから遠慮をして、低聲ぢやありましたが、つい手の屆きさうな近間に居て、聞えないわけはないが、居ねむりかと思つて、よく見ると、此方を向いて、むかう側に坐つた年増なんざ、目をくるり〳〵動かすのさへよく分つた。但し、恐しく痩つこけた、これから恁う、」
と眉を顰めて、若ものは口を結び、
「唇へかゝるほど、ばさ〳〵、髪の毛を亂しましてね、顏が藍のやうに眞蒼なんです。」

八

「火鉢のふちに頰杖ついた手首も仇白く薄汚れて、息苦しさうに俯向いた、のど佛も見えるばかり、肩もとがつて、骨立つたのが、黑縮緬の羽織、は何うです。
土器色に色の褪せた紅入唐縮緬の帶をお太鼓に結んだ、島田の婦人は、私が立つた門口へは背後向、これも憔悴てさ、鮪のどてを見るやうに、脊骨のごつ〳〵が露はれたのを、のろりと出した拔衣紋、ぴッたり臀を据ゑたんですが、淺葱のふきの、大層部厚なのを、引摺つて、ぐつたりして居る。

肩を並べて、くの字形に、もう一人、もみ上げの濃いのが、横顔でなほ目立ちました、これは銀杏がへし、矢張蒼ざめて肩でいきをする。が、ぶる〳〵と震へて、ひッかけの繻子の帶が、尻の下へ、しやくんだ風にずりッこけ、いかゞな緋の下〻が、上へ圓く弛んで、居ずまひの崩れた褄から……眞赤な奴をからみながら、丸ッこい脚を出して、ベッたりと横ずわり。……

就中、其の年增の額際の拔け上つた工合なんざ、婦人でいつた眉間尺、今にも蒼い火がめらめらとからめて、三ッがぐる〳〵と一ッになつて、座敷を舞ひながらすつと格子戸へ拔けて出さうでなりません、此を見ただけに悚然とする時、そりやこそと思ひました。

びしりと身に應へて、物凄い音。

ト三人とも、ひよろ〳〵と唯胸から上だけわな〻いて動く途端に、ぬうと土間の隅に黑く立上つたものがある。男か、女か、分りませんがね、それまで向うへ氣を取られて、私は心着かないで居たんです。

障子の外に式臺があつて、一人其處に腰をかけて居たんですよ、眠つてでもをつたんでせう。今のびしりで、驚いて棒立ちになつたんでさ。

ひらりと避けて、私は羽目に附着きました。誰も出て見るやうな樣子もないから、先づそれは可。びしり〳〵と何かものを引拂く、といつた音が、續いて段々烈しくなるから、見たくなつて

なりますまい。

丁ど可い鹽梅に角家で。

生垣について廻ると、其の家の横手です。幽に明が洩れるんで、透かすと雨戸が五六枚、物音は、あの緣側の内だ、と聞えますが、些とも見えませんから、づッと手繰つて、も一ッ裏へ廻つた、今度は塀になつて居ます。

溝板を蹈んだと見えて、カタリと響くから、音のしないやうに氣をつけて入りましたが、やう潛られるほど極く狹い、一方は藏の壁、隣家のらしい、それと塀の間の廂合なんです。まるであつらへたやうに、朽木なりに破目になつて、立派に燈が射します。突込んだら、私ぐらゐな身體は半分入りさうでした。

此處は、雨戸も一枚あけ、中の障子もしめないであつたは無理もない。

四月の末ですが、曇つて蒸熱い夜でしたから。正面に、一人、相撲ほどな大男、總髮で、眉毛の太い、目のぎよろッとした、小鼻の怒つて、鼻の低い赭ら顏、てら〳〵と光つて痘痕のあるのが、大きな紋附の兩膚を押脫いで、襦袢の襟の八文字にはだかつた、胸毛熊の如しでね、貴下。

便々と太鼓のやうに突出した腹に、さらしを幅廣く、ぐる〳〵と卷いて、鼠の無地の袴で、居丈高に身構へた、脊は然う高くはないんですが、節くれ立つた右の手に、六分ばかりの弓の折を

握つて居ます。

向合つて、これは座蒲團に、目に餘るほど大々した、四邊のいきれさうな油ぎつた身體を据ゑた、膝許へ金々した繻珍の信玄袋を引きつけて、仰向けに指を組んだ、幅の廣い、立派な服裝の婆さんが居るんです。」

「……」

紳士は唯目を睜る。

「眞中へ入つて、其の人肉の山に似た兩名に蒸されたら、絹絲はもつれませう。姿がよれたやうに引挾まれて、ぶる〳〵震へて居なすつたのは、可哀相に綺麗な奥さん、其の時は艶々しい丸髷でおいででした。」

九

「それも早や亂れましてね、おなじやうに暑くッてですか、それとも、婆さんの注意でもありますか、傍に薄色の羽織が脱がしてあつたのさへ、なよ〳〵とした姿からは、裸體にでも剝いだやうに、貴下、私にや殘酷に思はれましたよ。

で何のことはありません、一拷問して引起したといふ樣子です。

たしか、小紋縮緬を着て居なすつたやうでしたつけ。濃いお納戸に銀泥で何かあしらつた、丸帶を胸高に、きちんとしては居なさいましたが、支へかねたやうに何となく姿が亂れて、襦袢も褄も崩れて居る。大抵の御婦人に、それまで寢ないだけも、どんな苦みだか分りますまい。

尋常に目を塞いで、口許に愁を含んで、それでもふツくりした艶麗なお顏色だ。首の座に直つた姿で、玉のやうな頸を長く、押俯向いておいでなさる。

ト弓の折を、笏に膝頭へ突きそらして、袴の跨を開くやうにすると、乘出して、

（さあ、手を合はせる、手を合はせる。）

背後から婆さんが、

（こりや、手を合せ、とおつしやるが、）

（はい、）と小さく返事をなすつた、奥さんは、其のまゝ胸のあたりで兩手を恁う。……

（もつと確り、）ッて、向うから右の肱へ手をかけますとね。

（確りぢや、これ、）と背後から、婆どのが、貴下、奥さんの左の肱、兩方から上へ小突き上げる形にするから、あゝ、鬼に捉られて、宙に釣られはなさるまいか、と思つた。

腕が兩方へ張つて、合せた掌が眞中で堅うなりませう。こりや、誰でも、しばらくすれば震へが來ますね。

その時、何か、がや〳〵と呪文を唱へた、山伏め。

（お移りなされた、お下りなされた、妙法様お移りぢやぞよ。お下りぢやッ。そりや拜んで、拜んで、）

と怒鳴ると、奥さんは突伏したんです。

お氣の毒千萬な。疊についた前髪の上へ、白魚のやうな指をお組みなすつたのが、ぶる〳〵ぶる〳〵と動いて、兩方の肱が烈しく搖れる。

妙法さまなるものが乘り移つたんです。恁うすりや誰にでも乘移る。殊に氣の弱い神經の過敏な婦人には尙の事。それでも恐しいもので、やがて、十分ばかり、そんなにされておいでなさると、拜んだ指が、急には離れなくなると見えます。修行者が、解いて見ろ、指を解いて見ろ、とせたげるんで、一層酷く烈しく、肱が上下へ、指は稻妻のひらめくばかり、裾も浪を打つて、おあせりなすつたやうでしたつけ。引切る形で、合掌が解けたと思ふと、はずみでさ、友禪の襦袢の袖の裏、炎かと燃えて亂れた中に、二の腕あたりまで露出しになつたのが、帶の上へくるりとかへつて、兩方から犇々と寄つて、逆に背手に又ぎり〳〵と指がからんだ。まるで縛られた體におなりでせう。

（立去れ、立去れ、）といひます。何でも、病氣なり、禍なり、其の人の身に就いた、憑物を、恁

うして妙法の縛にかけて、追立てるんだ、といふ事です。——それは後で聞きました。

びしりは此處でさ。其のうしろ手にお組なすつたのを見ると、修行者は片膝立てて、乘かゝつた形になつて、弓の折をついて、やゝ五分ばかり白眼で睨めつけたつけ。鬢も疊に擦りついた奥さんの、片頰とすれ〳〵の疊の上を、ぷすり煙を立てては、びしり、びしり。

（退きをれ、酒くらひの鬼、退りをれ。）と呻つちや、口を四角に、唇をゆがめては、びしりと打つ。

背後から婆さんが、

（退きをらう、退きをらう、退きをらうぞ。）と詰寄ります。左をびしりの其時は右、右をびしりの其時は左へ、ひた〳〵と再の頰を擦りつけて、夢中ながら身を躱すやうになさるので、髷も傾く、根も弛む、鬢も崩れる。頭は一寸もお上げなさることは出來ないやうで、帶のお太鼓が、次第に上へ、あしずりをなさると、裳が向うへ深く入つて、」

「えゝ！」

十

「中にや坐つて合掌したまゝ、宙へ二三尺、裾を煽つて、鷄のやうにばた〳〵刎上る女なんぞ、

憑物に依つちやあるつて事です。

私は奥さんが、倒にお釣られなさりはしまいかと思つた、……すると貴下、」

といひかけて、若ものは、

「もう、申しますまい、殘酷です。……奥さんも人に見られるとお思ひなすつては、どんなお心持だか分りません、よします。」

「あゝ、」

思はず溜息を吻と吐いて、紳士は又汗を拭つた。

「言語道斷ぢや。」

「——寒川の妙法様は、大層な御利益で、東京から歴然とした方のお籠りがございます。お隣の松屋さんのお客ですが、當地の立派なお役人の奥様も、其處の生徒でいらしつたつて、豪い學者でおあんなさいますが、立派な女學院の院長さん、其の御養子の先生がお酒をめしあがつてなりません。御夫婦は一つ身體、旦那さまのかはりに、其の惡い御了簡が直りますやうにと、奥さんをお連れなすつちや、土曜日ごとに入らつしやいます。——

中には體のいゝ嫁いびり、妙法さまの拷問にかけて、夜一夜、慰んで居るんだ、あの水々した婆だもの、屹と口說くに違ひない。御養子が、お肯きなさらないから、戀の遺恨。身分がら、東

京ぢや出來ない仕事を、旨く考へやあがつた、なぞツて蔭口も申しますが、そんな事はありません、と斷つて、其の晩やつと泊りました旅籠屋の女中がいつたので、——はじめて、……昨夜のは幻でない、妙法とかの御祈禱だなと知つたんです。

其まゝ銚子へたちました。が、何だか氣にかゝつて堪りませんので、蔭ながら、もう一度見屆けよう、と次の土曜日に又すぐ參つたのが、——其の貴下、居酒屋で出會つた時です。」……

急き心に、言忙しく、

「それから、それから何うしましたか。」

「それですから、一目見て、何處かで知つたやうだ、と思つた處へ、(寒川へ行く、)と婆さんがいふのを聞いて、私は、もう、若い方の、しぶきにお濡れなすつたのを、すぐにあぶら汗と思つたくらゐ、奥さんは屠所の羊でさ、

(はて、車を呼んで貰はうの、)と院長婆さん。獨ごとのやうにいふから、亭主が呼びに行きや火の車だ、と私は又悚然としました。

戸外から、獸のやうに、敷居に刎上つて土間へ飛び込んだ。——奇怪な二人の若いものがあります。

尻端折の素足で、一人は雪駄を、ト帶に挾んだ。洋服のは、ずぼんを膝の上へたくし上げて、

ずり落ちさうなのを藁繩で結へたでせう。上衣をくる〳〵と卷いて引抱へた、腰から上は襯衣ばかり。額から雨を流して、ほう、ぷッ、といふと、一人は口の端の雫を切る、一人は頰邊の雨を扱いて拂つて、顏を見合はせて笑つたんですがね。

腰かけ樽をポンと蹴つて置直すと、一人は爪尖で引寄せた、丁度婦人方の眞正面へ。これから腰をかけようとして、

（亭主、酒だ、杯洗か、丼で二つ出せ。）といつて、袂から紙幣を出して、向うへ投げた。

洋服を着たのが、

（や、長井槇子刀自、當代教育界の女傑がおいでだ。敬禮！）……といふと、素直に立つて、其の貴下、怪しからん風體で、ぴたり、と額へ手を翳した。軍隊式で行つたんです。

其處へ、丼でなみ〳〵と出したのを、二人いき繼ぎといふ見得で、手元も揃つて、がぶり、と傾けて、すぐに干します。

（亭主々々〳〵、）

「はつ、」

（かはりだ、）と斜つかひに二つ、丼を押出して、又袂から紙幣を出して突きつけましたよ。」

十一

「（よく、入らつしやいました、學校も所々お掛け持ちで、些もお暇のない處、此の土曜日には如何かと存じましたが、よくこそお越で、雨でお困りでございませう、）と洋服の方が、慇懃に刀自に向つて申します。

（多勢お目にかゝるで、ついお見それ申す、何處か、慈善會か、婦人會か、教育會でもお目にかゝつたつけかの。）

（否、先生、）

といふ處へ、又丼。ひらり〳〵と取つて、呷つて、又ひらり〳〵と呷ッ了ひ。……

腕も斜つかひに並べて出して、

（亭主々々〳〵亭主、）

（は、はッ、）

（かはりだよ、かはりだよ。）

すぐに一枚、握らせるんです。

餘りのふるまひに、婆さんも毒氣を拔かれた目色でした。

（貴下方は、何誰ぢやの、）
（寒川のもんだ、）
（妙法だよ、）
（妙法といふ神様だ。）
婆さんは、希有な顏色、ぷつと膨れて、胸を張つて反りました。丁ど前へ來た丼を、がぶりとやつて、
（妙法様は酒のみだよ、お前の養子とは大の仲よし、）
（もう二三升、酒量が殖えるやうに守つて遣ら、信心しろい、）と洋服がふッ切つた。絣の方が横を向いて、
（亭主々々、）
（は、は、はッ、）
（もつと大なものに注げ。）
（へい、）
（待て、待て、）といふと、づいと立つて、傍の、庭から入り口、便所の前の手水鉢、八分目ばかり水が入つて、こゝへ、ばちゃ〳〵と雨の漏つて居たのを、兩手で引立てて、持つて戻つて、板

臺の上へ、うつむけにあげた。向うへ、どつと流れませう、裾から足袋へかけて、婆さんはびつしよりでさ。
（何をなさる。）
（お水だ、嘗めて置け。）と傍から洋服が聲をかけた。
（亭主、これへ注げ。）と手水鉢をずる〳〵とずらしながら、
（鹽で磨けよ。）
（はッ、）
（あゝ、亭主や、）
婆さんは自若たる體を示して、
（何、至急腕車をの、）
亭主がまだ、あ、といはぬに、
（亭主々々、）
（はッ、）
（亭主、）と高く呼びかけました。袂から、ぎらりと、右の手に取つたのは、誰にも見える、恁う、油も鐵も黑く輝く短銃一挺。

左の手には又紙幣を撮んで、
（腕車は一臺も……ないな！）
（へい、か、か、からッ不漁でござりまして、）と震へながら、がッ〳〵と、手水鉢へ、のみ口を捻つて居ます。處を洋服が、
（立つな、立つな、立つな、婆さん、一寸でも動くな。恁う、お前、教場で、生徒に倫理を講ずるッてな、私が話の内は、襟も直すな、袂も持つなといふつてな。
嫁さんのあらを手本に出して、教場で戒めるやうな、お前の教を、凝として聞いて居る女の兒なら、大道店の功能、見世ものの口上で、立窘みになつちまふぜ。
妙法さまのお話だ。――動かずに凝と聞いて居れ。
第一お前、其の面へ白粉を塗つたは何ういふわけだ。行儀にしろ、作法にしろ、おつくりにしろ、人に不快な念を抱かすのは法ではなからう。お前の面は無禮面だな、失禮な顏だ、胸の惡い顏色だ、酒ののめなくなる面だ。）
（然うだ、酒ののめない面だ、）といふと、臺の上に流れた、手水鉢の水を搔廻はした、平手で、ぴよいと、疾い事、婆さんの顏を逆に扱いた。鮟鱇の面、おこぜの如し、婆さん澁面を黑くなつて、面をうらがへしにしたやうですさ。

（さかなで、はゝはゝ、）
（飲めるな、）といつた時、其の大物に口をつけました。
いや、目覺しいの何のぢやない。
奥さんは、先刻から伏目に、唯俯向いて居なすつたが、もう手巾で顏をかくしてお了ひなすつた。
（其處で、）
と一人を見返ると、
（其處で、其の着て居るもんだ。お前、妙齡の娘に向つて、絹ものを着るな、飾るなといつて、私ほどになると、交際があるために、恁うしなければならん、といふとな。
妙法につき合ふのに、其の形裝ではいかん。我々を見ろ、半分裸だ。せめて鬱金色の長襦袢單つになれ。先づ被布を取れ、目障りだ、帶を解け、）
（引剝げ、面倒だ、）
といふと洋服がづいと立つて、突然、婆さんの襟首を摑んだ。
（わあ、）といふと、チヨンキナといふ手つきで泳ぐ。
（あれ、貴下、）

と堪りかねて、奥さんが、……優しいではありませんか、そんな奴でも姑と思つて、身體で、背後へお庇ひなさる。透を見て、潛り拔けようとして、よた〳〵となつて出る處へ、絣のが、ぬッと蹈出した、向脛にからまれて、づしん、地響きで、四ッ足で、紋羽二重の被布、切髪で、雨の中へ這出したつけ。呵々と笑うて又、殘つた半分を飲んだんです。

私は胸がすッきりした。

以來、寒川のぢやありませんが、其の二人の妙法の信者になりました。二三升上るやうに拜んで居ます、先刻は一寸稽古をしたんです。實は恁ういふ譯、」

と語つて莞爾。

紳士は唸るやうに、うむ、といつた。

「お話で前後が分つた。いや、しかし、腕力、行力、牛の横面を張倒したといふ、寒川の行者、鐵堂なる難物を、四月末の土曜日の夜半、――然うか、同一夜か。取つて伏せた、飛鳥の働き、一犇ぎにして、麻繩でぐる〳〵卷、修法の密室八疊敷の眞中へ、天井から倒にぶら下げて、フイと出て行つた。はじめ門口から、懷手でスーッと通つて、女を三人、巴のやうに、ぐる〳〵弓の尖で引廻はして居た處を、はと聲を懸けると棒立になつた、足の蹈指を取つてぐいと引いて横倒し、直ぐにうしろ手に縛つた。容貌婦人の如き美少年。居合はせたものは目のあたり見て、迷夢

を覺したが、何ものとも分らず、と一時新聞にも書いた、風説未だ止まぬ、當夜の美少年といふのは、」とつく〴〵瞻つた滿面に、感謝の色を湛へつゝ、

「お〻、貴下か、」

「……」

衝と左を差伸して、

「君ぢやらう。」

といふ、手に應じて、若ものは手を取つた。が、椅子を離れて立つて引くから、尊きものに導かるゝ思ひで、二足三足。うしろざまに戸を開けた、敷居際で、握手を解くと、飜つてフイと出た。

半身を突出して、遙に瞳を凝らしたが、右も左も暗の夜の麻布二丁目、辻の瓦斯燈に影もなかつた。

胡蝶之曲

一

南無妙法蓮華經、どこどんどこどん、どこどんどこどん、南無妙法蓮華經。

「南無妙法蓮華經。」

どゞんが、どんと太鼓の音。手も撥よりは太からず、窶れた顏を差俯向け、一心に打念ずる、二十ばかりの盲目の婦。浴衣の染は江戸ながら、浦吹く風に潮垂れて、海松布も亂れた中形や、地のお納戸は折からの晴々とした午の時過ぎも、帶に晝夜の夜の色、繻子の黑さが身に添うて、あゝ、烏羽玉の髪の縺れ、淺葱の手絡も眞蒼な露けき草の花に似て、頸白きもあはれである。

閉めた障子は青葉の影、開いた杉戸は夏木立、森とした本堂の板敷の上に畏まつて、どこどんどこどん。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無、日朝樣。」

欄間にづらりと掛け連ねた、〆 と右から左から、めの字を並べた繪馬の他、見るものもなく唯一人。

「日朝樣、」と心を籠めて打奉る、精進の腕は撓まねども、世は日盛の晝寢時、と婦心のしをらしく、太鼓の低う內端なのも、雨さそふ谷の蛙の音に立ちて、却つて村へ響いて聞えた。

相州三浦郡田越村、本昌寺の住職日溪とて、色の生白い、眉の濃い、頰肉の落ちた、口の曲つた、目のきよろりとした若僧。取着本堂の傍なる襖を開けて、四邊をみまはすと、婦一人、悄然と小さく坐つて誰も居らず。

見て北叟笑したのであるが、祖師も日朝樣も什麼生、お木像だ、といふ度胸。

影が襖から出たやうな、鼠の法衣、平括けの白の唐縮緬の帶、些と据腰、まくり手に團扇を提げて、のそり〳〵。

疊は處々破れても、廣いから、摺足の爪先にも引かゝらず、お上人お練りの形。やがて板敷に跫音を忍んで、徐に其の背後に寄つた。

日溪は、婦の襟の白いのを熟と覗いて、口を曲げて片頰笑して、見惚れて首垂れると、がツくり抜衣紋になる、其の肩をぶらりとさげて、うしろ手に、拇指を捻つて、くる〳〵と團扇の柄。

釣れますかといふ身で、少時〻に彳んだが、蹲んで、斜ッかひに擦り寄つて、蟋蟀に立てた膝頭へ、兩肱を支柱棒。團扇を眞向にぴたりと構へて、骨の間から更めて其の淸らかな耳朶のあたり、橫顏を見入つたが、盲ひて未だ日や淺き、信心に一三昧か、傍に人ありとは、露ばかりも

心着いた風情なく、偏に音を刻むのである。

日溪は頸を窘め、笑を殺した頰を膨らし、唇を尖らして、頤で狙つて、鬢の縺れを向うへ、フツ。さらぬだに黒髪の思ひに亂るゝ日頃なり、はら〳〵と降りかゝる、雨も涙も分かぬ身の、口で吹かるゝ後れ毛なんど、何とて心にかゝるべき。

「南無、日朝樣。」

「應、」と答へて、唐突に、肩を團扇で礑と遣る。

「えゝ、」

「お辻い。」

「……」

日溪團扇から顏をぬいと、

「ばあ——」

午飯の、ぬたの息。

二

「はゝゝはゝ、人間を迷はせ足らんで、又日朝樣を口說きに來たな、罪造りめ。」

未だ其の人か鬼かを辨へないで、不意に恍惚しながら堅くなつた、お辻といふ土地の漁師の娘の肩を、日溪又一ツ不作法にトンと向うへ突いたが、沈んだ婦は、膝も浮かさず。

裾をずらして身を開くと、褄を合はせ、ちやんと手をつき、

「まあ、お上人樣でいらつしやいますか。」

「お上人樣でいらつしやるがね、あゝ、」といつて、頰がこけたやうに口を横に開け、獨で笑ふ。

「お暑うございます。」

「おゝ、暑いがね。」

「それでもお天氣で結構でございます。」

「お天氣で、……結構だがね。」

と同じ事、上の空に聞き流されて、婦は附穗なさに差俯向く。

柔順に美しい前髪を、毛脛の下へ潛らすばかり、正面に蹈はだかり、

「何うぢや、目の方は。」

「はい。」と、力のない曇つた聲。

「此の暑さでは尙よくあるまいが、何うかな。」

「はい、別に、あの、惡いと申します方でもございませんです。」

「可い方でもなからう、」
「は……い。」
「はゝあ、御利益もないのかな。」と、稍嘲を帶びたるものいひ
「はい、否、勿體なう存じます。此の靈驗炳焉な日朝樣の、御利益が薄いことはございません、恁うして、あの。」とあはれな面を僅に擡げ、
「一生懸命に、お拜み申して居りますんですが、まだ私の信心が足りませんのでございますよ。」
「何、何、何さ、お前、日朝樣になりかはつて、拙僧がよく見屆けて居るぢや。信心の足りんことは決してない、信心は十分ぢやが、實は、御身の罪障が深いのだよ、うゝ。」と一つ頤を撫でる。
「ですが、あの。」
「否さ、御身ア村でも評判の孝行ものぢや。氣質も優いわ、自分から手を出しては、そら其處らにぞろ〳〵這つて居る、蟹の鋏一ッもぎつた事なし、蜻蛉の片羽、折つぺしよつた事もなからうがな。はて、其處が卽ち前世の業ぢや。前世の宿業どころかい、生れてから此方、日に幾人づゝ男を殺したか知れまいが、其の事よ、何と罪障ぢやろ。」
と團扇でばつさり。
「それだでな、此の間もいふ通り、どうだ、お辻、これさ。」と背中を壓へて居た團扇を縱にして

肩を叩き、
「な、方丈へおいで。惡いことはいはん。私が進ぜる藥といふは、當山相傳の妙藥ぢや、あゝ、お辻、これさ、姉え。」
まだ是でもかといふ如く、團扇で頻に叩かれて、お辻は、どぎまぎ。
「難有う存じます。」
「あい〳〵、しかし何、禮には及ばんよ、さあ、おいで、遠慮は要らん。」
「難有う存じます。」
「あいさ、禮には及ばんよ、おいで、おいで。」
「あの、後ほどに、また、」
「分らんかい。當山相傳、門外不出、分つたか、分つたか……」

三

「それ〳〵、御身ア其の不心得ゆゑに目が治らん。
不思議に本復する……祕法の目藥を進ぜようといふに、何を、何を愚圖々々して居るんだな。
これ、御身ア何のために、毎日恁うやつて、炎天をお寺へ通つて、日朝樣を信心するよ。唯其

の目が治したいばかりであらう。
早く、拙僧ぐらゐに清しくなれ。」
と獨でニヤ〳〵。
「御身ア何と、村の者が、本昌寺の上人の目は、水晶のやうぢや、爭はれん、日朝樣の御益利と、蔭でいふのを聞いて居ようが、何うかね、聞かんかね。」
お辻は止むことを得ず、
「然う申してでございますよ。」
「喃、目も清しいわ、色も白いわ。」
まくり出して日溪上人、
「これ、藥を進ぜるといふに、御身ア要らんのかい。」
「どうぞ、頂きたう存じます。」
「ほう、頂くか、さあ、おいで。」
「あれ、私は、あの、内へ頂いて參りたいのでございます。」
「分らんな、門外不出ぢやといふに。」
日溪は、（さあおいで）無手と取つた手を放さず、袖口とともに引掴まれて、衣紋の辷つた恥かしさに、摺り拔けようと座をずらす、膝もわな〳〵、震へながら下へは置かぬ、撥の丈ほど蹂り退けば、同一ほど蔽はれかゝつた、日溪は面を差寄せ、
「これ、婦は氣が弱いで、氣の毒ぢやと思ふから、何にもいうては聞かさんがな、太鼓を敲いて、お題目か、日朝樣を念じたぐらゐで、御身が其の目が治らうかい。
御身が父親は何が家業だ、これさ、靜として聞けといへばな。
な、漁師であらう、釣だ、網だ、とそれ何のくらゐ魚の生命を取るか知れん。あの又、魚の死ちた奴に目を塞いだのが一尾でもあるか、考へて見たがいゝ。
怨ぢやな、一念籠つて眼を睜りぢや。いや、殺生をするものには、何か知ら祟りがあるわ、御身がのは親の因果で、此のソレ可愛い目に報つたのだ。
何と恐しかろ。いはれ因緣を聞いて見れば、御身が心でも、これは成程、つい通りのことでは願が屆かぬ、と覺悟が出來うが。
喃、此處だ。
其處で、其の業を滅するには、捨身の行といふのをする。それ、歌に、（身を棄ててこそ浮ぶ瀨もあれ、）身體をないものにする事ぢや。
はて、驚くなかれさ、身體を亡いものにするというて、此の手を、此の顏をよ。」

と日溪上人、傍若無人、勿論、傍若無人でない事はないのである。
「俎の上で切れともいはねば、鐵弓に乘せて炙けでもない。又此のさ、咽喉へ鈎を引つかけた酬に因つて、首を縊つてぶらさがれといふでもないわ。
ないがの、いや、それほどにせねば、幾億萬と殺生した鱗屬の怨は消えまい。
で、其の、さしづめ治らんのだ。咽喉を釣つたり、鐵弓で炙いて、生命のあるものが何處にある。けれども然うでもせん事には、鱗屬の祟は退かずか、怨敵退散せん事には、其の目が治らず、として見れば、こりや御身ア今生では願が屆かぬ、生れかはらにや明くまいかい。」
お辻は聞くうちに色蒼く、肉を絞つて垂々と冷い汗。

四

「おゝ、泣くか。」
と日溪横ざまに紅の舌を吐き、
「可哀や、其處ぢやわ、お辻、それぢやからお釋迦樣も、衆生は不便と仰せられた。それをさ、よく說いて聞かせての、助けるのが出家の役、拙僧も身に替へて不便ぢやに因つて、藥を進ぜようといふのではないか。

門外不出といふのは此處だよ。
とりもなほさず、其の捨身の行をしろといふのだ。
處が、何も、手足を俎で切れではない。
佛、說かせられたには、操は婦の鏡也、鏡は婦の生命也、可いかね。
可いかね。
捨身は、身を捨てると書くよ、可いかね、善哉。
怨敵忽ち退散に及んで、眼病は卽座に治る、可いかね、善哉。
然うかというて、捨身の行を、村の若いものなどに修すると、それは早や……なほ更罪を重ねるわ、可いかね。善哉。
すべて佛緣のあるものでなうてはいかん、佛に緣さへあるものなら、鬼でも蛇でも大事ない。
お釋迦樣も、宿業を果すために、鬼に身體を遣はされたぞ。
處を、鬼かい？日朝樣になりかはつて、御身の罪障を消滅させて遣らうといふのぢや、これ、分つたか、うゝ。」
「あ、」
「いよう、」といふと、何うしたか、お辻は其まゝ眞俯伏。日溪うしろざまに尻をついて、どたり